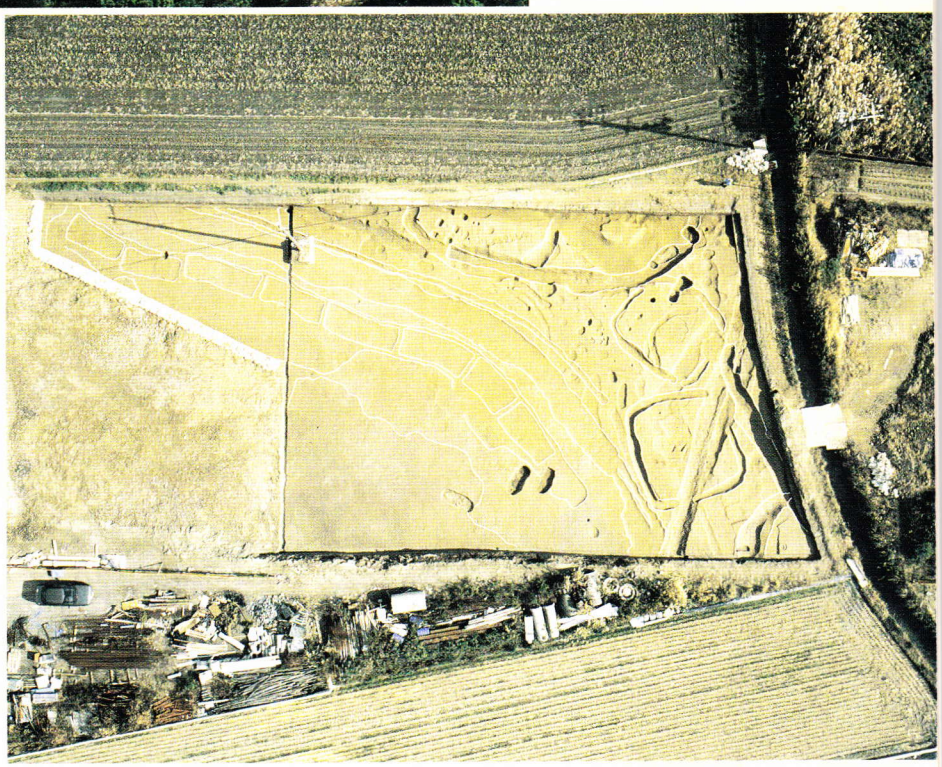
和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報 3

―― 平成 4 年（1992）・平成 5 年（1993）年度 ――

城山遺跡



鳴神V遺跡第 3 次調査

1996

財団法人 和歌山市文化体育振興事業団

序　文

本年報は、主として当事業団が平成４年度と平成５年度の２年間に行った発掘調査の概要をまとめたものです。

調査の結果、車駕之古址古墳の全容を推定するための資料を得たこと、茶臼山古墳に関する遺構を初めて検出したこと、鳴神Ｖ遺跡で古墳時代の水田遺構の検出など、多くの重要な成果を明らかにすることができました。当事業団の調査による新たな学術成果は、郷土の古代史を語る上でなくてはならない視点を与えることとなりました。本書が広く私たちの郷土に関する歴史知識を豊かにすることを願ってやみません。

本書出版に際して、発掘調査にあたって多大の御協力をいただいた地元の皆様及び本書編集にあたり種々御教示を賜わりました先生方に厚く御礼申し上げます。

平成８年３月31日

財団法人 和歌山市文化体育振興事業団

理事長　　筒井　敏郎

例　言

1、本書は、平成4（1992）年度及び平成5（1993）年度に実施した和歌山市内における埋蔵文化財発掘調査の概要を掲載するものである。

2、本書に掲載の調査について既に報告書を刊行したものもある。未刊のものについて報告書が刊行された際には、その報告書をもって正式報告とする。

3、トレンチとは溝掘りによる調査区で、グリッドとは坪掘りによる調査区を指すが、対象地の状況や調査の進行状況にもより厳密には規定できない。よって、調査時の設定に従って使用した部分が多い。

4、本書の執筆については各調査担当者がこれにあたり、編集は北野隆亮が行った。各執筆分担は文末に氏名を記載した。

5、埋蔵文化財発掘調査は以下の事務局組織で行った。

【事務局組織図（埋蔵文化財関係）】

【平成4年度】

和歌山市教育委員会

教育長	浅井周英
文化振興課長	安井紹郎
文化財班長	松本信明
文化財専門員	大野左千夫

財団法人和歌山市文化体育振興事業団

理事長	海野榮喜男
事務局長	木下正昭
事務局次長兼総務課長事務取扱	尾崎好昭
主任（埋蔵文化財事務担当）	小松義博
学芸員（埋蔵文化財発掘調査担当）	前田敬彦
学芸員（〃）	益田雅司
学芸員補（〃）	木村善晶
学芸員補（〃）	栗本美香

【平成5年度】

和歌山市教育委員会

教育長	浅井周英
文化振興課長	安井紹郎
文化財班長	松本信明
文化財専門員	大野左千夫
学芸員	前田敬彦

財団法人和歌山市文化体育振興事業団

理事長	海野榮喜男
事務局長	堂村　弘
事務局次長兼総務課長事務取扱	尾崎好昭
主任（埋蔵文化財事務担当）	小松義博
学芸員（埋蔵文化財発掘調査担当）	益田雅司
学芸員（〃）	北野隆亮
学芸員補（〃）	井馬好英
学芸員補（〃）	木村善晶
学芸員補（〃）	栗本美香
学芸員補（〃）	奥村　薫

本　文　目　次

Ⅰ．はじめに……1

平成４（1992）年度の調査、平成５（1993）年度の調査

Ⅱ．埋蔵文化財の発掘調査概要……6

【平成４（1992）年度】

1.権現山１号墳他 確認調査……6

2.東山東地区 遺跡確認調査……10

3.城山古墳 確認調査……12

4.岡村遺跡 発掘調査……14

5.城山遺跡 発掘調査……16

6.鷺ノ森遺跡 第４次調査……20

7.鳴神Ｖ遺跡 第２次調査……26

8.車駕之古址古墳 第４次調査……28

【平成５（1993）年度】

9.史跡和歌山城 第１２次調査……34

10.鳴神Ｖ遺跡 第３次調査……40

11.寺内古墳群 確認調査……48

12.垂水遺跡 確認調査……54

13.茶臼山古墳 確認調査……56

14.車駕之古址古墳 第５次調査……60

15.川原崎遺跡 発掘調査……66

16.太田・黒田遺跡 第２３次調査……72

17.太田・黒田遺跡 第２４次調査……74

Ⅲ．普及啓発活動……78

Ⅰ．はじめに

平成４（1992）年度の調査

和歌山市における平成4（1992）年度の本事業団の発掘調査受託事業は8件である。

調査に至った原因としては、宅地造成に関わる開発が多く、比較的道路建設などの公共的なものが減少傾向にあるといえる。

これらの発掘調査で、いくつかの重要な成果が得られているので、以下時代毎にまとめることとする。

縄文時代　縄文時代の調査は、遺構は検出されていないが鳴神Ｖ遺跡で滋賀里Ⅳ式から船橋式に併行するとみられる深鉢が１点出土した。

古墳時代　古墳時代の遺跡の調査は、車駕之古址古墳・鳴神Ｖ遺跡がある。車駕之古址古墳では範囲確認調査により、古墳外堤部分の葺石等を検出した。鳴神Ｖ遺跡の調査では、古墳時代中期以降の遺物包含層を確認した。

奈良～室町時代　平安時代の調査は、岡村遺跡で黒色土器等の遺物が出土している。

鎌倉時代の調査は、四季の郷緑化果樹苑予定地内及び岡村遺跡で瓦器等の遺物が出土したにすぎない。

室町時代の調査については、城山遺跡で山城に伴う土塁・門柱礎石等を検出した。

江戸時代　江戸時代の調査は、鷺ノ森遺跡（本願寺跡）の調査がある。本願寺跡の旧本堂・御主殿・能舞台を検出した。

【1992年度調査一覧表】

番号	調査名	原因	調査期間	面積	調査概要	担当者名	備考
1	権現山１号墳他確認調査	宅地造成	５月～６月	130㎡	明確な遺構・遺物は検出せず	益田	
2	東山東地区遺跡確認調査	果樹園拡張工事	８月～11月	150㎡	平坦部で中世の遺物包含層を確認	木村	
3	城山古墳確認調査	宅地造成	10月	122㎡	明確な遺構・遺物は検出せず	前田	
4	岡村遺跡発掘調査	住宅建設	10月～11月	24㎡	中世の遺物包含層を確認	木村	
5	城山遺跡発掘調査	宅地造成	12月～４月	1500㎡	中世山城、土塁・門柱礎石等検出	益田	
6	鷺ノ森遺跡第４次調査	本堂建替工事	１月～２月	700㎡	本堂・御主殿・能舞台を検出	前田	
7	鳴神Ｖ遺跡第２次調査	市道建設	２月～３月	72㎡	古墳時代中期以降の遺物包含層を確認	木村	
8	車駕之古址古墳第４次調査	古墳の範囲確認	２月～３月	249㎡	古墳外堤部分の葺石検出	前田	

平成５（1993）年度の調査

和歌山市における平成５（１９９３）年度の本事業団の発掘調査受託事業は７件である。また、和歌山市教育委員会が直接に発掘調査をおこなった事業を２件あげることができる。

調査に至った原因としては、道路建設・下水道管の埋設などの公共的なものが主体を占め、住宅建設などの個人に関わる開発が減少傾向にあるといえる。

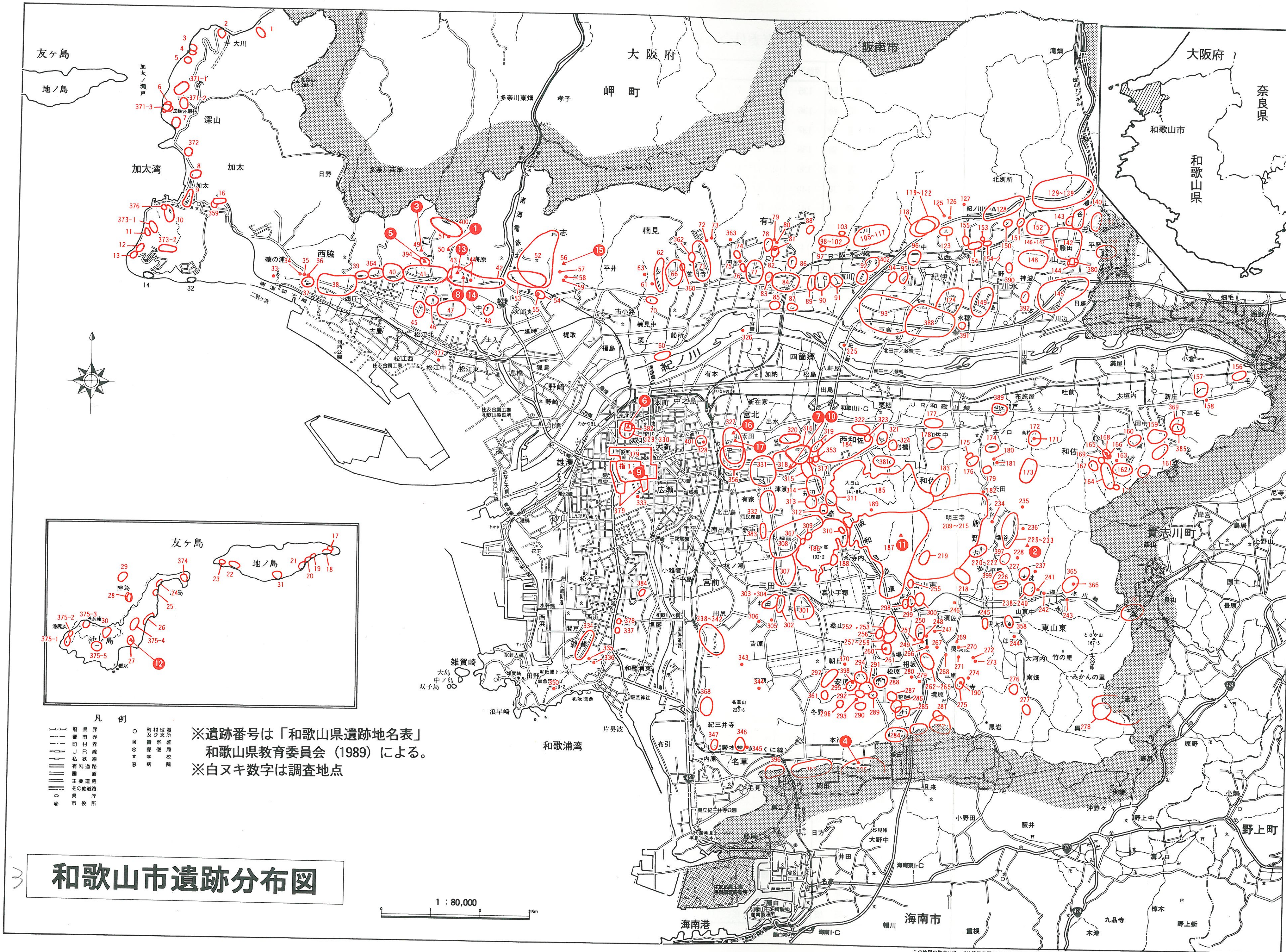
これらの発掘調査で、いくつかの重要な成果が得られているので、以下時代毎にまとめることとする。

弥生時代　弥生時代の遺跡の調査は、太田・黒田遺跡で第23・24次調査として行った。第23次調査は遺跡の北縁部にあたり、従来遺跡の内容が希薄になると考えられていた場所であったが、中期を中心とした遺構面・遺物包含層を確認し比較的多くの土器が出土した。第24次調査は遺跡の北東縁部で、中期の遺構面を２面確認した。遺構は土坑・溝などの他、壷棺が１基検出された。この他、遺構は検出されていないが、鳴神Ｖ遺跡で遺物包含層から後期の土器が出土している。

古墳時代　本年度は古墳時代の遺跡の調査が最も多く、鳴神Ｖ遺跡、寺内古墳群、垂水遺跡、茶臼山古墳、車駕之古址古墳、川原崎遺跡がある。このうち古墳の調査として

【1993年度調査一覧表】

番号	調査名	原因	調査期間	面積	調査概要	担当者名	備考
9	史跡和歌山城第12次調査	下水道管埋設	５月～10月	967㎡	石組（石垣、礎石、排水施設、門基底部等）検出	益田・井馬・奥村	
10	鳴神Ｖ遺跡第3次調査	市道建設	６月～２月	3000㎡	古墳時代前期水田、古墳（方墳７基）	北野・木村・栗本	
11	寺内古墳群確認調査	実態確認	８月～９月	700㎡	新発見の古墳（横穴式石室）を多数検出	前田	市教委調査
12	垂水遺跡確認調査	電気ケーブル埋設	８月	4㎡	古墳、平安時代の土器出土	大野・前田	市教委調査
13	茶臼山古墳確認調査	浄化槽埋設・実態確認	10月～12月	50㎡	円筒埴輪列検出	益田	
14	車駕之古址古墳第５次調査	範囲確認	11月～１月	200㎡	前方部と周濠の一部を検出	井馬・奥村	
15	川原崎遺跡発掘調査	果樹園開発	２月	200㎡	火を受けた方形土坑２基検出	北野・木村	
16	太田・黒田遺跡第23次調査	事務所建設	３月	7㎡	弥生時代の溝状遺構検出	井馬・栗本	
17	太田・黒田遺跡第24次調査	共同住宅建設	３月～５月	300㎡	弥生時代の壷棺等検出	井馬・栗本	



この地図の作成に当っては建設省国土地理院発行の２万５千分の１地形図及び５万分の１地形図を使用しました。
この地図の無断複製を禁じます。1993-9

和歌山市遺跡地名表（「和歌山県遺跡地名表」和歌山県教育委員会〈1989年〉より作成。一部訂正、追加。）

遺跡番号	名称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名称
1	報恩講寺遺跡	45	木本小学校Ⅰ遺跡	93	田屋遺跡	135	山口7号墳	177	河南中学校北方遺跡	249	城ケ森3号墳	292	曽垣田Ⅱ遺跡	336	天神山古墳	376	行者堂東遺跡
2	大川西方遺跡	46	木本小学校Ⅱ遺跡	94	府中Ⅱ遺跡	136	山口8号墳	178	和佐中遺跡	250	城ケ森遺跡	293	曽垣田古墳	337	秋葉山貝塚	377	松江経塚
3	藻江遺跡	47	榎原遺跡	95	府中Ⅲ遺跡	137	山口9号墳	179	和佐寺跡	251	相坂古墳	294	城ノ前Ⅱ遺跡	338	アンドの鼻古墳	378	猊口石岩陰遺跡
4	しょうぶ谷遺跡	48	中野遺跡	96	府中遺跡	138	山口10号墳	180	禰宜1号墳	252	千石山5号墳	295	城ノ前Ⅰ遺跡	339	三田1号墳	379	和歌山城跡
5	水谷遺跡	49	城山古墳	97	北山Ⅰ遺跡	139	山口11号墳	181	禰宜2号墳	253	千石山古墳群	296	大池遺跡	340	三田2号墳	380	山口御殿跡
6	男良の谷遺跡	50	権現山1号墳	98	北山1号墳	140	山口廃寺跡	182	和坂古墳	254	菖蒲谷遺跡	297	赤津古墳群	341	三田3号墳	381	岩橋Ⅱ遺跡
7	深山遺跡	51	権現山2号墳	99	北山2号墳	141	中筋日延遺跡	183	和佐古墳群	255	吉礼Ⅲ遺跡	298	吉礼貝塚	342	三田4号墳	382	本願寺跡
8	大谷川遺跡	52	高芝遺跡	100	北山3号墳	142	山口遺跡	184	花山古墳群	256	千石山遺跡	299	西吉礼遺跡	343	吉原古墳	383	神前Ⅱ遺跡
9	加太遺跡	53	高芝古墳群	101	北山4号墳	143	谷遺跡	185	岩橋千塚古墳群	257	井戸1号墳	300	東吉礼遺跡	344	広原古墳	384	高松焼窯跡
10	加太南遺跡	54	栄谷貝塚	102	北山5号墳	144	里遺跡	186	井辺前山古墳群	258	井戸2号墳	301	和田遺跡	345	内原古墳	385	奥山田古墳群
11	平の谷遺跡	55	貴志古墳	103	北山Ⅱ遺跡	145	川辺遺跡	187	寺内古墳群	259	井戸3号墳	302	和田岩坪遺跡	346	内原遺跡	386	大池遺跡
12	田倉崎Ⅰ遺跡	56	川原崎遺跡	104	北山6号墳	146	藤田古墳	188	森小手穂遺跡	260	馬場古墳	303～304	和田古墳群	347	名草貝塚	387	大旗山城跡
13	田倉崎Ⅱ遺跡	57	川原崎1号墳	105	直川八幡山1号墳	147	硲古墳	189	寺内ナイフ形石器出土地	261	馬場遺跡	305	竈山神社古墳	350	高津子山古墳	388	西田井遺跡
14	船出遺跡	58	川原崎2号墳	106	直川八幡山2号墳	148	藤田遺跡	190	頭陀寺ナイフ形石器出土地	262	東池1号墳	306	坂田地蔵山古墳	352	金谷廃寺跡	389	井ノ口遺跡
16	加太駅北方遺跡	59	川原崎3号墳	107	直川八幡山3号墳	149	宇田森遺跡	209～215	山東古墳群	263	東池2号墳	307	神前遺跡	353	興徳寺跡	390	神波遺跡
17	藻崎北浜遺跡	60	国有本遺跡	108	直川八幡山4号墳	150	上野廃寺跡（紀伊薬師寺跡）	218	若林古墳群	264	東池3号墳	308	井辺遺跡	356	太田城跡	391	永穂遺跡
18	藻崎南浜遺跡	61	大谷古墳	108-2	直川八幡山14号墳	151	上野遺跡	219	吉礼砂羅谷窯跡	265	東池4号墳	309	岡崎縄文遺跡	357	山崎山古墳群	392	楠本遺跡
19	藻崎西方遺跡	62	晒山古墳群	109	直川八幡山5号墳	152	上黒谷遺跡	220	平尾1号墳	266	吉里銅鐸出土地	310	森小手穂埴輪窯跡	358	山東中遺跡	393	吉田遺跡
20	神前東浜遺跡	63	慶円寺裏山古墳	110	直川八幡山6号墳	153	北野窯跡	221	平尾2号墳	267	小山古墳	311	大日山Ⅰ遺跡	359	加太Ⅱ遺跡	394	城山遺跡
21	神前西浜遺跡	66	雨が谷古墳群	111	直川八幡山7号墳	154	北野遺跡	222	平尾3号墳	268	奥須佐窯跡	312	井辺Ⅰ遺跡	360	雨が谷遺跡	395	岡村遺跡
22	屋敷浜遺跡	70	楠見遺跡	112	直川八幡山8号墳	154-2	北野Ⅱ遺跡	226	楠古墳群	269	円満寺古墳	313	井辺Ⅱ遺跡	361	冬野遺跡	396	室山古墳群
23	おそ越の鼻遺跡	71	鳴滝古墳群	113	直川八幡山9号墳	155	若宮池遺跡	227	足守神社古墳群	270	峯古墳	314	鳴神Ⅱ遺跡	362	鳴滝遺跡	397	明王寺遺跡
24	一色谷遺跡	72	奥出古墳	114	直川八幡山10号墳	156	上三毛遺跡	228	赤山古墳	271	西光寺窯跡	315	鳴神Ⅲ遺跡	363	園部円山古墳	398	城ノ前1号墳
25	柏の浜遺跡	73	有功経塚	115	直川八幡山11号墳	157	下三毛遺跡	229	塩谷1号墳	272	吉里1号窯跡	316	鳴神Ⅳ遺跡	364	西庄Ⅱ遺跡	399	平尾遺跡
26	深蛇池遺跡	74	薗部Ⅰ遺跡	116	直川八幡山12号墳	158	小山古墳	230	塩谷2号墳	273	吉里2号窯跡	317	鳴神貝塚	365	永山遺跡	400	木ノ本Ⅳ遺跡
27	垂水遺跡	75	薗部古墳	117	直川八幡山13号墳	159	寺山古墳群	231	塩谷3号墳	274	頭陀寺古墳	318	鳴神Ⅴ遺跡	366	永山古墳	401	友田町遺跡
28	神島遺跡	76	薗部Ⅱ遺跡	118	八王寺山古墳群	160	東国山古墳群	232	塩谷4号墳	275	頭陀寺遺跡	319	音浦遺跡	367	井辺Ⅲ遺跡	402	府中Ⅳ遺跡
29	沖の島北方海底遺跡	77	有功遺跡	119	橘谷Ⅰ遺跡	161	宮山古墳群	233	塩谷5号墳	276	大将軍窯跡	320	鳴神Ⅵ遺跡	368	紀三井寺遺跡	指1	史跡和歌山城
30	野奈浦遺跡	78	池田遺跡	120	橘谷Ⅱ遺跡	162	小倉古墳群	234	新出古墳	277	有ノ木窯跡	321	岩橋遺跡	369	奥山田遺跡		
31	ハイブの浦遺跡	79	有功古墳	121	橘谷Ⅲ遺跡	163	小倉9号墳	235	明王寺経塚	278	宝光寺跡	322	栗栖Ⅰ遺跡	370	朝日石槍出土地		
32	浜遺跡	80	大同寺墳墓	122	橘谷銅鐸出土地	164	明楽古墳群	236	矢田古墳	279	松原1号墳	323	栗栖Ⅱ遺跡	371	深山要塞跡		
33	磯の浦1号墳	81	大同寺古墳	123	弘西遺跡	165	小倉神社1号墳	237	北池古墳	280	松原2号墳	324	高橋神社遺跡	371-1	深山第1砲台跡		
34	磯の浦2号墳	82	大同寺遺跡	124	北田井遺跡	166	小倉神社2号墳	238	殿山1号墳	281	滝ケ峯古墳群	325	紀の川銅鐸出土地	371-2	深山第2砲台跡		
35	磯の浦3号墳	83	法然寺遺跡	125	別所1号墳	167	モント古墳群	239	殿山2号墳	282	滝ケ峯遺跡	326	有本銅鐸出土地	371-3	男良砲台跡		
36	磯の浦4号墳	84	六十谷遺跡	126	別所2号墳	168	小倉神社境内遺跡	240	殿山3号墳	283	薬勝寺南山古墳群	327	太田・黒田遺跡	372	加太砲台跡		
37	磯脇遺跡	85	和田遺跡	127	別所3号墳	169	金谷遺跡	241	土井山古墳	284	仁井辺遺跡	328	吉田窯跡	373	田倉崎砲台跡		
38	西庄遺跡	86	西辻遺跡	128	上野古墳群	170	奥池遺跡	242	丸山古墳	285	薬勝寺跡	329	鷺ノ森遺跡	374	虎島砲台跡		
39	平の下遺跡	87	川口遺跡	129	山口1号墳	171	高積山遺跡	243	高岡古墳	286	薬勝寺遺跡	330	鷺ノ森窯跡	375	友ケ島要塞跡		
40	木ノ本Ⅰ遺跡	88	六十谷古墳群	130	山口2号墳	172	薬徳寺跡	244	桜山古墳	287	松原Ⅰ遺跡	331	秋月遺跡	375-1	友ケ島第1砲台跡		
41	木ノ本Ⅱ遺跡	89	直川遺跡	131	山口3号墳	173	城ケ峯城跡	245	伊太祈曽神社古墳群	288	松原Ⅱ遺跡	332	津秦遺跡	375-2	友ケ島第2砲台跡		
42	木ノ本Ⅲ遺跡	90	直川廃寺跡(明光寺跡)	132	山口4号墳	174	禰宜Ⅰ遺跡	246	チショ古墳	289	薬師谷遺跡	333	岡の里古墳	375-3	友ケ島第3砲台跡		
43	木ノ本経塚	91	高井遺跡	133	山口5号墳	175	禰宜Ⅱ遺跡	247	城ケ森1号墳	290	江南遺跡	334	関戸遺跡	375-4	友ケ島第4砲台跡		
44	釜山古墳群	92	鳥井遺跡	134	山口6号墳	176	禰宜貝塚	248	城ケ森2号墳	291	曽垣田遺跡	335	関戸古墳	375-5	友ケ島第5砲台跡		

は鳴神Ｖ遺跡、寺内古墳群、茶臼山古墳、車駕之古址古墳の４件が数えられる。鳴神Ｖ遺跡では、平野部での埋没古墳として、古墳時代初頭から後期の方墳を７基検出した。寺内古墳群では、新発見の古墳（横穴式石室）を多数検出した。茶臼山古墳では、外提部と考えられる高まりとそれに伴う円筒埴輪列を検出し、従来実態の不明であった当古墳の遺構が初めて確認された。車駕之古址古墳では範囲確認調査により、全長約86ｍであることなど規模が推定された。

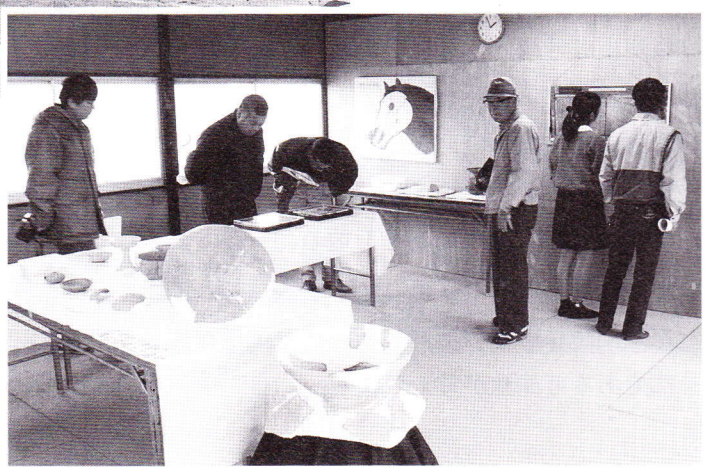
奈良～室町時代　平安時代の調査は、鳴神Ｖ遺跡で掘立柱建物・溝などを検出した。また、垂水遺跡・車駕之古址古墳の調査でも遺物が出土している。

鎌倉時代の調査は、鳴神Ｖ遺跡で石組井戸５基・溝２条を検出した。遺物の出土した調査は車駕之古址古墳などがある。

室町時代の調査については、車駕之古址古墳で遺物が出土したのみである。

江戸時代　江戸時代の調査には、和歌山城第12次調査がある。二の丸跡から砂の丸跡に至る和歌山城内の北側をほぼ半周する範囲をトレンチ調査を行ったもので、和歌山城内の基礎的な資料を得ることができた。

調査風景（鳴神Ｖ遺跡）



現地説明会風景（鳴神Ｖ遺跡）

Ⅱ．埋蔵文化財の発掘調査概要
【平成４（1992）年度の調査】

1．権現山Ⅰ号墳他 確認調査

調査地　和歌山市木ノ本1495－1他

調査面積　130.9㎡

位置と環境

紀ノ川河口域に広がる和歌山平野北岸地域は、紀泉山脈の裾部に沿って西庄遺跡、木ノ本Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡、城山遺跡、城山古墳、権現山Ⅰ・Ⅱ号墳、車駕之古址古墳、釜山古墳などの遺跡が存在し、和歌山市内でも遺跡の密集する地域である。

そのうちの木ノ本地区の北部で宅地造成のための広範囲な開発が計画され、権現山Ⅰ号墳・Ⅱ号墳として記録されている地点が含まれていることなどから、その実態の確認と周辺地域の埋蔵文化財包蔵地の所在を確認するための調査を行った。

調査内容

調査は権現山Ⅰ号墳・Ⅱ号墳を含む尾根の平坦部７ヶ所について１m幅のトレンチによる試掘で行った。その結果大部分では遺構・遺物は検出できなかったが、トレンチ４とした地点の谷部で炭化物ばかりの層が幾つか確認された。そのうちの１つは焼け土が壁状に垂直に残っており、この焼け土はトレンチに直交して１mの幅をもって２本平行して残っていた。そのあいだには炭化物層が約15cmの厚さに堆積し、炭層の底部赤く焼けていた。また堆積土中にも炭化物を含む層があり、瓦器の微細片がわずかに出土している層もあった。

遺跡地図に権現山Ⅰ号墳として記されている地点については、地形測量などからも古墳と思える痕跡を確認できなかった。

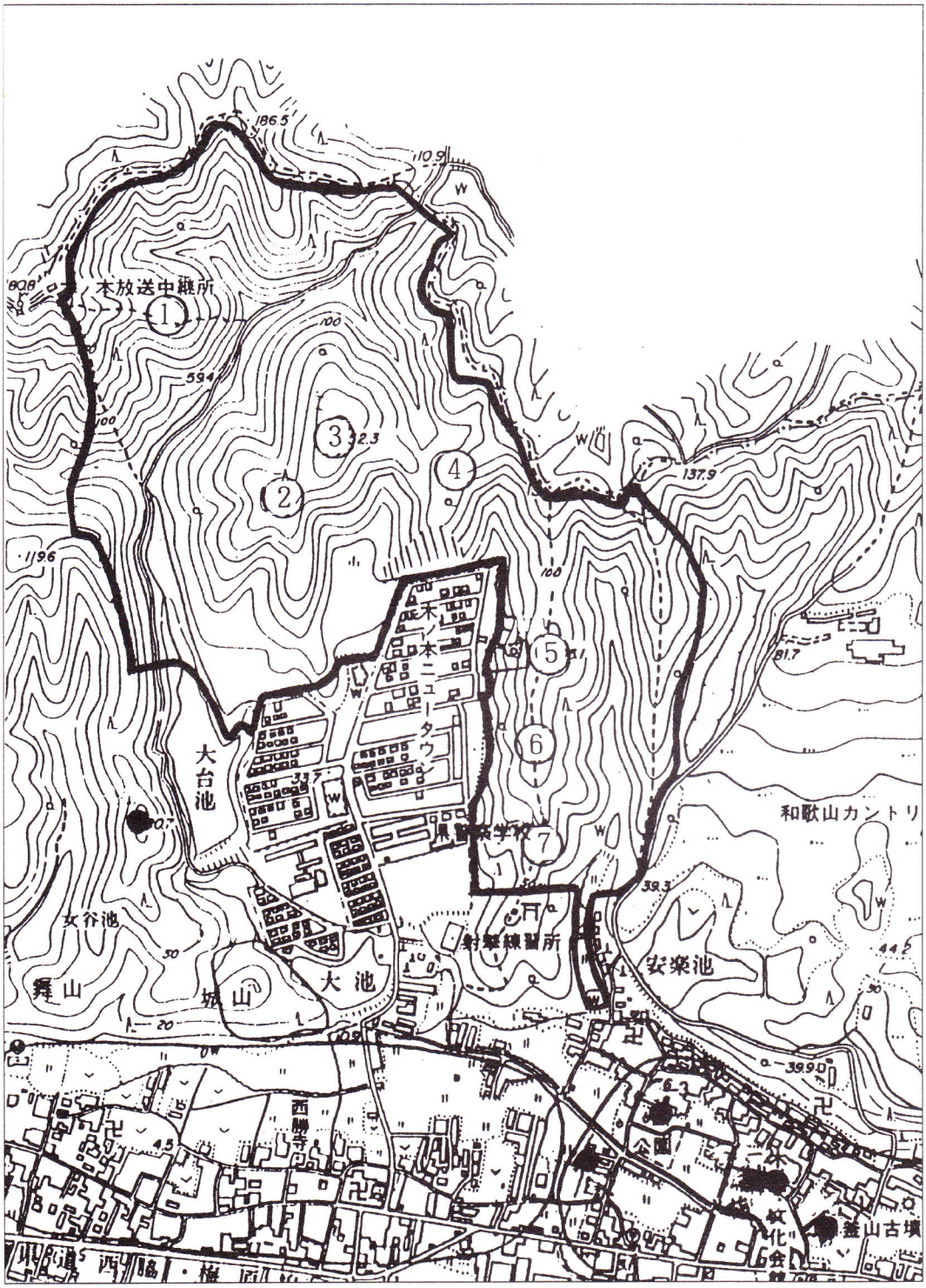
権現山Ⅱ号墳として記されている地点では、地形測量からわずかに前方後円墳のくびれ部と思われる形状を示すところがあり、「く」の字に曲がる谷状地形が認められたが、全体的には古墳といえるだけの成果は得られなかった。

まとめ

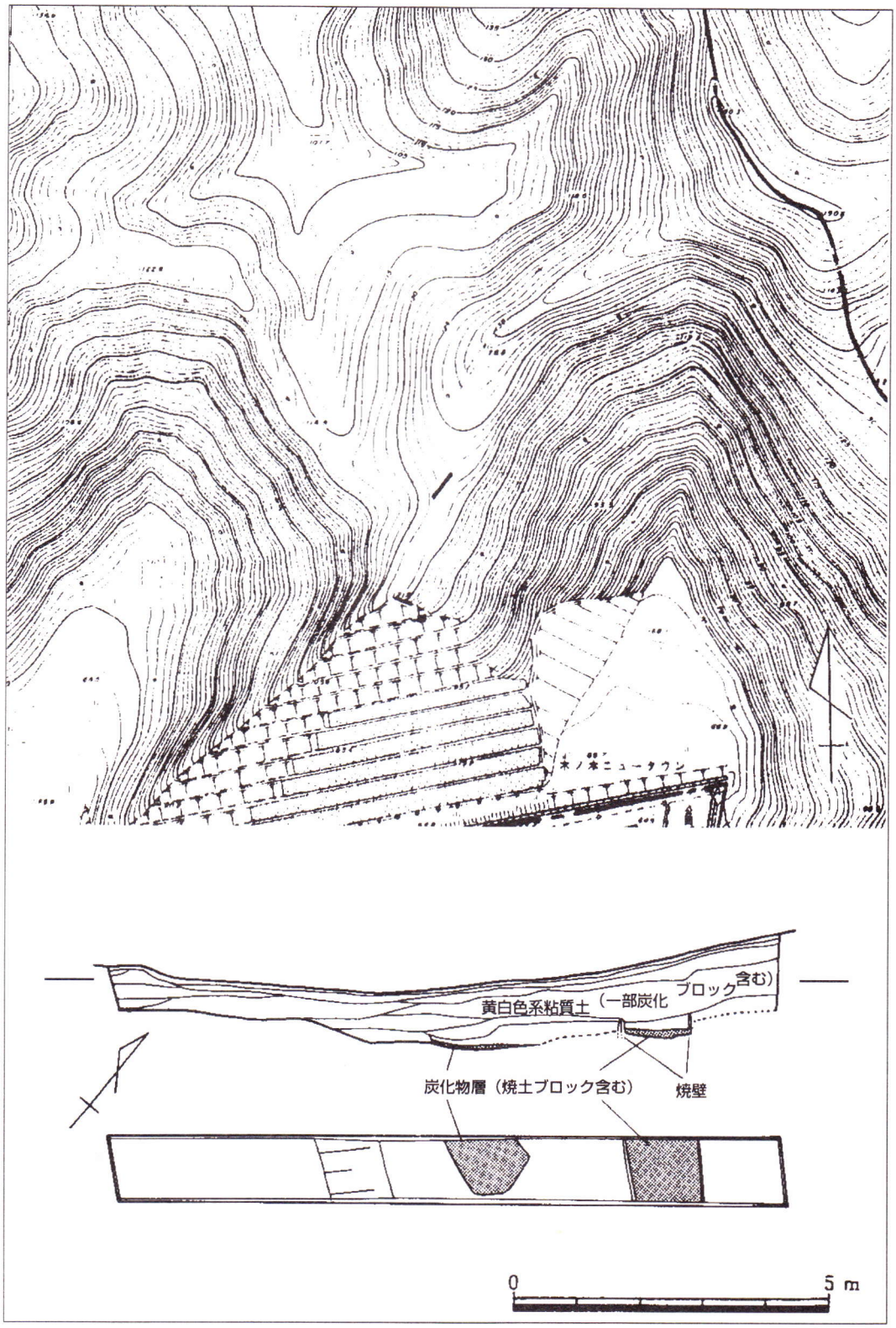
今回の調査は丘陵頂部等を中心にしたトレンチによる調査で、面的な観察が十分できなかったが、遺構の存在の可能性を示す発見があった。

紀泉山脈には修験道関係の遺跡や遺構が数多く点在しており、今回もその関連施設の一部である可能性が考えられる。

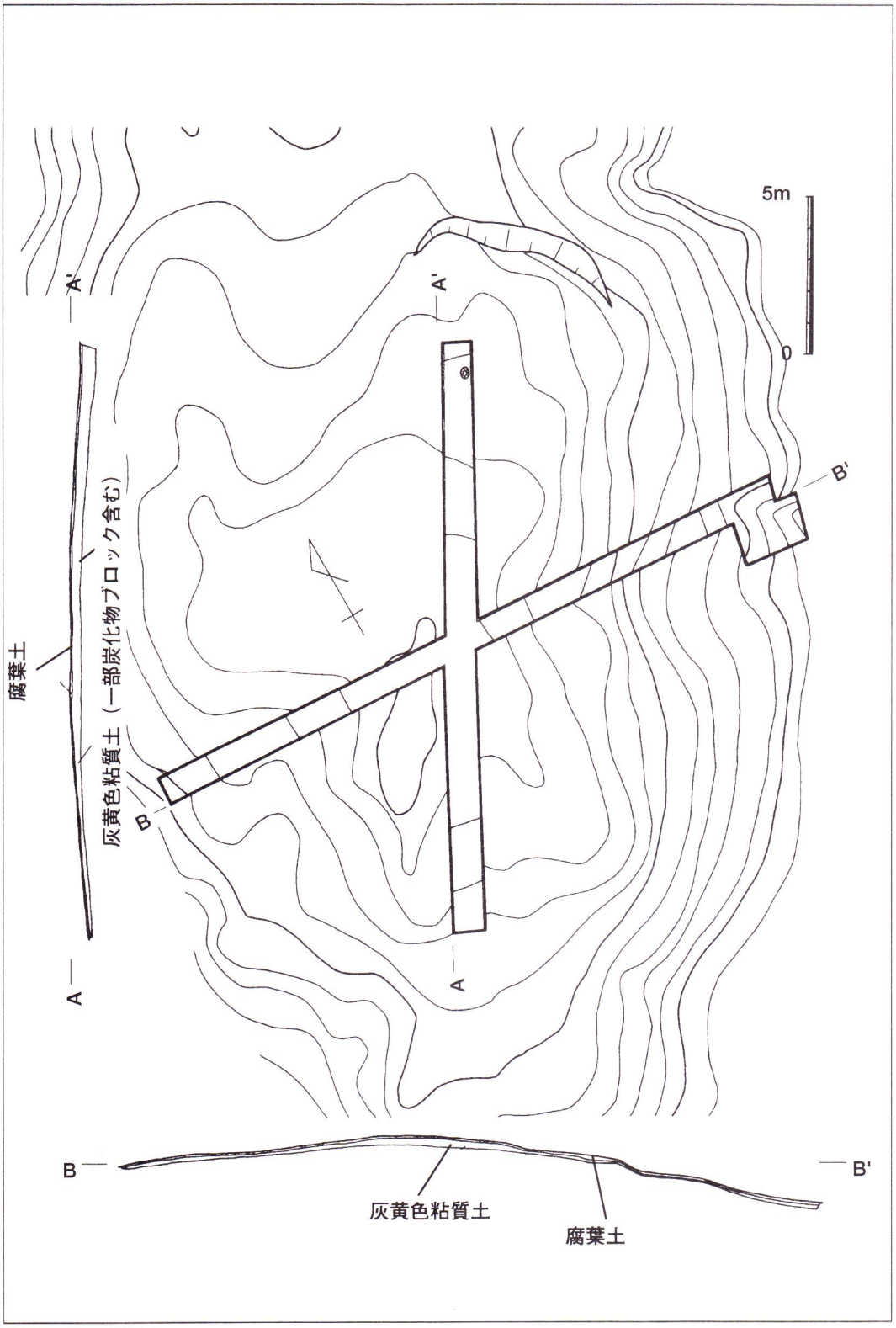
（益田雅司）



調査位置図



トレンチ4調査位置図及び遺構実測図



トレンチ5遺構実測図

2. 東山東地区 遺跡確認調査

調査対象地　和歌山市矢田7番地の1、他

調査面積　約145m²

位置と環境

遺跡の確認調査地である四季の郷緑化果樹苑は和歌山市内を東西に流れる紀ノ川の南岸の丘陵地に位置する。この丘陵地には岩橋千塚をはじめとする古墳群が数多く分布する。調査地は岩橋千塚の東約2.5kmのところにあたり、西には塩谷古墳群、北には矢田古墳、南には足守神社古墳群・殿山古墳群が存在する。

調査内容

丘陵地の8地区(B,C,D,F,G,H,I,J)には幅1.5mのトレンチを16箇所、現在水田となっている平地の2地区(A,E)には2m×2mのグリッドを6箇所設定し、埋蔵文化財の有無を確認した。その結果、丘陵地ではそれぞれ深さ20～70cmで岩盤にあたり、明確な遺構は確認されなかった。遺物は近世の瓦などが少量出土したのみであった。平地についてはそれぞれ4～7層の土層の堆積が確認されたが、その中に明確な遺構を持つ面は確認されなかった。遺物は土師器、須恵器、黒色土器、瓦などが少量出土した。

まとめ

今回の調査において明確な遺構は確認されなかったが、平地の2ヶ所において遺物が出土したことから、古代・中世にこの地区で人が生活していた可能性が考えられる。

(木村善晶)

調査結果一覧表

地区	地形	出土遺物
A	平地	土師器・須恵器・黒色土器・瓦器
B	丘陵地	瓦2点
C	丘陵地	削平を受けており、調査できなかった
D	丘陵地	磁器1点
E	平地	土師器・須恵器・黒色土器・瓦器
F	丘陵地	遺物なし
G	丘陵地	遺物なし
H	丘陵地	瓦2点
I	丘陵地	瓦2点
J	丘陵地	遺物なし

調査区地形図

D地区

3. 城山古墳 確認調査

調査地　和歌山市木ノ本1688他

調査面積　122㎡

位置と環境

城山古墳は、和泉山脈から南へ派生するひとつの尾根上、標高約81mの丘陵上に位置している。『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』(和歌山県教育委員会、平成元年)によると本古墳は「円墳」とだけ記載されており、その実態は不明である。

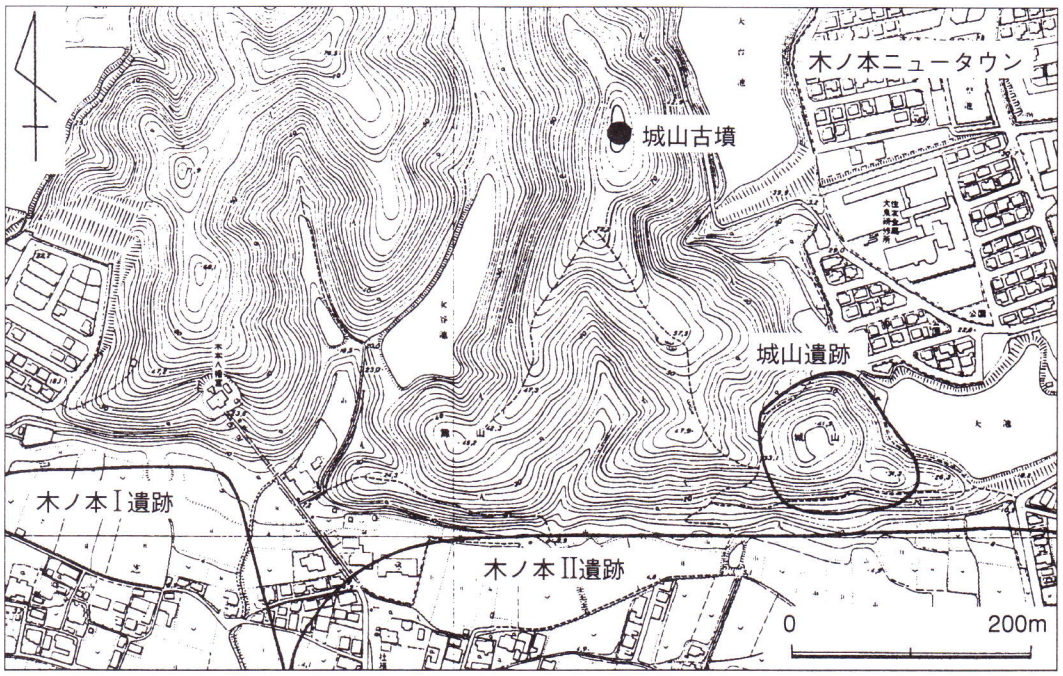
周辺の遺跡としては、本古墳の南東約200mの尾根続きの丘陵上に土塁の残る城山遺跡が存在する。和泉山脈の山裾部には、西より木ノ本Ⅰ遺跡、木ノ本Ⅱ遺跡、木ノ本Ⅲ遺跡等の中世の遺跡が連綿として存在している。

今回は、本古墳を含めた地域の開発計画に対処するための確認調査を実施した。

調査の内容

対象地に、尾根線に沿うように1トレンチ(幅1.5m、長さ36.5m)、尾根に直交するように2～6トレンチを設定し、一部に拡張区1を設けて調査を実施した。

土層の堆積状況としては、各トレンチとも堆積土が少なく、表土から2～10cmですぐに泥岩質の岩盤になる地点が大半であった。比較的堆積土がみられた1·3·4トレンチの斜面部においても、堆積していたのは岩盤風化層であり、人為的な盛土部分は確認されなかった。



調査地（拡張区１。北より）

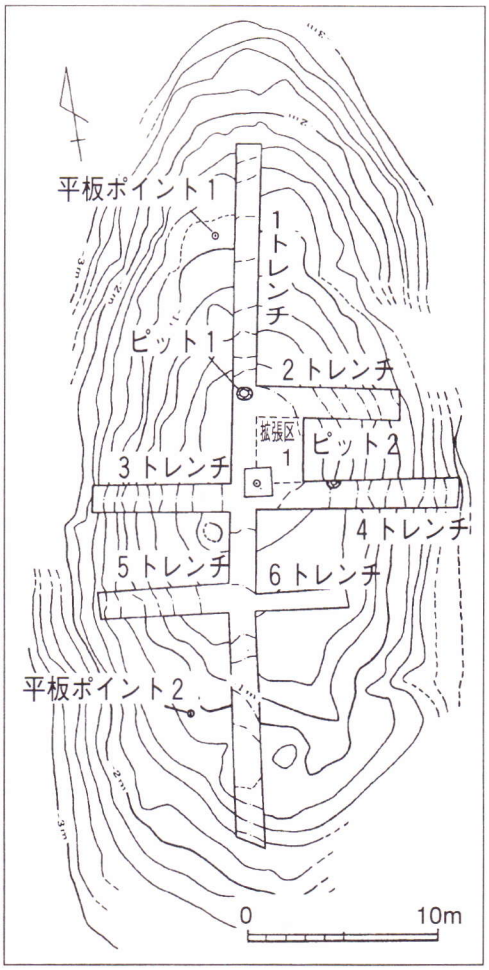
検出された遺構としては、1・4トレンチで確認されたピットがある。ピット1は、直径50cm、深さ15cmで淡灰褐色砂質土を埋土としていた。ピット2は、直径30cm、深さ10cm で、岩盤風化層に近い土を埋土としていた。いずれのピットも埋土に炭片や土器片等の人為的な遺物をまったく含んでいなかった。

まとめ

調査により、主体部、周溝、岩盤整形、盛土、土器等の古墳関連の遺構・遺物が検出されず対象地が古墳であるとの確証を得ることができなかった。また、検出された2つのピットも埋土、底面レベルに共通性がみられず、有機的に関連する遺構と確定できなかった。

丘陵上の遺跡は、その立地条件により遺物が少なく、遺構も残りにくいのが一般的である。遺跡の確認にあたっては、より詳細な調査が望まれる。

(前田敬彦)



調査区配置図

4. 岡村遺跡 発掘調査

調査地　和歌山市本渡92－3番地地内

調査面積　24m²

位置と環境

岡村遺跡は亀ノ川をはさんで和歌山市の本渡と海南市の岡田にまたがる遺跡であり、海南市教育委員会と和歌山県文化財センターにより調査され、弥生時代から古墳時代にかけての遺構・遺物が確認されている。今回の調査区は岡村遺跡推定範囲北端の境界線上に位置する。

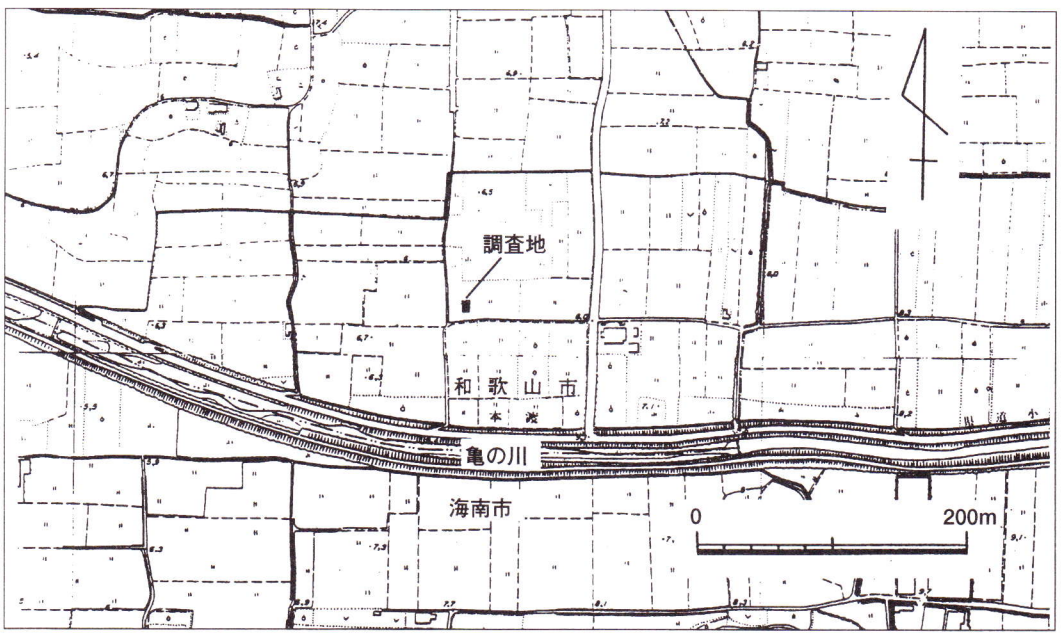
調査の内容

発掘調査の結果、地表からの深さ約50cmから遺物包含層が厚さ30cm程堆積しており、その下には明青灰粘土と砂利混じり灰色砂質土の無遺物層が堆積していることが確認された。遺構とよべるものは確認できなかった。遺物は遺物包含層から土師器（皿、羽釜、椀）、須恵器（壷、瓶、こね鉢）、黒色土器A類（椀）、瓦器（椀）等が少量ではあるが出土している。

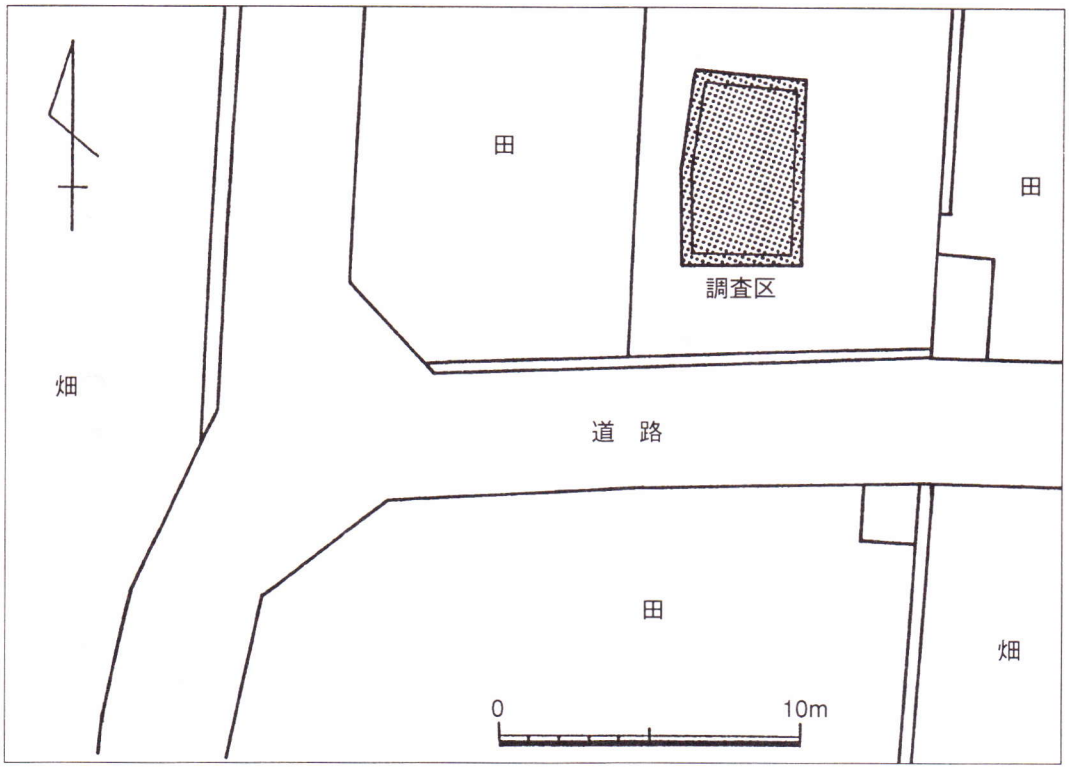
まとめ

今回の発掘調査では、遺構は検出できなかったが、古代、中世の遺物を含む土層の堆積が確認された。

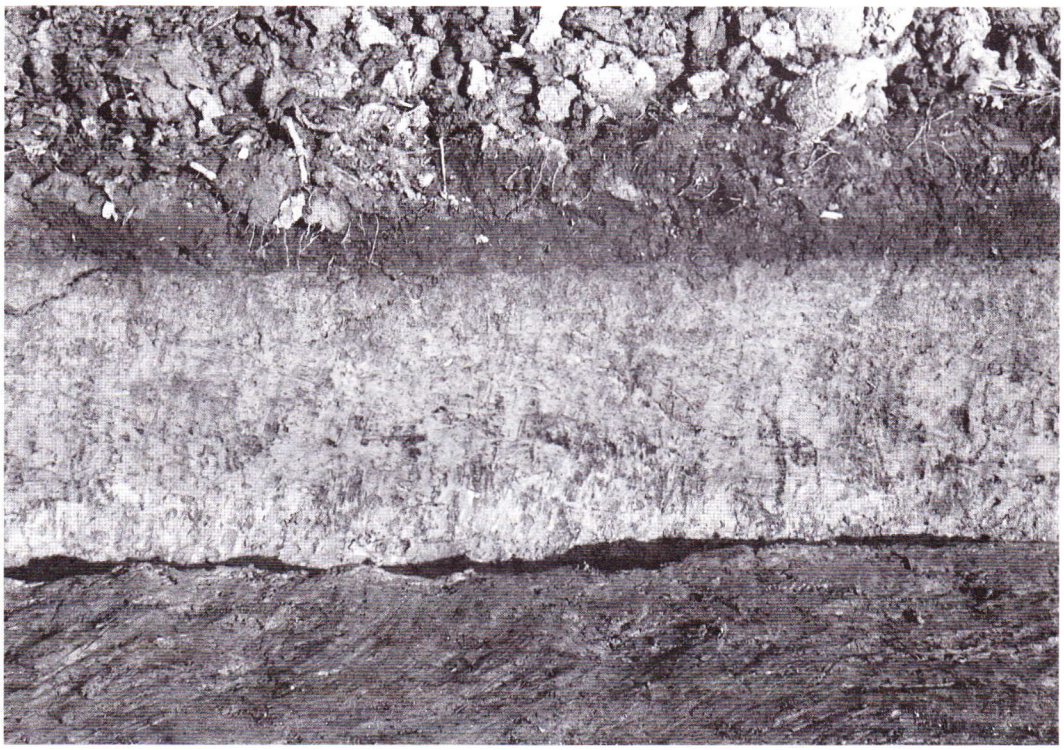
（木村善晶）



調査位置図



調査区周辺測量図



東壁土層堆積状況

5. 城山遺跡 発掘調査

調査地　和歌山市木ノ本1831他

調査面積　1,500㎡（地形測量　10,000㎡）

位置と環境

城山遺跡は紀ノ川北岸の和泉山脈から派生する尾根先端部に立地する山城跡である。主郭部分は標高41ｍで周辺の集落より30ｍの高所に位置する。地元では摺鉢山とも呼ばれ、雨乞いを行った場所であったともいわれていたが、土塁がきれいにめぐっていることなどから中世の山城跡として遺跡分布地図に記載されている。

城山遺跡の周辺には和泉山脈の裾部に沿って西庄遺跡、木ノ本Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡、車駕之古址古墳、釜山古墳などの遺跡が存在し、和歌山市内でも遺跡の密集する地域である。

調査内容

版築で盛り上げた土塁が一辺27ｍの方形に全周し、断面は台形を呈する。高さはよく

調査位置図

残っている北側で内に３ｍ、外に4.5ｍを測り、幅は上部で約３ｍ、基底部では約10ｍを有する。南側は一部破壊を受けていてよく残っていない。土塁の外側直下では深さや幅はまちまちだが、地山を掘り下げた溝状の窪みが南側を除く三方で検出された。

土塁の内側では明確な建物遺構の痕跡を検出することができなかったが、土塁の近くに握り拳大の川原石が帯状に散在しており、人為的な配置の可能性も考えられるが断定はできない。

土塁の外にはテラス状の平坦部が南側を除く三方に取りまき、特に北側と東側がよく残っていて約５ｍの幅をもつ。南側については斜面に沿って付けられた道が現在も残っている。テラス部分を何ヶ所か掘り下げたところ、現在のテラスの端から約２ｍ内側で地山が斜面になっており、突き出して平坦地を広げていることが確認された。

土塁の南側で最も低くなっている所を掘り下げたところ、土塁基底部の地山が切れて出入口のようになっていた。そして柱の礎石と思われる石が４基検出された。

出土遺物は、土塁に盛り上げた土の中から弥生時代から近代にいたる各時代の土器細片がわずかに出土している。その中にあって、内郭のほぼ中央部から出土した２個の鉛塊はどちらも直径５cm・高さ２cmの円錐形で、重さもほぼ同じ数値であることから規格性をもって作られたものと考えられ、用途については遺跡の性格などから鉄砲の玉の原料として持ち込まれた可能性が考えられる。

まとめ

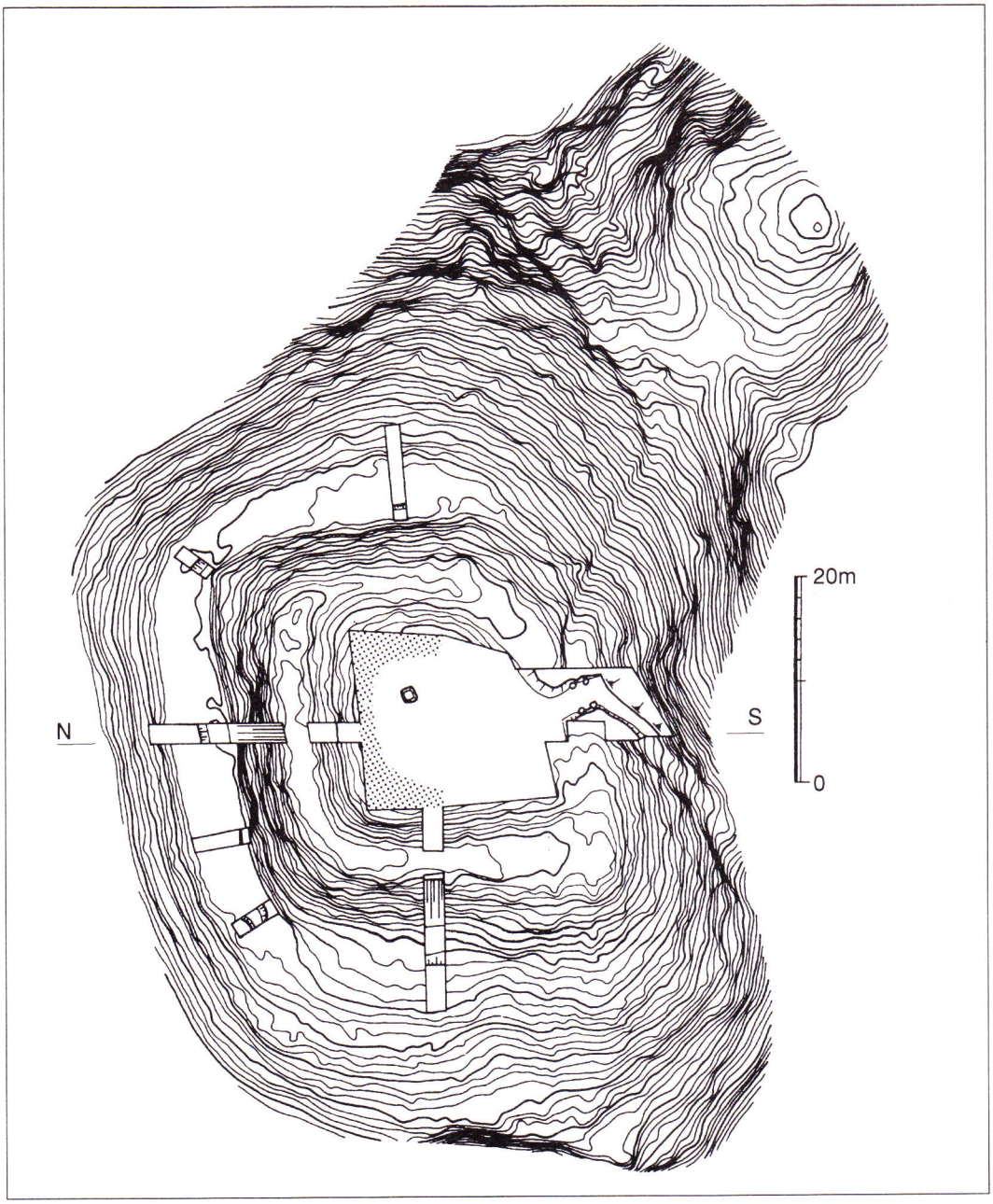
調査の結果、尾根頂部に方形の土塁がめぐり、内側には建物の痕跡が検出されなかったことから、織豊時代の特徴をもつ陣城であった可能性が高い。

『信長記』などの文献によると、天正五（1577）年に織田信長軍の一派が大阪府淡輪から和歌山に攻め入り、当遺跡の南東1.5kmにあった中野城を攻め落としたという記録が残っている。城山遺跡は木ノ本峠を越えて淡輪近くの多奈川に通じる街道の正面に位置し、また南海道にも接している交通の要所であり、眼下に中野城を見下ろす好位置にあたることなどを考え合わせると、織田軍が和歌山攻めを行ったときか、その後に織田軍の手によって築造されたものと思われる。

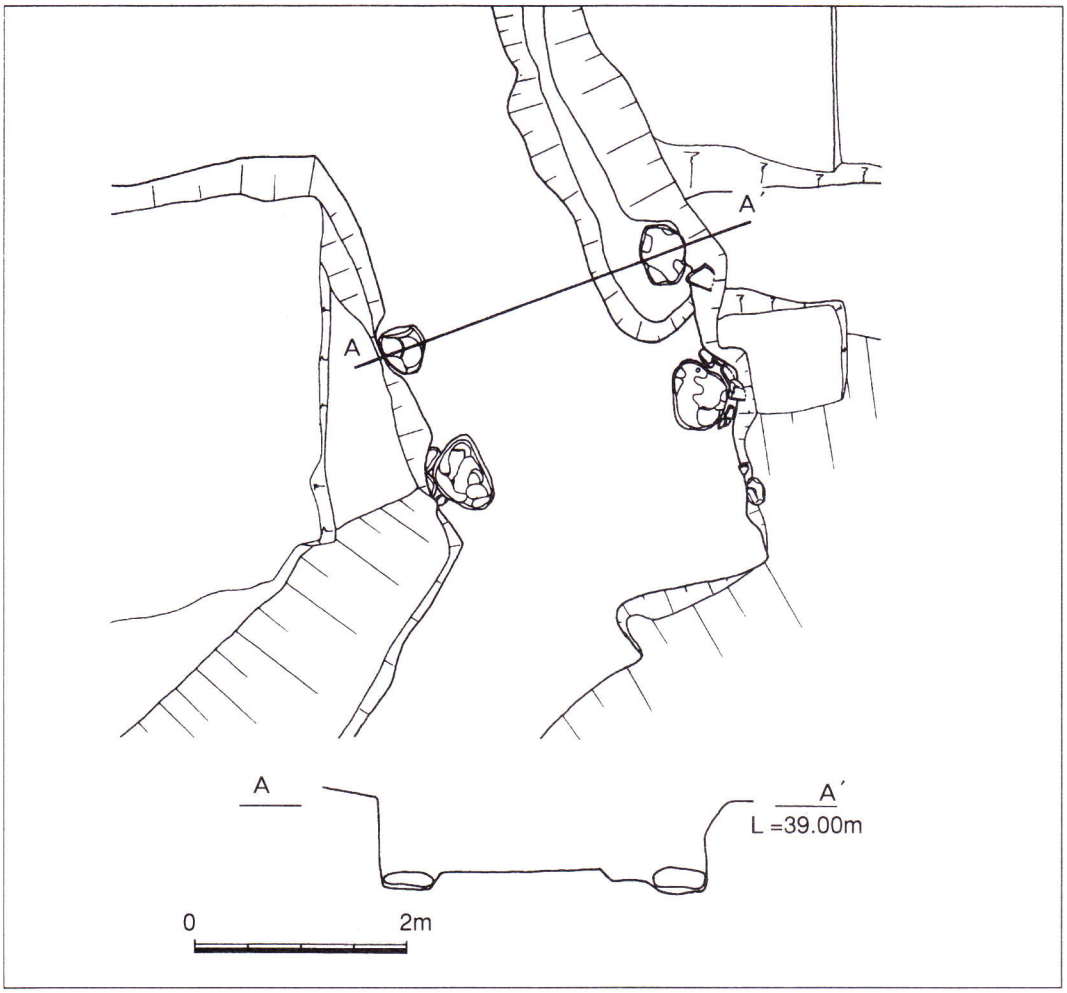
本遺跡の特徴の一つとして、高さ３ｍ近い土塁に礎石を据えた四本柱の門を備えるという大土木事業を行っていながら、内郭に明確な建物跡が検出されなかった点がある。兵力のみを配置した臨時的な陣城であった可能性が高く、戦国時代の城郭研究の上できわめて重要な資料といえる。

また出土した鉛塊は、福井県一乗谷遺跡の板状・和歌山県根来寺遺跡の棒状のものに次いで３例目の出土であり、円錐形をしたものとしては初の出土である。この鉛塊をどのように扱ったかは現時点では推察の域を出ないが、今後類例の増加を期待したい。

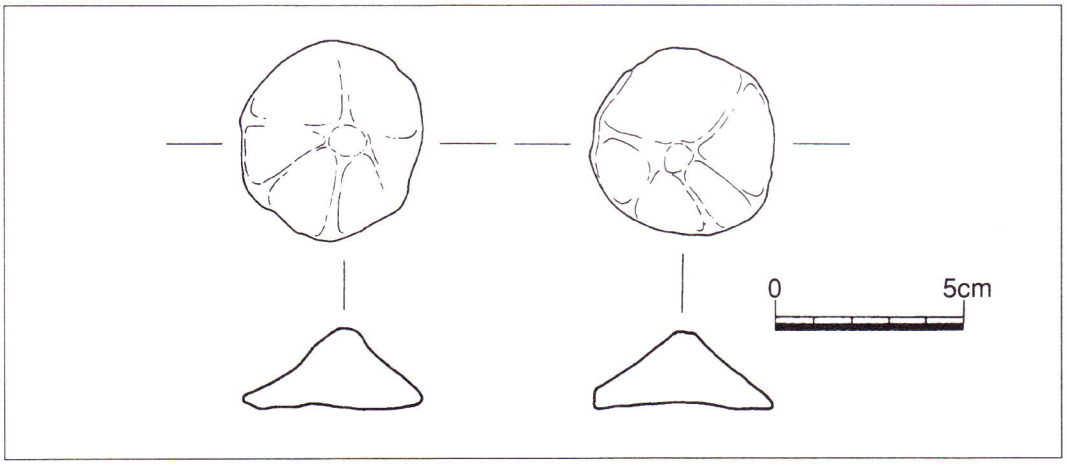
（益田雅司）



地形測量図及び遺構断面図



門柱礎石実測図



出土鉛塊

6. 鷺ノ森遺跡 第4次調査

調査地　和歌山市鷺ノ森1

調査面積　500㎡

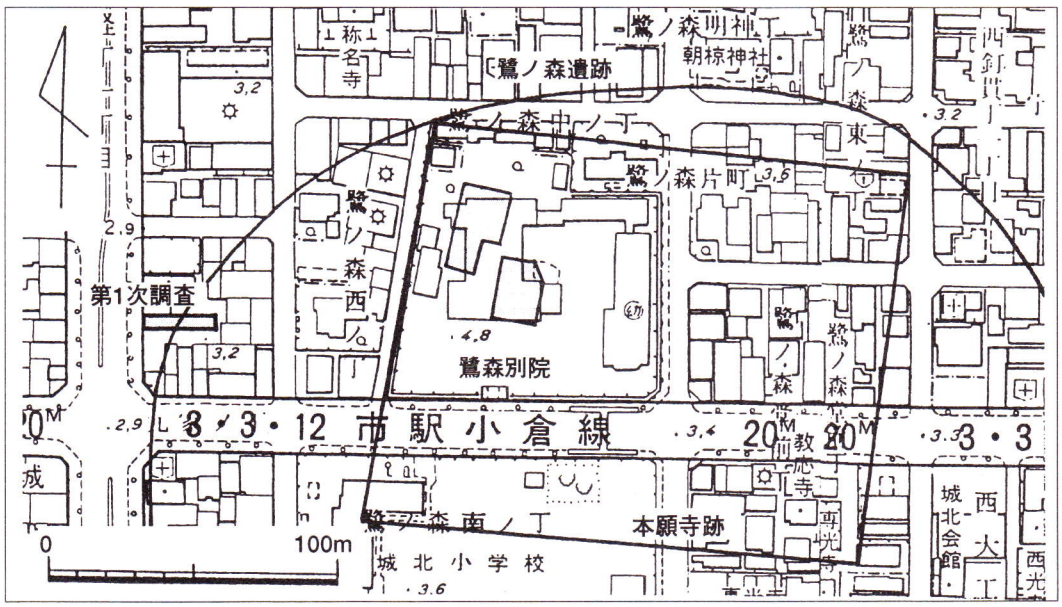
位置と環境

鷺ノ森遺跡は、和歌山城の北約400mの位置に所在する本願寺鷺森別院から城北公園にかけて広がる遺跡である。弥生時代から江戸時代に至る複合遺跡であり、室町時代の永禄 6(1563)年に真宗の御坊が開かれた鷺森御坊(雑賀御坊)も本願寺跡として遺跡の北部の一郭を占めている。

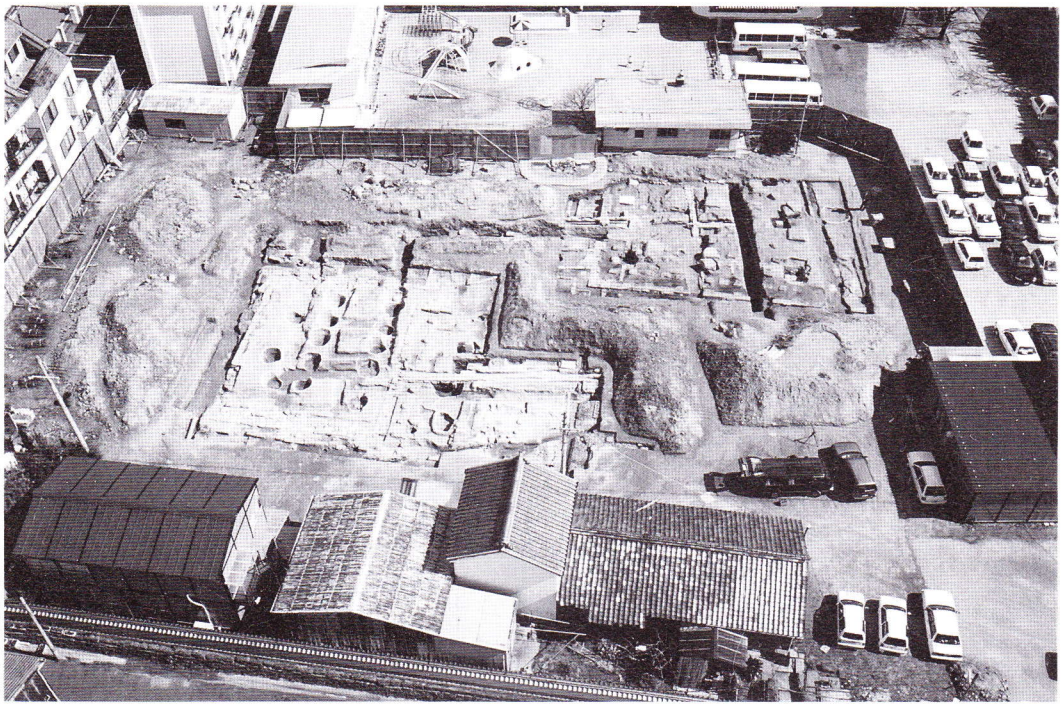
調査は鷺森別院の本堂建て替えに伴うものであり、室町時代以降の本願寺関連の調査が主体となるが、周辺の調査との関係も考慮し、鷺ノ森遺跡の第4次調査として実施した。既往の調査では、今回の調査地の西約100mの地点における第1次調査において江戸時代前期以降の堆積層や石積み遺構が確認された[注1]ほか、南約200mの城北公園内の第2・3次調査において江戸時代前期から昭和20年の戦災時に至る生活面が多数確認され、江戸時代の鍛冶屋に関係する炉やフイゴも多く検出された[注2]。

調査内容

文献等によると正徳3(1713)年から享保8(1723)年にかけての改築・再建工事以降の建物配置は、敷地内の中央南側に本堂、本堂北側に対面所、対面所の西に御主殿が位置するものであった。御主殿の南、本堂の西北部に位置した能舞台は、嘉永元(1848)年に湊御



調査地の位置



調査地全景（西上空より。左が御主殿、右が本堂）

殿に建てられたものが明治の初頭頃に現地に移築されたと推定される。

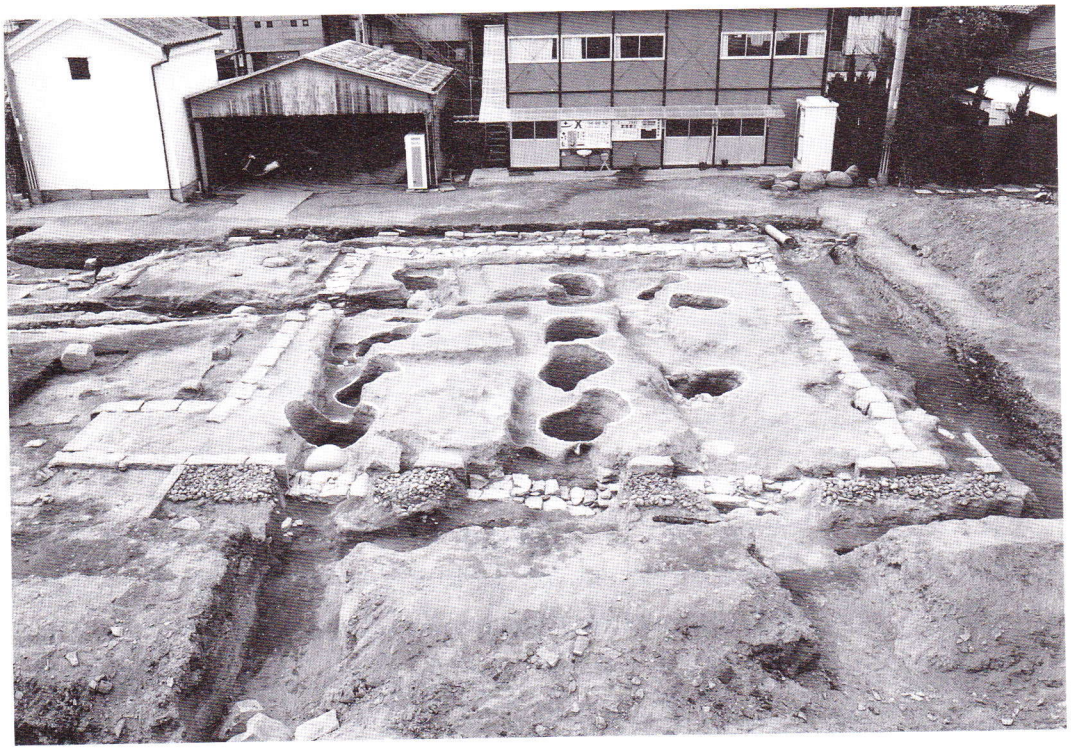
戦災後に復興された本堂が建てられていたのは、鷺森別院の敷地の西側に相当し、江戸時代中期以降の建物配置からすると、調査対象地は江戸期の本堂の西北の一部、能舞台の東半分、御主殿の大部分に相当すると考えられた。そのため、部分的な試掘調査により建物配置を想定し、主要建物遺構の検出に努めた。

基本土層としては、地表より20～30cmはレンガやコンクリートの混じる整地層であり、その下には厚さ10～30cmの戦災時の焼土層の堆積がみられた。焼土層の下面において江戸時代中期に再建された旧本堂や御主殿の礎石、柱穴、伏鉢遺構等が検出された。以下に主要遺構について記述する。

(1)本堂

確認されたのは、享保8年に完成したとされる本堂の北西部分(南北約19m、東西12m)であり、面積的には全体の約6分の1である。戦後の昭和26(1951)年のコンクリートによる本堂再建の基礎工事や今回の本堂解体工事に伴い、一部が溝状に破壊されており移動していた礎石もみられた。調査により和泉砂岩の礎石が9個と本堂を区画する石列が明らかになった。礎石は、一辺が1.2m、厚さ50cmほどの和泉砂岩の巨石を使用しており、石材側面に数字とみられる墨書があるものもあった。明治8(1875)年の鷺森別院の測量図

本堂（南より）



御主殿（東より）

と照合した結果、建物配置や柱位置は発掘結果によく合致しており、調査地は本堂の内陣・外陣・脇ノ間・簾ノ間・廊下・脇壇・須弥壇の一部に相当し、9個の礎石は、これらの部屋の間の柱位置に相当する。

注意すべきは、サブトレンチにより確認された本堂下層の基礎工事の様子である。本堂再建にあたっては、本堂建設予定地を標高4mの旧表土から深さ2mも掘り下げて、その後山土と砂を交互に入れて、厚さ2.5m、土層にして30層ほども土を入れ替えているのが判明した。本堂に関連する礎石や石列はホリカタをもたずにこの盛土層の上層内に設置されていた。盛土内にはほとんど遺物は包含されなかったが、盛土下層の標高2.4m前後の山土層にわずかに瓦片がみられた。これらは本堂再建の歴史的事実と関連する重要な遺物と判断された。

(2)御主殿

今回の調査区の中では最も北側に位置していた御主殿跡のほぼ全域を検出した。戦災により焼失した建物は、主殿造りの形式を伝え、創建は天正期までさかのぼる可能性が指摘されていた貴重な建物であった。

調査地の標高は、4.5～4.6m前後で、建物区画内部には厚さ10～30cmの整地土、建物周囲には戦災時の焼土と整地土が堆積していた。調査により検出されたのは礎石の設置に伴う13ヶ所の掘り穴と建物の外側を区画していた列石、水の処理に関係する伏鉢遺構等である。

和泉砂岩の角石の列石により区画された建物主要部分の規模は、東西約14.2m、南北約 11.5mである。区画内の柱位置に掘削された掘り穴の規模は、直径約1.5m、深さ80cm前後である。柱穴内部は基本的には粘土と砂の互層からなり、砂層部分には大量の直径5～ 10cmの玉石が詰め込まれていた。掘り穴のなかには、最上層に緑色片岩の割石が平面的に遺存するものもあり、本来この割石の上に礎石が設置されたものとみられた。建物遺構の周囲には、雨水・汚水の処理や雨落ち部分に土器や瓦を使用した施設が4ヶ所で確認された。瀬戸産の鉢や素焼きのいわゆる火消壷の底部を穿孔し、逆さまに設置し、、雨水処理に利用した施設がそれぞれ1基、水切瓦9枚程度(6枚分が遺存)を円形に並べて内部に玉石を入れた汚水処理とみられる施設が1基、建物東側の雨落ち部分に平瓦をモザイク風に並べた施設が1基検出された。

(3)能舞台

御主殿から南へ3.5m離れた位置で検出されたのは能舞台の東側の部分である。本来3間四方(一辺約5.4m)の規模をもつとみられる能舞台に関係する遺構としては、舞台南側を区切る溝(両側に平瓦を立てる)と舞台の左前の目付柱を支える礎石、床下に掘削された窪地等がある。溝のさらに南は舞台と見所の間に相当し、玉砂利が敷かれていた。窪

能舞台（西より。舞台下の窪地と甕）

地は、一辺約5m、深さ約40cmで隅丸方形を呈している。窪地内の堆積土より口径約60cm、高さ約 70cmの甕が横倒しになった状態で検出された。窪地と甕は、舞台の音響効果を高めるための施設とみられ、注目すべき遺構と考えられた。

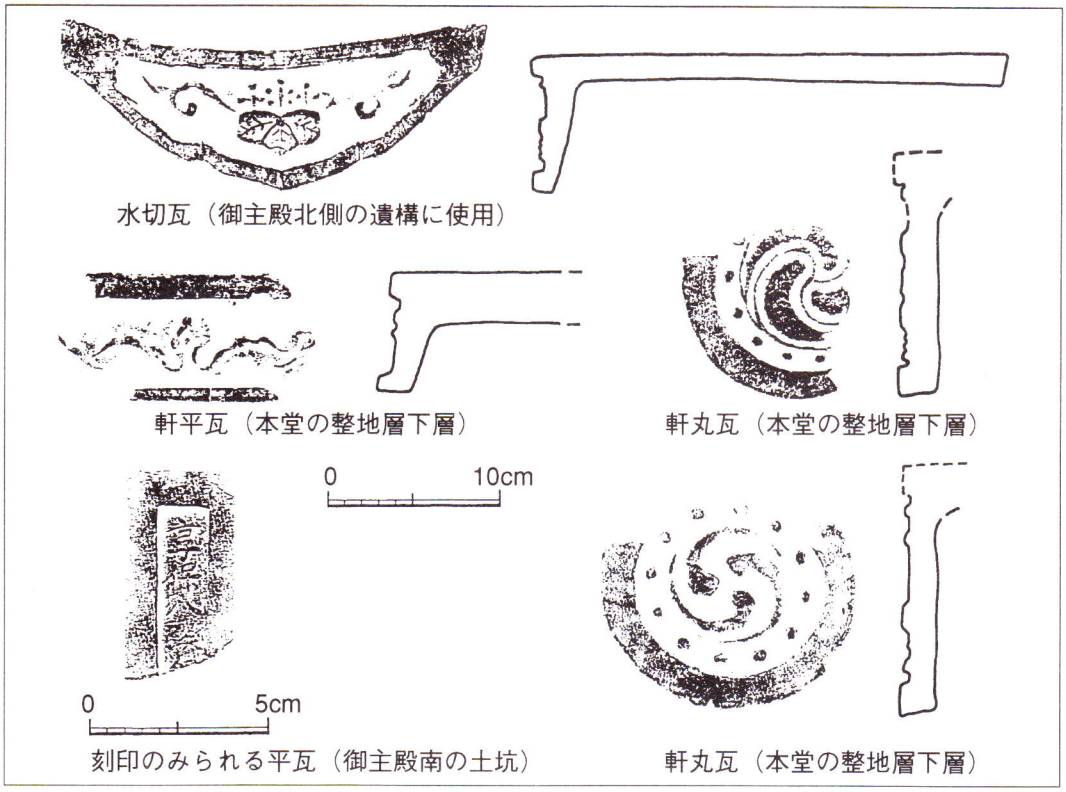
能舞台下で検出された甕

部分的な確認調査により、能舞台の下層には片岩を礎石として使用した柱列が存在しているのが確認された。これらは位置よりみて、能舞台移築以前の本堂西側に広がっていた江戸時代の書院の一部であるとみられた。

(4)出土遺物

遺物としてはコンテナ約80箱にも及ぶが、大半は近世後期から近代のものであり、瓦、土器(伊万里染付・炮烙・焼塩壷・堺すり鉢)、金属製品(釘・鎹・把手)、銭貨(寛永通寶)、土製品(泥面子・土人形)などがみられる。

実年代との関係で重要な遺物としては、本堂の基礎工事に伴う整地層下層より出土し



出土遺物（カッコ内は出土場所）

た瓦片と御主殿南側で検出された土坑より出土した「享保八癸□」年の刻印のある平瓦片が挙げられる。前者は、享保8(1723)年以前の瓦であり、後者に伴う遺物群は享保8年以降のものと判断されるからである。

まとめ

調査により江戸時代中期の正徳・享保期の本堂・御主殿の再建・改修工事の具体的内容が確認された。特に、本堂の建築に伴う地盤改良工事は予想以上に大規模なものであり、本堂自体の礎石も巨大な石材を使用していたことが確認された。また、時期的には明治期に下るものではあるが、能舞台という特殊な遺構を検出し、音響効果を高めるための施設・遺物を確認することができた。ただし、トレンチ調査により部分的に深掘したにもかかわらず、鷺森本願寺の創建時の遺構については全く資料を得ることができなかった。今後の検討課題としたい。

(前田敬彦)

(注1)大野左千夫「鷺ノ森遺跡　第1次調査」『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報1』
(財)和歌山市文化体育振興事業団(1992)

(注2)前田敬彦「鷺ノ森遺跡　第3次調査」『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報2』
(財)和歌山市文化体育振興事業団(1994)

7. 鳴神Ⅴ遺跡 第２次調査

調査地　和歌山市鳴神1014番地～1027番地

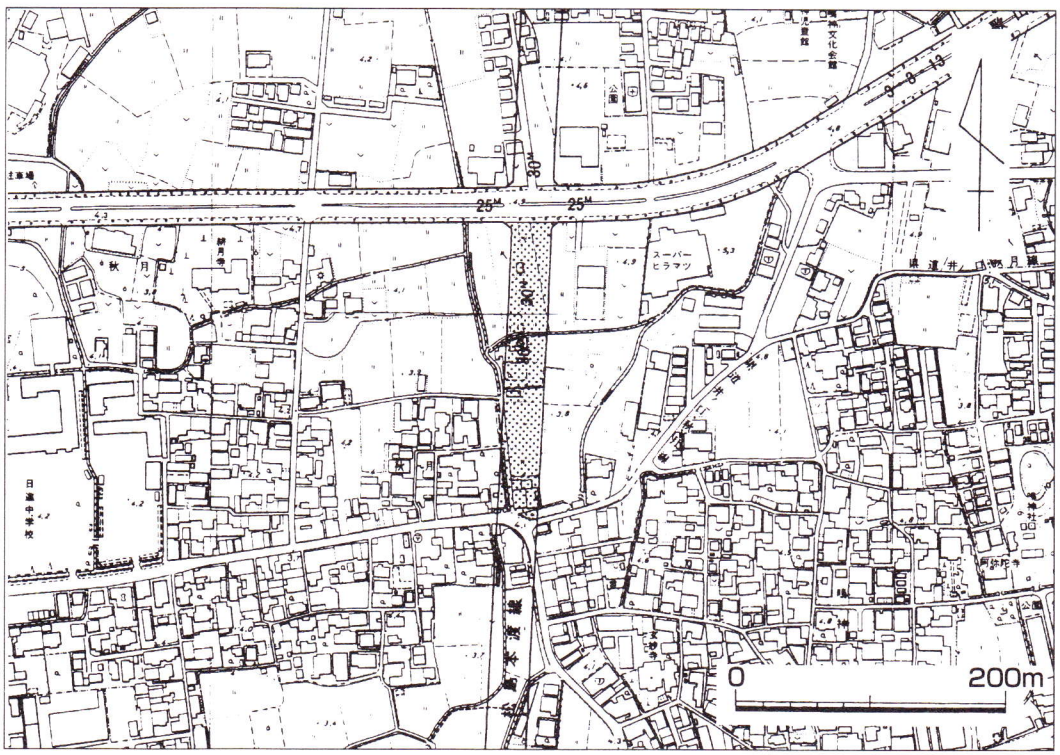
調査面積　70㎡

位置と環境

鳴神Ⅴ遺跡は紀ノ川南岸の平野部に位置しており、東の丘陵地には花山古墳群、岩橋千塚古墳群が存在する。当遺跡は昭和52年から54年にかけて和歌山県教育委員会によって調査されており、古墳時代を中心に遺構・遺物が数多く検出されている。

調査内容

試掘の対象となったのは東西30m、南北200mの帯状の範囲内である。その中に2m四方の試掘坑を17箇所設定し、調査を行った。その結果、以下のことが確認された。北半部の試掘坑(G1～G10)では古墳～平安時代の遺物包含層をはずした後、無遺物層と思われる黄褐色粘質土の上面で遺構を検出した。南半部の試掘坑(G11～G17)は北側とはちがった堆積状況を示し、現代の耕作土下に遺物包含層が約45cmの厚さで確認された。遺物包含層は３層に分層でき、上から第1層・黄灰色砂質土、第2層・茶灰色砂質土、第3層・灰色砂質土となっている。第1層・第2層についてはほぼ同時期の堆積と思われ、出土遺物から近代の堆積であると考えられた。第3層ではⅣ期の備前すり鉢、瀬戸美濃系天目茶椀、肥前系灰釉陶器



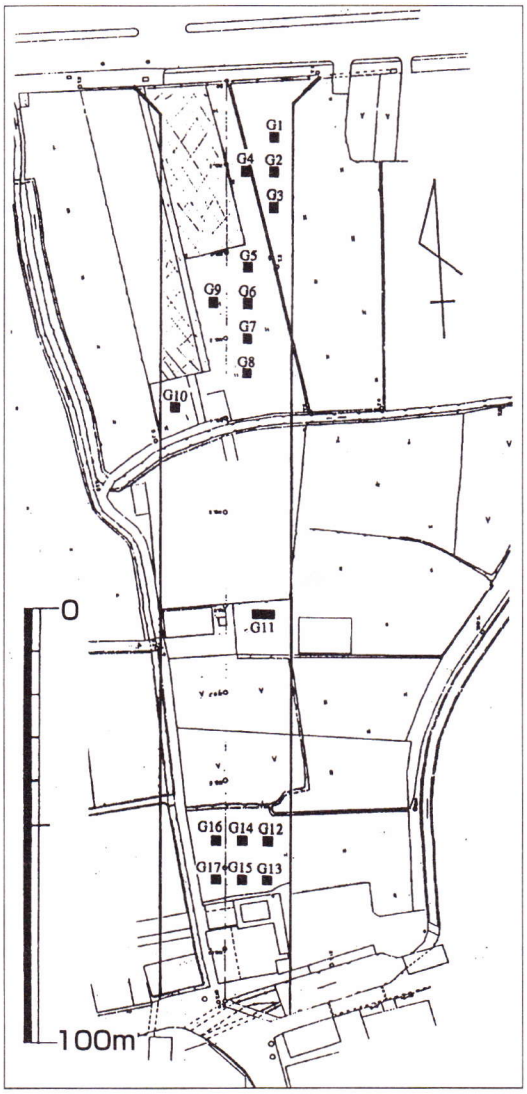
調査位置図

椀などが出土し、室町時代から江戸時代前期の堆積層と考えられた。それより下、標高約2.9mからは直径2cm以内の砂利を含む砂質の無遺物層となり北部にみられる黄褐色粘質土の層は確認できなかった。この無遺物層の上面から土器細片を含む不定形な遺構が検出されたが、遺物はすべて細片でその年代を決定することはできなかった。

まとめ

今回の調査は試掘坑による調査であり、遺跡の性格を知る上では充分なものではないが、主に古墳時代の遺物、遺構などが検出され、調査対象区内に埋蔵文化財が存在することが確認された。また、遺構検出面の深さを確認することができ、本調査をするにあたり貴重な資料を提供できたと言える。

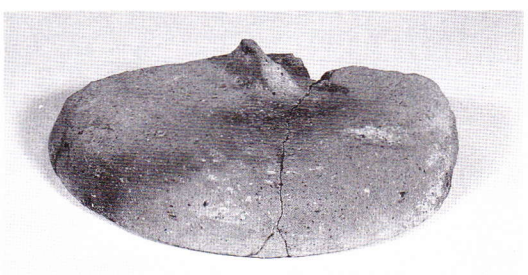
(木村善晶)



試掘坑配置図

調査地北部

縄文土器（G11出土）



瓦質土器蓋（G14出土）

8. 車駕之古址古墳 第4次調査

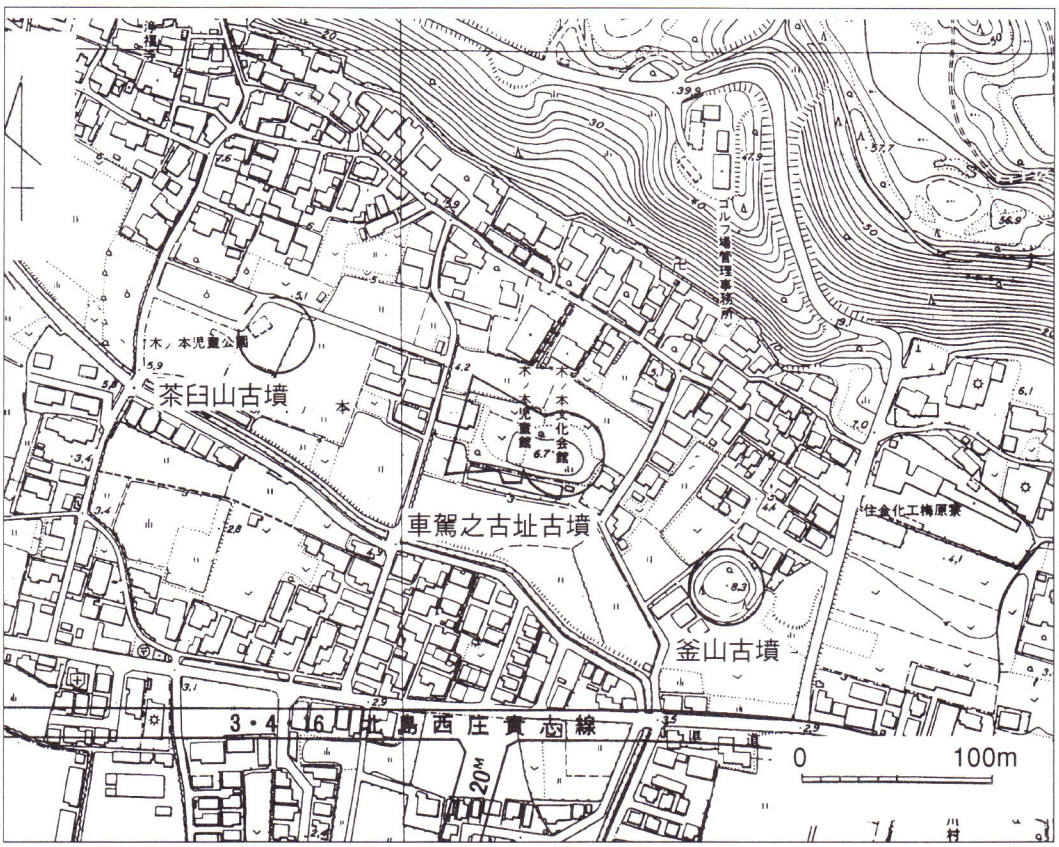
調査地　和歌山市木ノ本718－1他

調査面積　249㎡

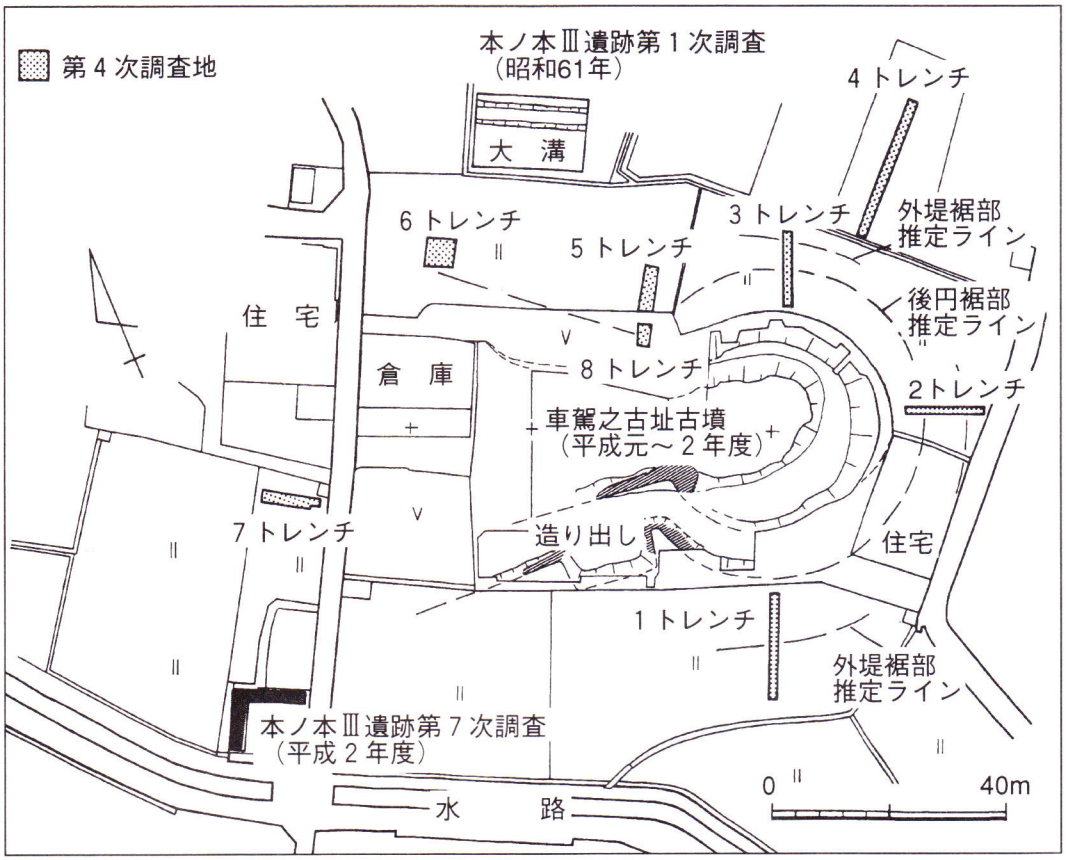
位置と環境

本古墳は、和歌山平野の北西部の平地に所在する古墳時代中期の前方後円墳である。平成元年度より始まった調査により、全長が80mを越え、周囲に盾形周濠をもつ県下で屈指の古墳であることが判明した。出土遺物としても国内で唯一の出土例である金製勾玉や数百点にものぼるガラス玉、多量の埴輪類(円筒埴輪・朝顔形埴輪・家形埴輪・盾形埴輪・囲み形埴輪)等重要なものが確認された。(注1)

本古墳の全体的な構造を解明するため、今年度より2ケ年にわたる国庫補助事業により、範囲確認調査を実施することとなった。



調査対象地の位置



調査地位置図

調査内容

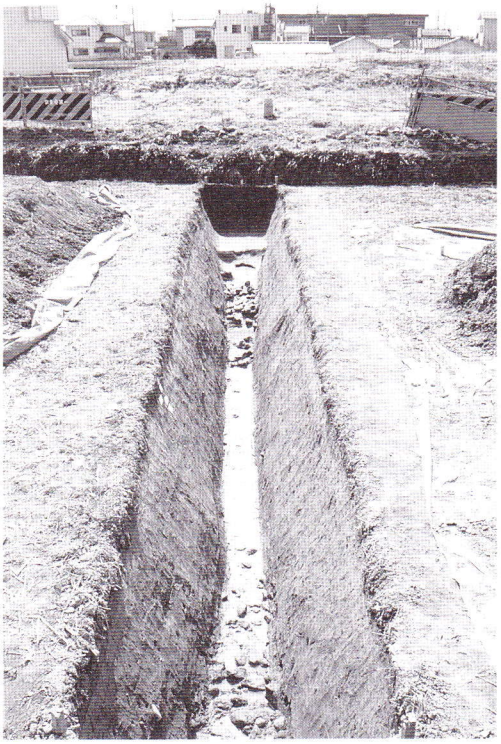
古墳周囲の主として水田部に8ケ所の調査区を設定した。1～3トレンチは後円部周濠、4トレンチは外堤部相当部、5・8トレンチはくびれ部、6トレンチは前方部北西部隅部、7トレンチは前方部周濠の位置に設定した。

(1)1トレンチ

後円部南側の水田に設定した幅2m、長さ20mの調査区で、水田面の標高は約2.9mである。地表より耕作土(1層、厚さ20cm)、床土(2層、厚さ5cm)、淡褐灰色砂質土(3層、厚さ 40cm)、灰褐色砂質土(4層、厚さ60cm)、暗灰褐色粘質土(5層、厚さ10cm)が堆積する。トレンチ北端より約9mの地点でベースとなる淡灰色砂層が南から北側へ20cm程度の比高をもって傾斜しているのが確認された。この傾斜部分で直径10cm前後の和泉砂岩の転石が若干みられたことにもより、この部分が周濠のたちあがり部分に相当すると判断された。

(2)2トレンチ

後円部東側に設定した幅2m、長さ16mの調査区で、水田面の標高は3.8mである。1～4層の堆積状況は1トレンチに類似するが、4層以下には青灰色粘土の堆積がみられた。ト



3トレンチ（北より。手前が外堤側）

3トレンチ（北より。後円裾部の葺石）

レンチの東西端部で葺石が確認された。西側の葺石は後円端部であり、東側の葺石は外堤部を構成するものである。長さ20cm程度の和泉砂岩の角石を15～20度の角度で積み上げていた。

(3)3トレンチ

後円部北側に設定した幅2m、長さ15mの調査区であり、水田面の標高は3.8mである。基本的な堆積は2トレンチと同様である。トレンチの北端で外堤部の葺石、トレンチの中央からやや南で後円裾部の葺石が確認された。後円部の葺石には長さ10～20cmの和泉砂岩の石材が使用されていた。周濠内の堆積土からは埴輪片が出土するが、かなり下層まで中世期の土師器・瓦器・青磁の出土もみられた。

(4)4トレンチ

今回の調査区のなかでは、最も北側に設定したトレンチで、幅2m、長さ25m、水田面の標高は4mである。耕作土・床土の下層に厚さ10～40cmと南側ほど厚くなる灰茶色系砂質土の堆積がみられた。遺構としては、トレンチ中央部で幅4.5m、深さ40cmの溝1を検出した。溝の南側斜面に葺石状の和泉砂岩の小礫をもつこの溝は、1986年度の調査において、この調査区から西へ約50mの位置でも検出されている。遺構面や溝内の遺物よりみて中世期の遺構と判断されるが、古墳の外堤との関係が注意される。

(5)5トレンチ

古墳北側の造り出しの確認のために設定したトレンチで、幅3m、長さ7m、水田面の標高は3.9mである。調査の結果、造り出

しは検出されず、周濠内の調査となった。最も下層は青灰色砂層で、この上層に周濠内堆積とみられる埴輪等を包含する暗灰褐色系粘質土や青灰色粘土がみられた。周濠底面のレベルは、調査区南端で標高2.1m、調査区北端で標高1.9mとなり、北側へ向かいやや傾斜しているものとみられた。

(6)6トレンチ

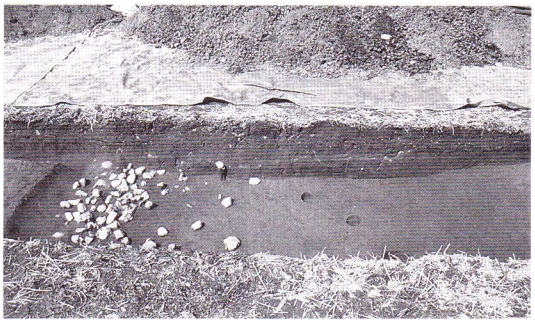
前方部の北西コーナー部を検出する目的で設定した調査区である。幅6m、長さ6mで、水田面の標高は4mである。最下層まで約2mの堆積土がみられた。標高1.9m前後が周濠の底面となり、葺石はみられなかったものの、調査区南西隅において和泉砂岩の転石が若干確認されたことより、墳丘裾部は、調査区のやや南側に位置するものと推定された。

(7)7トレンチ

古墳西側を南北に横切る道路のさらに西側に設定した調査区である。幅2.5m、長さ12mで、水田面の標高は3.5mである。耕作土・床土の下層には、中世の遺物を多く含む灰茶色系砂質土が厚さ40～50cmほど堆積する。この堆積土の下面が中世の遺構面となり、土坑・ピットが検出される。標高2.8m前後の中世遺構面の下層は無遺物の砂層となり、調査区全体が周濠の外部と判断された。

(8)8トレンチ

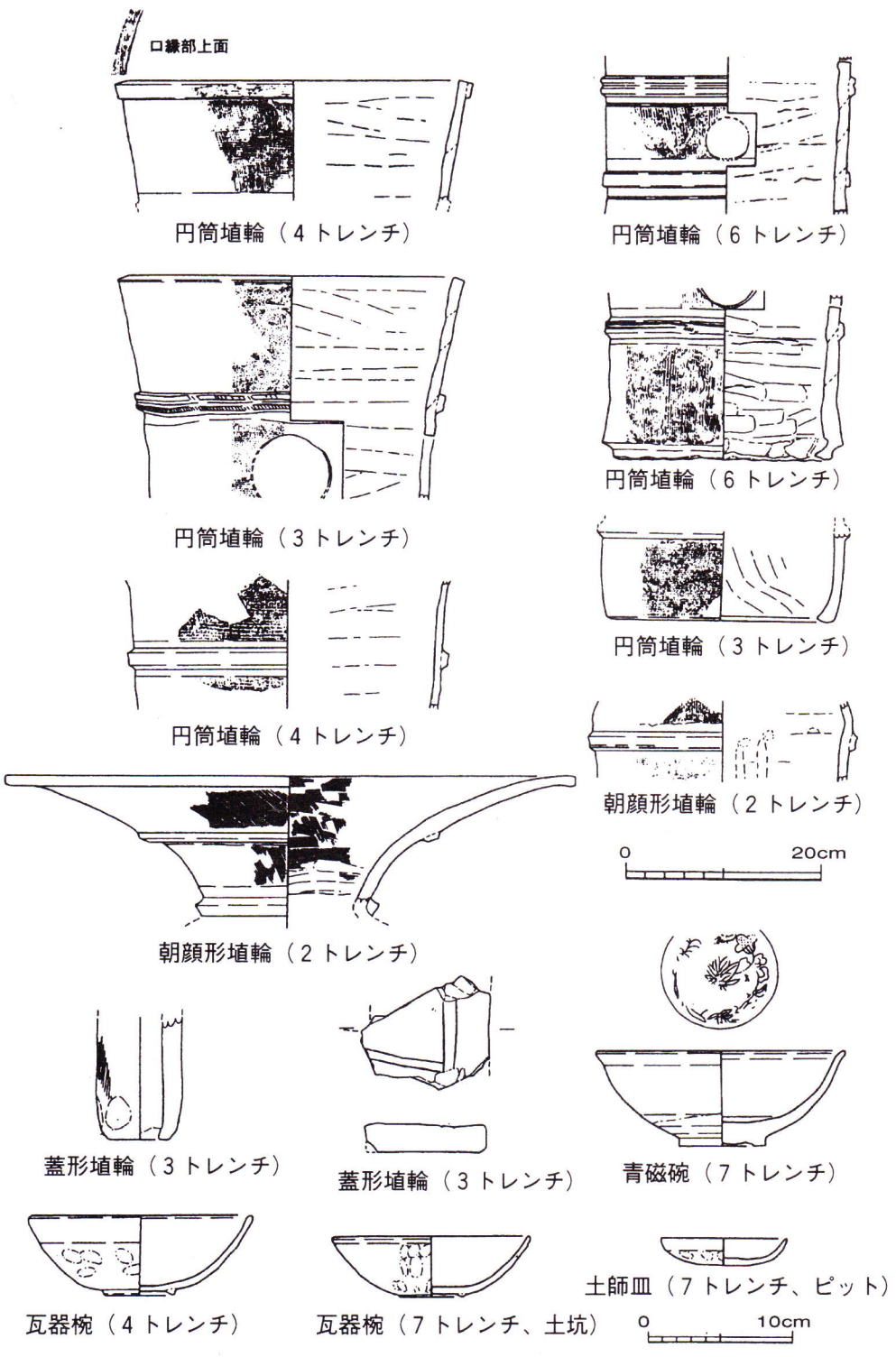
古墳北側のくびれ部付近の畑地に設定した調査区である。幅2.5m、長さ4mで地表面の標高は4.4mである。耕作土の下には灰褐色系の旧耕作土が厚さ60cm程度堆積し、さらに下層には茶褐色系砂質土の堆積がみ



4トレンチ（東より。溝1）

5トレンチ（南より。土層堆積）

8トレンチ（東より。土層と葺石検出状況）



出土遺物（カッコ内は出土場所）

られた。この茶褐色系砂質土の下面は、北側へ向かって低くなる傾斜をもっており、直径10～20cmの和泉砂岩の礫も検出された。これらは、遺存状態は悪いものの前方部葺石の一部と推定された。傾斜地の下端で標高2.3mである。

(9)出土遺物

遺物としては、大きく古墳時代のものと中世のものに2分される。古墳時代のものとしては、周濠内の堆積土や葺石の上部より出土した埴輪類がある。本来、墳丘上や外堤上に樹立していたものが、破損・転落したとみられ、いずれも原位置を保つものではなく、小破片となっている。円筒埴輪は、口径が30～40cmで、直線的に開く形態をもつ。端部には面が形成されるが、まれに口縁外側を段状に肥厚させるものもみられる。胴部は、タテハケのちヨコハケにより調整されるものが大半で、一部にタタキ技法も確認される。底部は淡輪技法とよばれるものが多くみられる。焼成としては無黒斑であるが、須恵質と半須恵質・土師質のものがある。形態や技法よりみて川西宏幸氏の編年案(注2)による4期に併行するとみられる。その他の埴輪として朝顔形埴輪・蓋形埴輪がみられた。

中世期のものとしては、青磁碗・瓦器椀・土師皿等が出土した。各トレンチでは周濠内の堆積土よりの出土であったが、7トレンチでは、土坑やピットからの出土が確認された。

まとめ

2・3トレンチにおいて後円部裾部の葺石、1～3トレンチにおいて外堤部の葺石が確認されたことにより、後円部周囲の様相が判明した。本来の基底石は確認されなかったが、葺石や斜面の状況よりみて墳丘・外堤裾部を推定することは可能であった。裾部は標高2.1～2.2mに形成されており、周濠はさらに中央部に向かい緩やかに傾斜する形態をとり、底面中央部のレベルは標高1.8～1.9mとなる。1トレンチで周濠の底面幅が推定12m、2トレンチで約7m、3トレンチで約5mとなり、古墳南側ほど周濠幅が広くなる傾向がみられた。外堤の斜面よりも埴輪片が出土することより、外堤上にも埴輪列が形成されていたことは確実であるが、後世の削平により、周濠側斜面の下部しか遺存していないため、上部構造は不明である。

7トレンチでは中世の遺構面が確認されたが、近接する木ノ本Ⅲ遺跡第7次調査区においても中世の石垣・礎石・溝等が検出されており(注3)、本古墳の前方部西側に良好な中世遺構面が展開しているものと考えられた。

(前田敬彦)

(注1)『車駕之古址古墳発掘調査概報』和歌山市教育委員会(1993)
前田敬彦「和歌山県和歌山市車駕之古址古墳」『日本考古学年報』46(1995)
(注2)川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2(1978)
(注3)『木ノ本Ⅲ遺跡第7次発掘調査報告書』(財)和歌山市文化体育振興事業団(1990)

【平成5(1993)年度】

9. 史跡和歌山城 第12次調査

調査地　和歌山市一番丁

調査面積　967㎡

位置と環境

史跡和歌山城は、紀ノ川の河口南岸の標高48.9mの小丘(虎伏山)上に位置している。この山は、古代において一孤島であったとされ、紀ノ川の沖積作用と砂州によって陸地となったもので、今回の調査においても西側の堆積層は細砂がほとんどであった。

和歌山城遠景（西から）

次に、歴史的に和歌山城をみると、その創建は天正13年(1585)に遡ることができる。豊臣秀吉の紀州平定により、紀伊国は豊臣秀長が領有したが、秀長は大和郡山城に在城したため和歌山城には城代として桑山重晴を置いたのが最初である。しかし、この当時の史料はほとんど現存しておらずどのような城郭であったかは不明である。

桑山氏にかわって紀州の領主として入国したのは、慶長5年(1600)の関ヶ原合戦において戦功のあった浅野幸長である。幸長は、入国後城郭の大規模な改修や城下町の建設に取りかかったとされ、浅野氏が広島へ転封され、徳川頼宣が入国した元和5年(1619)には、すでに和歌山城はほぼ完成していたとされる。そして、徳川時代に入り、頼宣によって大規模な普請が進められ、二の丸・砂の丸・南の丸などの増築が行われたとされる。

また、和歌山城では火災が多く、特に弘化3年(1846)の天守閣への落雷による火災は大小天守閣を始め、櫓4ヶ所・蔵3棟・多門櫓63ヶ間などを焼きつくしたとされる。天守閣の再建は御三家という立場から5ヶ月後には許可され、焼失以前と同様の三層で嘉永3 年(1850)に完成している。

その後、100余年にかけて江戸時代の様子を伝えてきた和歌山城は、第2次世界大戦による大空襲で昭和20年(1945)に再び焼失したが、戦後の城郭復興運動により、昭和33年(1958)に外観のみ原形を伝える復興天守閣が完成し、市民の憩いの場として活用されている。

史跡和歌山城の発掘調査は、昭和56年度における一の橋大手門再建工事に伴う調査を

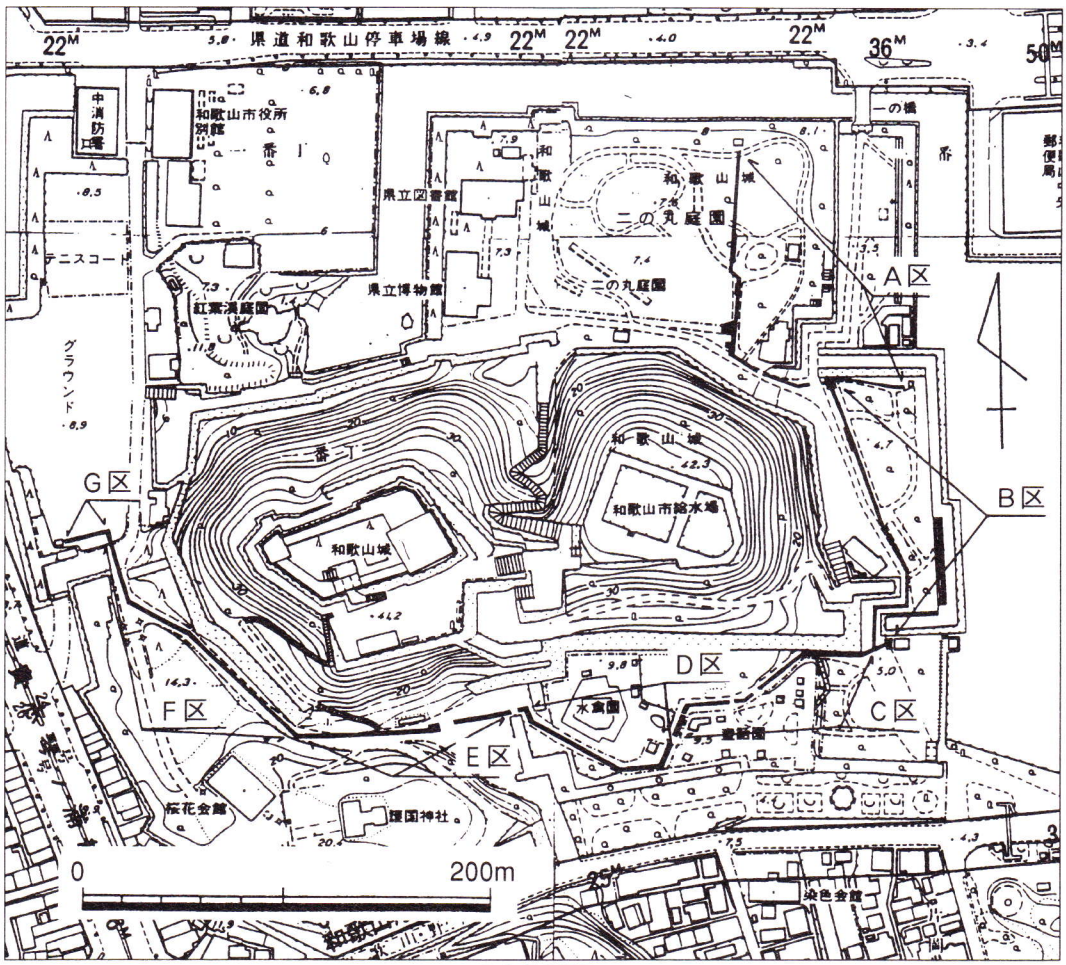
最初に今回が12次を数えるに至っている。そして、これまで多くの遺物や遺構を検出し、不明な点も徐々に解明が進んできている。

調査内容

今回の調査は、和歌山城内における公衆トイレの水洗化に伴う工事に先だって、平成5年5月から同年10月まで実施したものである。本書における調査の内容は、すべて『史跡和歌山城第12次発掘調査概要報告書』(平成5年度刊行) による。

調査地は、和歌山城の北東端に位置する二の丸庭園から城の東側を通り、表坂の東側、また中御門跡をぬけ、西に折れ曲がり童話園、水禽園の通路を通って駐車場を横切り、天守閣の西側を通って砂の丸に至る延長約700mにおいて幅1～1.3mのトレンチを設けた。この調査地を7区画(A区～G区)に分け、順次調査を行った。また、調査に際して江戸時代の文献である『和歌山御城内総御絵図』 を参考にした。

今回の調査において特に遺構等が多く検出できた地区は、二の丸跡など城の主体的な位置をしめるA区からC区であり、E区からG区にかけてはほとんど遺構は検出できなかった。

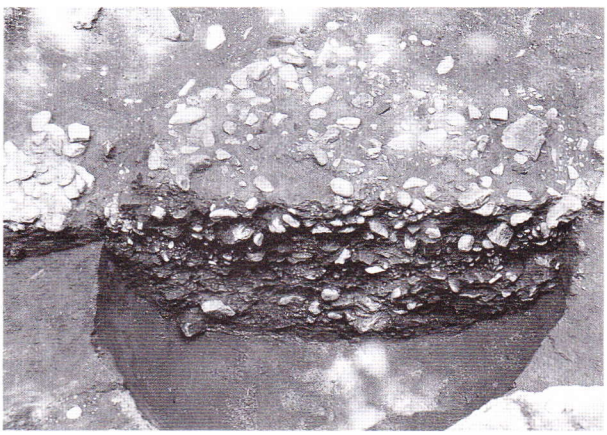


調査位置図

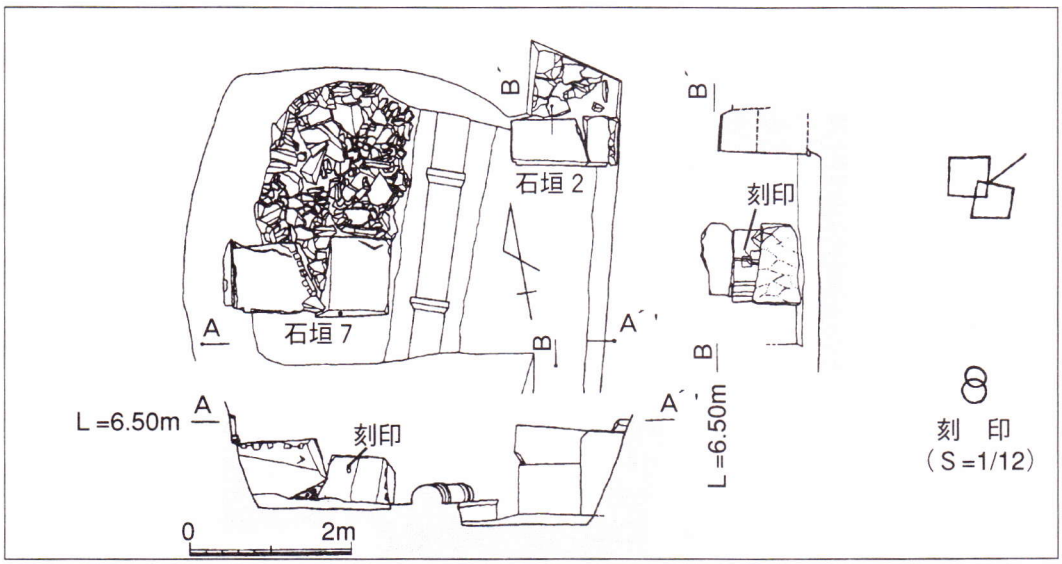
まずA区の二の丸跡を中心とした調査では、北側がNHKなどの建物が建てられていたこともあり、すでに江戸時代の遺構面は壊され、大規模な撹乱が存在するのみであった。しかし、中央より南側では表土下約70cmに良好な遺構面が検出でき、この遺構面上において二の丸御殿に関するとみられる根石が15ヶ所において確認できた。この根石は、円形で深さ40cm～60cmの穴に約5cm大の河原石と粘質土を混ぜて突き固めているもので、この上に礎石を置いていたとみられる。また根石間の間隔は、約3mを測るものと約2.7mを測るものがあり、重なりから少なくとも二時期の建物が存在したことが推察される。

次に、二の丸跡の南端で検出できた石垣2および7の遺構は、二の丸と南側の通路部分を区画すると

A区二の丸跡根石群（南から）



二の丸跡根石７土層状況（西から）



石垣２、石垣７実測図

みられる石垣であり、中央部分は現代の下水管によりすでに壊されているが、石垣2と7は約1mの段差をもち、石垣7は南側に突出している状況であった。これらの石垣の石材は、和泉砂岩の加工石を用い裏込め石には緑色片岩の割石を使っている。また、石垣7の和泉砂岩には、石を切り出したときの矢跡が明瞭にみられ、その表面や側面には刻印が刻まれている。このような刻印が刻まれた石垣は浅野期に築かれたものが多いとされるが、この石垣については明確なものではない。

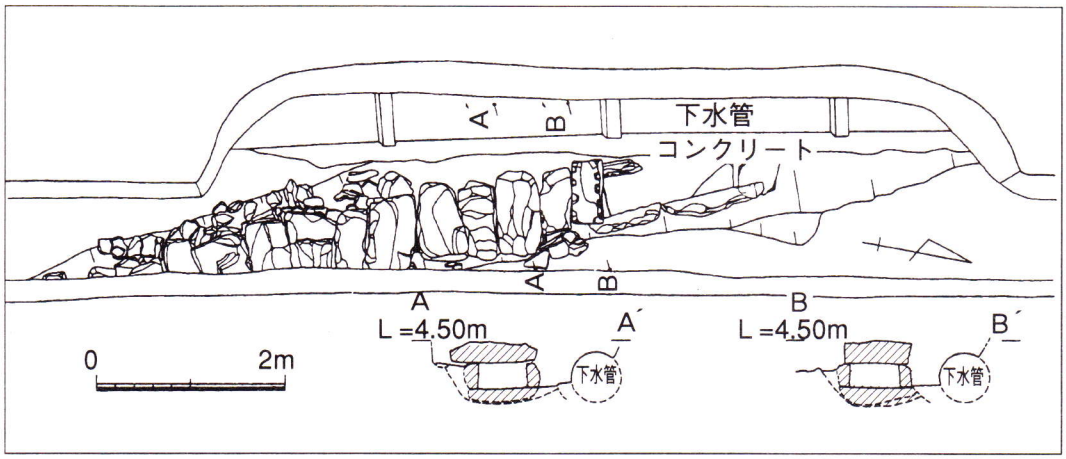
次に、B区からC区にかけて多く検出された遺構として暗渠排水施設がある。この暗渠排水施設は地中に埋められた石組みの溝であり、明確なもので5条確認し、主に城内の雨水等の排水を外堀に流していたものとみられる。

まず暗渠排水溝(溝7)は、B区の表坂東側の通路部で検出したもので、緑色片岩の石材を組み合わせて構築している。この溝の幅は50cm、蓋石までの高さが40cmであり底石をもたないものである。この溝を検出した状況は、一部の蓋石が外され現代の土管から排水がこの溝に流し込まれており、現在でも機能している溝であることが確認できた。

また下図の暗渠排水溝(溝5)は、溝7の北側で検出したもので、溝7とは異なる石材である和泉砂岩により構築された溝であり、特に底石と側石の内側は平らで丁寧に加工されている。また蓋石には、石を切り出したときの痕跡である矢跡が顕著にみられるものもある。この溝の内部幅は50cm、蓋石までの内部高は25cmを測る。

B区暗渠排水溝７（東から）

このほかC区の高石垣直下の坂道地点においても暗渠排水溝(溝10)が検出され、約



暗渠排水溝５実測図

9°の勾配をもつ坂道に約30mにもわたっている。この溝の内部幅は40cm、蓋石までの高さは30cmを測り、主に側石には和泉砂岩、蓋石には緑色片岩を使用し、これらの石を使い分けているのが特徴的である。

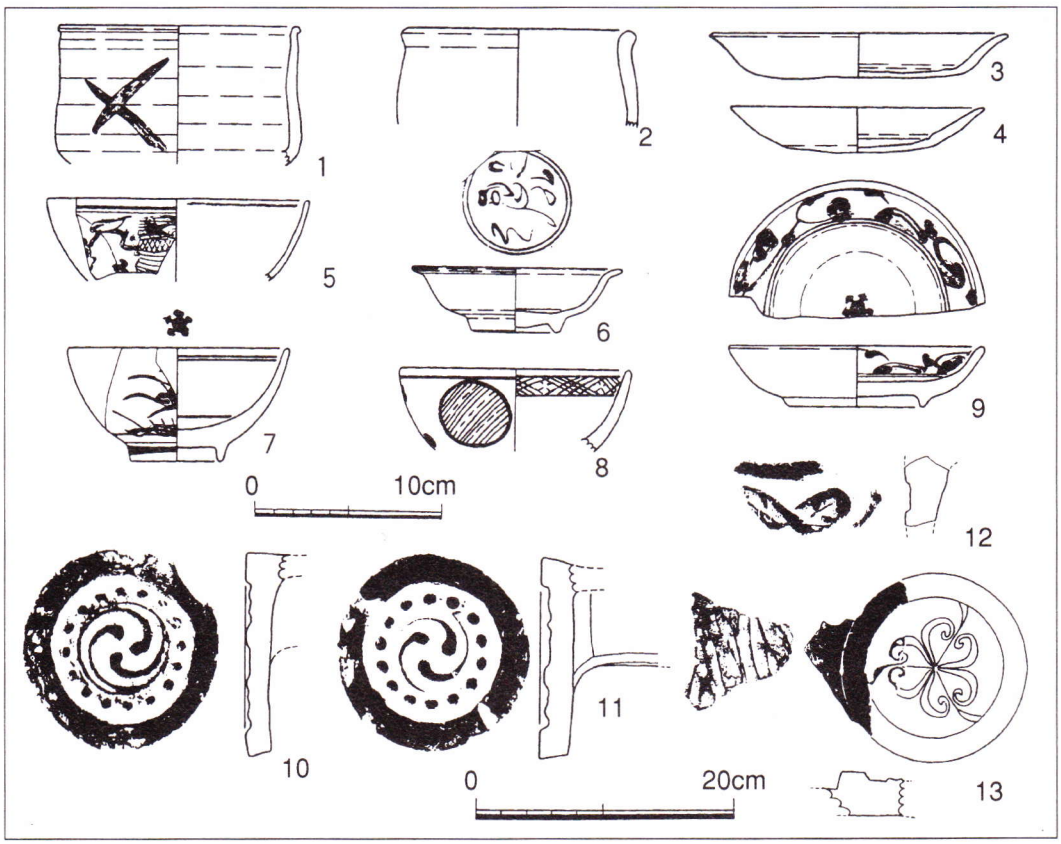
このような暗渠排水溝の構築された時期は、出土遺物が希薄であるため確定できないが、溝10の溝掘方から若干の遺物が出土しており、この遺物より17世紀初頭頃の年代が得られた。

以上が主要的な遺構の概要であるが、このほかにもB区において中御門跡の門柱礎石が検出できるなど重要な遺構が存在していることが明らかとなっている。

次に、今回の調査で出土した遺物は全体的に希薄であり、遺物の大半は近世以降の整地層に含まれていたものである。遺物の種類としては、圧倒的に多いものが瓦であり、これに国産の陶磁器類がほとんどである。特殊な遺物としては、古墳時代の須恵器、近世初頭の輸入磁器、中世末の石造物などがある。

下図(1～4)の遺物は、A区二の丸跡の根石1から出土した一括資料である。1・2はいわゆる唐津系陶器碗であり、1には体部外面に鉄釉による絵付けがみられる。また土師器皿(3・4)は、内面に底面と側面を区画する強い指ナデが巡るのが特徴的である。

5・6は輸入陶磁器である。まず碗(5)は、やや内彎する器形をもつ中国製染付碗であり、



遺物実測図

体部の器肉も比較的薄く、呉須の発色も良好なものである。皿(6)は、同じく中国製の染付皿で大きく外反する口縁部を呈し、釉はやや灰味を帯び比較的粘性の高いものである。これらの器形は上田秀夫氏による碗C-Ⅴ類、皿C-Ⅳ類にそれぞれ比定できる。

また、国産の磁器では肥前磁器の碗・皿(7～9)が大半を占め、わずかに瀬戸美濃系の磁器が含まれ、中でも18世紀代のものが多く出土している。このほか雑器類では、灯明皿・擂鉢・炮烙などがある。

次に、瓦ではA区二の丸跡において出土したものが圧倒的に多い。軒丸瓦では比較的古いタイプである一群に巴文の尾部が長く、連珠文の径が小さく数が多い(10)があり、さらに瓦当の径が15.5cm前後のものと17.5cm前後のものに分けられる。また時期が下るものでは巴文の尾部が短く、連珠文が大きいタイプの(11)がある。軒平瓦では、均等唐草文をもつものがほとんどであるが、中には浅野家の家紋である「鷹羽文」をもつ(12)がある。道具瓦の中には徳川家の家紋である「三葉葵文」をもつ獅子口(13)などがある。

まとめ

今回の調査は、これまで調査例のなかった二の丸跡から砂の丸跡まで和歌山城を半周する範囲において実施した。この調査による成果は、各調査地点による遺構等の有無や遺構面の状況、堆積層の状況が得られたことである。特に、二の丸跡では二の丸御殿の礎石は検出できなかったものの明確な根石群を検出し、二の丸跡の一部に良好な遺構面が保存されていることが明らかとなり、また二の丸跡の正確な範囲を示すとみられる石垣が残されていることが解明できたことが最大の成果であったといえる。また、全体的にみて江戸時代に描かれた『和歌山御城内総御絵図』と合致することが多くを数えたが、中には絵図と違った状況も確認できた。しかし、今回の調査区は幅が極端に狭かったことにより、正確な遺構の広がりを得ることができず、今後の調査によることが大きい。

次に、遺物については先に触れたとおり全体的に希薄であり、特に遺構に伴うものは圧倒的に少ないのが現状である。しかし、二の丸跡の根石から出土した遺物からは17世紀前半代の時期が得られ、少なくともこの時期には二の丸に関する建物が存在したことが明らかとなった。このほかにもC区の暗渠排水溝(溝10)は、その出土遺物より17世紀初頭の構築と考えられる。

以上のことから、17世紀の前半から中頃には二の丸御殿や排水施設はほぼ完成していたことが窺え、文献史料の裏付けになるものと考えられる。

国の史跡である和歌山城は、県内で最も重要な近世の遺跡であり、この遺跡の発掘調査は今回で12次を数えることとなった。そして、これまでの調査でも数多くの遺構・遺物を検出し、少しずつ実態が明らかとなってきている。今回の調査もその一助になったものといえる。

(井馬好英)

10. 鳴神Ｖ遺跡 第３次調査

調査地　和歌山市鳴神1014－5番地～1024－4番地

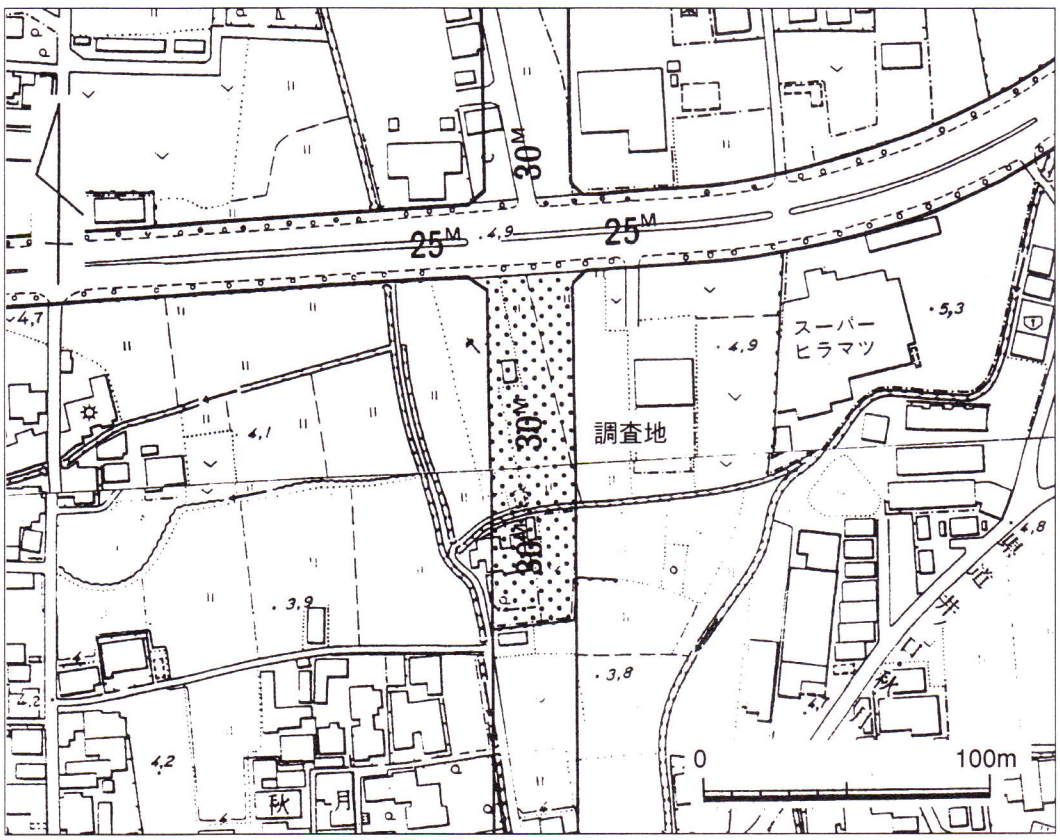
調査面積　3000㎡

位置と環境

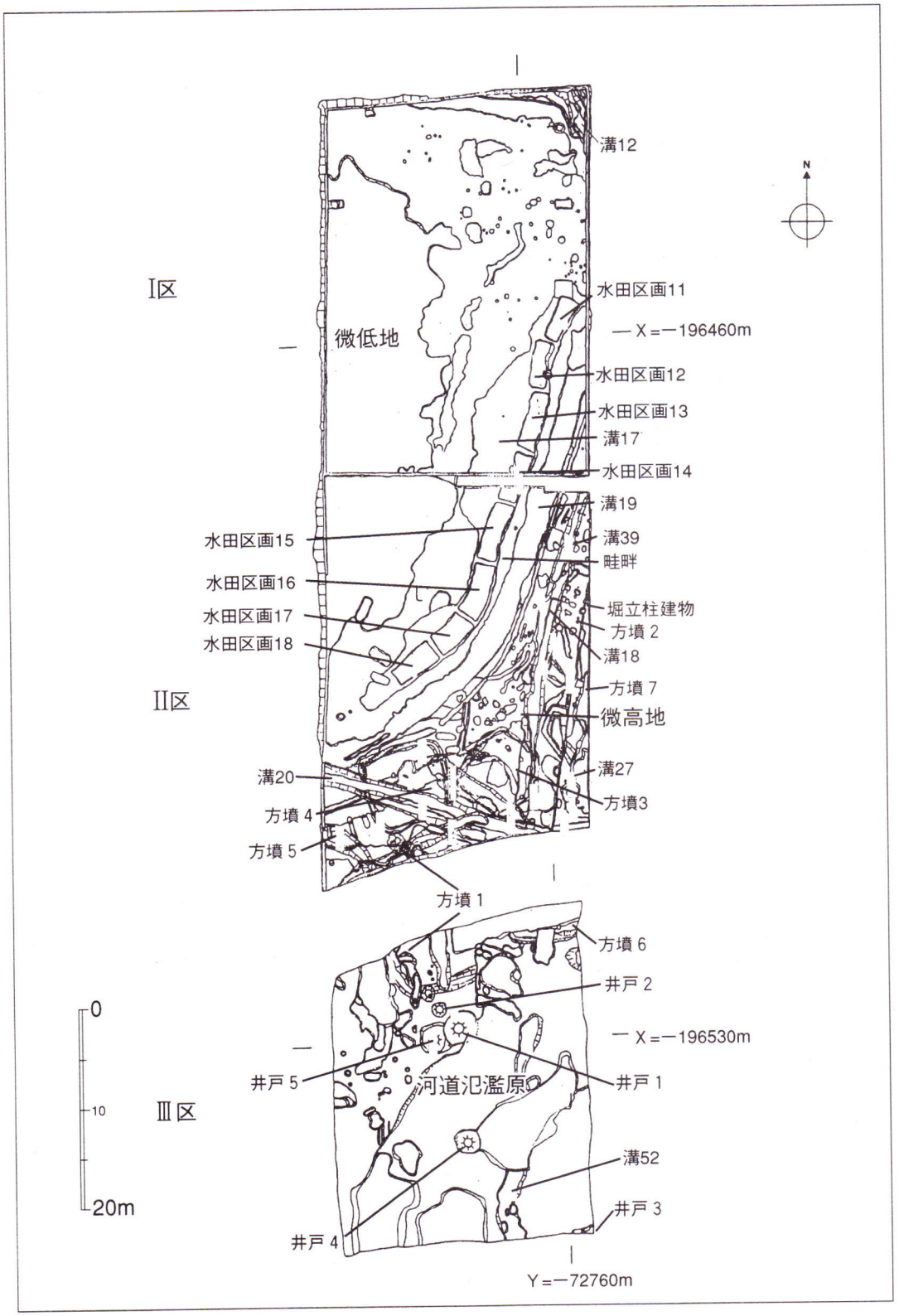
鳴神Ｖ遺跡は紀ノ川南岸の和歌山平野に位置し、和歌山市鳴神を中心とした南北約３００m、東西約５００mの範囲と考えられている。遺跡は標高４m前後の沖積地であり、今回の調査地は遺跡の南縁部に相当する。北側隣接地は和歌山県教育委員会が昭和５２～５４年に国道２４号線バイパス建設に先立ち調査を行い、古墳時代前期の大溝群や円形周溝墓（円墳）などが検出されている。

調査内容

東西約３０m、南北約１００mの南北に細長い調査区で、古墳時代前期から江戸時代に至るまでの諸遺構を検出した（図参照）。これらの遺構は調査地の中央から南東部に展開する微高地上及び微高地縁辺部に立地する。検出した遺構の概要は、微高地上で古墳時代前期から後期の方墳７基、平安時代の溝３９、鎌倉時代の溝２０・石組井戸５基、江戸時代の河道氾濫原・溝５２などを検出した。微高地縁辺部では古墳時代前期の水田



調査位置図（1/2500）

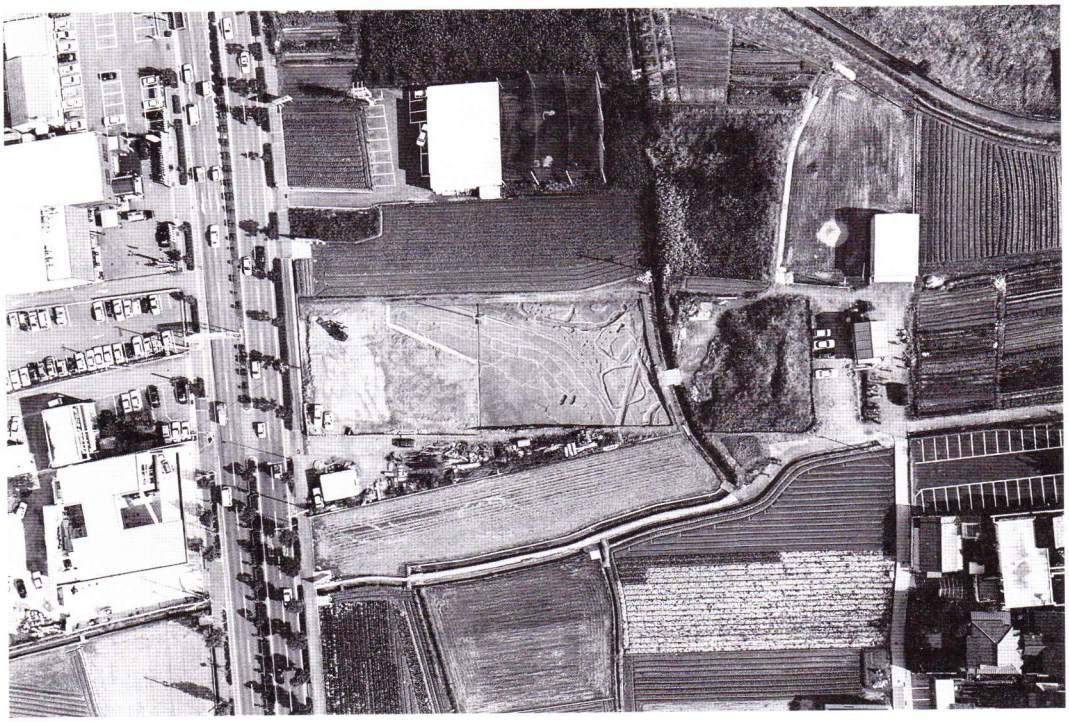

溝12
N
I区
水田区画11
微低地
X＝−196460m
水田区画12
水田区画13
溝17
水田区画14
溝19
水田区画15
溝39
畦畔
水田区画16
水田区画17
水田区画18
堀立柱建物
方墳 2
溝18
方墳 7
II区
微高地
溝27
溝20
方墳3
方墳 4
方墳 5
方墳 1
方墳 6
井戸 2
X＝−196530m
井戸 5
河道氾濫原
井戸 1
0
10
20m
III区
溝52
井戸 3
井戸 4
Y＝−72760m

遺構平面全体図

区画８単位及びそれに伴う用水路とみられる溝１９、微高地縁辺部を区画する古墳時代後期の溝１８などを検出することができた。主な遺構の詳細は、先に概要報告書 に報告することができたが、以下概要を説明する。

方墳は７基検出したが、埋葬施設は全て削平されており、周溝によって認識したものである（写真参照）。方墳１は一辺14.20mの隅丸方形の基底部をもつ。周溝は最大幅1.90m、深さ約35cmを測る。これらの周溝は完形土器が多く出土しており、北東隅で土製支脚(4)、北辺の西寄りで土師器二重口縁壷(1)、西辺南寄りで底部穿孔された土師器広口壷(3)、南辺中央で土師器小形丸底壷（2)が出土した（図参照)。出土遺物から、古墳時代初頭のものと考えられる。方墳２は一辺10.8mの隅丸方形に近い基底部をもつ。周溝は西辺と北辺・南辺の一部を検出した。西辺は長さ10.8m、最大幅1.45mを測るが、削平が著しく最大深度で23cmである。方墳３は北西辺が 7.75m、北東辺が6.8mを測る隅丸長方形の基底部をもつ。最大幅80cmで深さ約30cmを測るものである。方墳４は北辺が8.30m、東辺が7.65mの隅丸長方形の基底部をもつ。周溝は最大幅85cm深さ35cm～20cmを測るものである。方墳５の北東部の隅であると思われる周溝を延長約6.0m検出した。周溝の最大幅は2.35m深さ約50cmを測る。１頭分の馬歯及び破砕された土師器甕が出土した。方墳１を切る遺構である。出土遺物から、古墳時代中期のものと考えられる。方墳６の周溝はⅢ区の北東隅に溝の南辺の西側半分、延長 6.4mを検出した。周溝は最大幅1.4mを測るが、削平の為非常に浅い。１頭分の馬歯、完形の土師器高杯・直口壷などがほぼ底面に接して出土した。古墳時代中期のものと考えられる。方墳７は周溝の西辺及び南西隅部分を検出した。周溝は幅2m、14.8m以上を測る。出土遺物は須恵器甕・壷・高坏・蓋杯、土師器甕・高坏、馬歯など多量である。

微高地縁辺部では古墳時代前期とみられる水田区画（水田11～水田18）とそれとセット関係にあると思われる溝１９などがある（写真参照)。水田区画はいわゆる小区画水田であり、微高地縁辺部を地形に沿って北東から南西に展開するものである。区画は８単位（水田11～水田18）あり、１単位は長辺4.0～6.15m、短辺1.75～2.30mの規模を測る北東から南西に長い隅丸長方形のものである。水田区画は８単位の総延長が約48mの距離を測る。水田耕土とみられる埋土は灰黄褐色粘質土で深さ５～10cmである。水田上面は削平を受けているが、埋土を掘削後の標高は水田11が3.08m、水田15が3.12m、水田18が3.13mを測り、水田面はほぼ水平に安定していたことが推定できた。最も北側の水田11埋土から古墳時代初頭とみられる甕の底部が出土している。水田区画の直上には溝17がこれを覆うように堆積しており、遺構埋土からは古墳時代前期の土師器が出土する。溝19は水田区画と微高地の間に地形に沿って掘削されており、延長約50m、幅2.8m の規模のものである。遺構埋土は黄灰色粘質土で深さ５～10cmを測る。埋土を掘削後の標高は北東端で3.28m、南西端で3.18mを測り、北東から南西へ緩やかな傾斜をもつ。水田区



調査地全景（左が北）

方墳群（左が北）

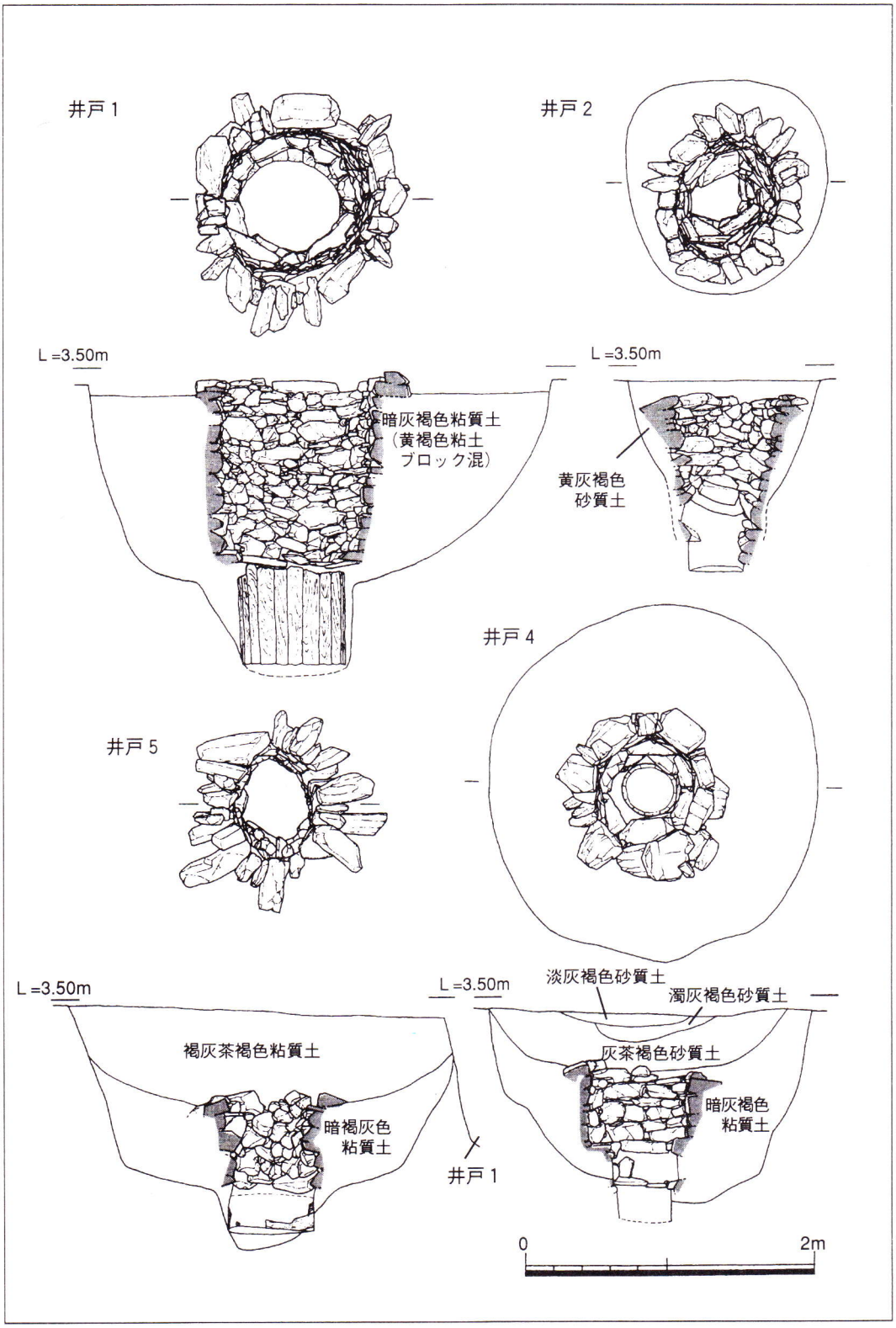
水田区画（上が北）

画との間は幅1.5～0.5mを測り、本来の盛土は失われているが畦畔にあたる部分であると考えられる。

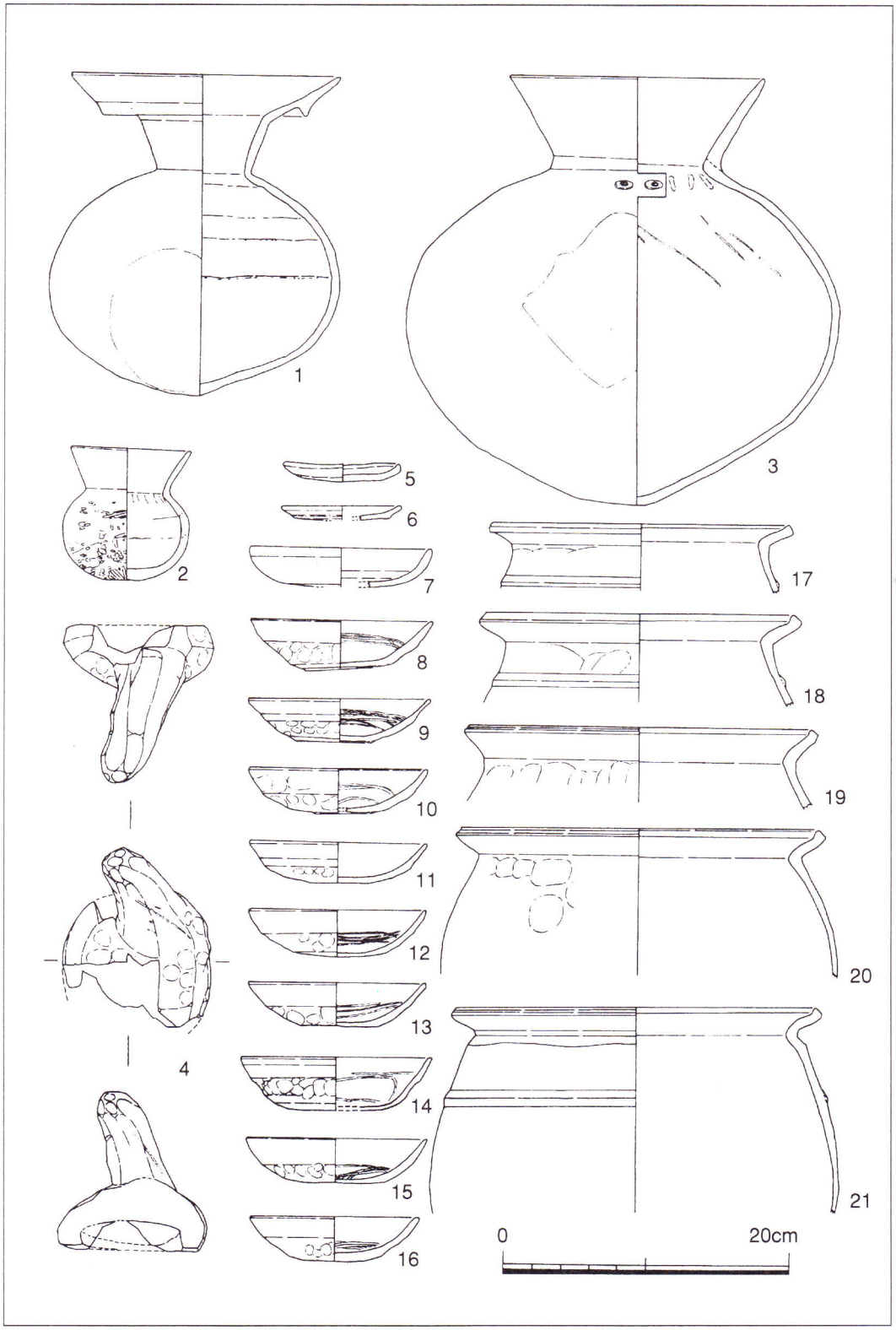
第Ⅲ区において石組井戸が５基検出された（図・写真参照）。使用石材は主として緑色片岩である。井戸１は第Ⅲ区の中央からやや北よりに位置し、井戸５を切っている。内径 1.0m、深さ1.2mを測る石組の下に直径0.8m、深さ0.9mの桶を据えている。石組の上一段目はそれより下と積み方が異なり、また間に土を挟んでいることから、補修のための積み替えが行われていたものと考えられる。直径3.0mの掘り方をもつ。井戸２は井戸１、井戸５の北隣に位置し、内径で長径0.9m、短径0.7mの楕円形で、深さは1.2mである。深くなるほど内径は小さくなるが、石組の最下段がテラス状になる。石組の下に木片を検出しており、下部に木製枠があったものと考えられる。井戸４は内径0.7m、深さ0.8mを測る石組の下部に曲物を二段据えており、石組の底と中間にテラス状の石組部分を有する。井戸５は井戸１に切られており、石組は遺構検出面から約0.5mの深さまで抜きとられ、その下に石組が1.0mの深さで残存していた。曲物による下部構造がある。石組井戸は全て鎌倉時代のものと考えられる。

出土遺物は全調査区でコンテナに約１００箱出土した。量的にみた場合、遺物包含層である第４層からの土器類の出土が顕著である。その他、方墳１の溝から完形の土師器壷・土製支脚などが、井戸４から瓦器椀などが出土した（図参照）。遺物の種類は、土師器・須恵器が主体を占め、埴輪・製塩土器・黒色土器・輸入陶磁器・灰釉陶器・緑釉陶器・瓦・竈・ふいご・紡錘車・土錘・耳環・管玉・石器・馬歯などがある。

井戸１、５断面（南から）


井戸 1
井戸 2
L =3.50m
暗灰褐色粘質土
（黄褐色粘土
ブロック混）
L =3.50m
黄灰褐色
砂質土
井戸 4
井戸 5
L =3.50m
褐灰茶褐色粘質土
暗褐灰色
粘質土
井戸 1
L =3.50m
淡灰褐色砂質土
濁灰褐色砂質土
灰茶褐色砂質土
暗灰褐色
粘質土
0
2m

井戸実測図



遺物実測図（1～4方墳1周溝出土 5～21井戸4出土）

まとめ

今回の調査では微高地上で古墳時代前期から後期の方墳７基、微高地縁辺部で古墳時代前期の水田区画８単位及びそれに伴う用水路と畦畔などを検出することができた。

出土した遺物などから考えて微高地上の各方墳の時期は方墳１出土土器が庄内式新段階併行期（３世紀末～４世紀初頭）に属すること、方墳６では５世紀後半とみられること、方墳７が６世紀後半の遺物が出土することなどから方墳１・２⇒方墳３～６⇒方墳７の築造順位が考えられる。また、古墳時代前期の方墳１では、周溝底に散在的に供献土器をそなえているが、古墳時代中期では周溝底に供献土器や馬歯（馬首）をそなえる方墳５・６と、ほとんど遺物を出土しない方墳３・４の２群に分けることができる。このことは、古墳の規模と深く関わることと考えられ、周溝の規模及び平面プランの大きい方墳５・６と小規模な方墳３・４に対応するものと考えられる。ここに、古墳の同一墓域内での格差をみることができる。ところで、和歌山平野において当該時期の古墳が検出されているのは、本遺跡の西側にある秋月遺跡と本遺跡及び鳴神Ⅳ遺跡の３遺跡である。秋月遺跡では４世紀代の前方後円形の古墳が５世紀代の方墳７基とともに確認されている。鳴神Ⅳ遺跡では和歌山県教育委員会の鳴神地区遺跡調査時に直径約６mの４世紀代の円墳が１基確認されている。本調査検出の古墳群との直線距離は約３００mであるが、地形的なことを考えるならば別の墓域であろう。さらに、鳴神Ⅴ遺跡から西に約５００mの距離にある花山古墳群の古墳築造開始期が４世紀末～５世紀初頭頃からであることを考え合わせるならば、それに先行する墓域をもつ鳴神Ⅴ遺跡は秋月遺跡などとあわせ、和歌山平野のなかにあっては、古墳時代の墓制を考える上で非常に重要な遺跡であるといえる。

微高地縁辺部の古墳時代前期のものとみられる水田区画について、水田区画と微高地との間に掘削された用水路は北東方向から水を引くが、和歌山県教育委員会の鳴神地区遺跡の調査で検出されている古墳時代前期（庄内式～布留式並行期）の灌漑用水路（鳴神地区遺跡内のF・H地区SD－０９７、Ⅰ・J地区のSD－２０４、J地区のSD－２５８）から分水していることは明らかであり、J地区SD－２５８には水量調節のための堰が設けられていたことが確認されている。おそらくは、これらの大規模な灌漑用水路の本流は本調査地外の東部を流れていたものと思われる。本調査検出の水田区画は土壌分析の結果、耕土とみられる土壌からイネのプラント・オパールが検出されたが、同時にアシ類がみられないことなども明らかとなった。このことは湿地ではなかったことを示すものである。また、花粉分析の結果では水田雑草の花粉が微量検出され、他のほとんどの花粉が分解されていたことが明らかとなった。以上のことから、検出した水田区画が湿田ではなく、微高地縁辺部といった水の管理の比較的容易な場所での乾田あるいは半乾田を営んでいた可能性が考えられる。以上、今回の調査で古墳時代の方墳群及び水田区画を検出し、当地においての墓域・生産域など古墳時代の文化を考える上での貴重な資料を提供することができた。

（北野隆亮）

11. 寺内古墳群 確認調査

調査地　和歌山市森小手穂1603他

調査面積　700㎡

位置と環境

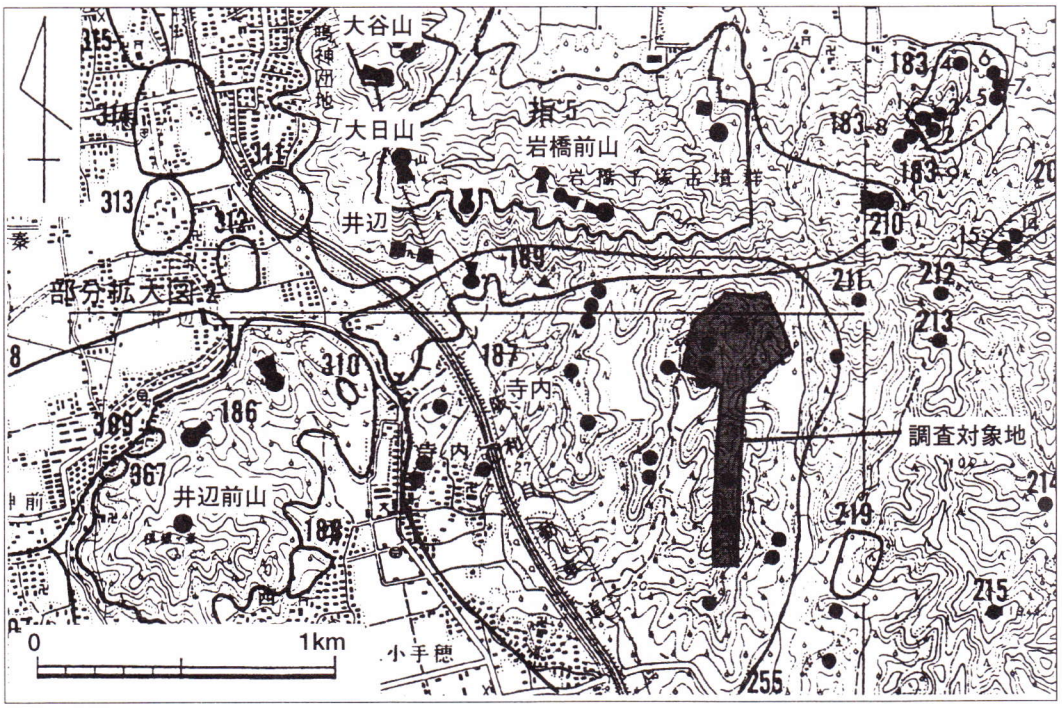
和歌山市の東部、標高約150mの岩橋丘陵上には、古墳総数が700基にものぼるとみられる県下最大の古墳群である岩橋千塚古墳群が存在する。この岩橋千塚古墳群は、古墳の分布状況や地理的環境によりいくつかの古墳群(支群)に分けてとらえられることが多い。最も古墳の密集する岩橋前山古墳群を中心とし、周囲には花山古墳群・大谷山古墳群・大日山古墳群・井辺古墳群・井辺前山古墳群・寺内古墳群等が分布する。

近年、様々な開発が市内の丘陵部に及びつつある。この岩橋丘陵も例外でなく開発の危機にさらされている。岩橋千塚古墳群の中枢部に近接していながら、これまで詳細な分布調査が実施されなかった寺内地区の確認調査を国庫補助事業により実施した。

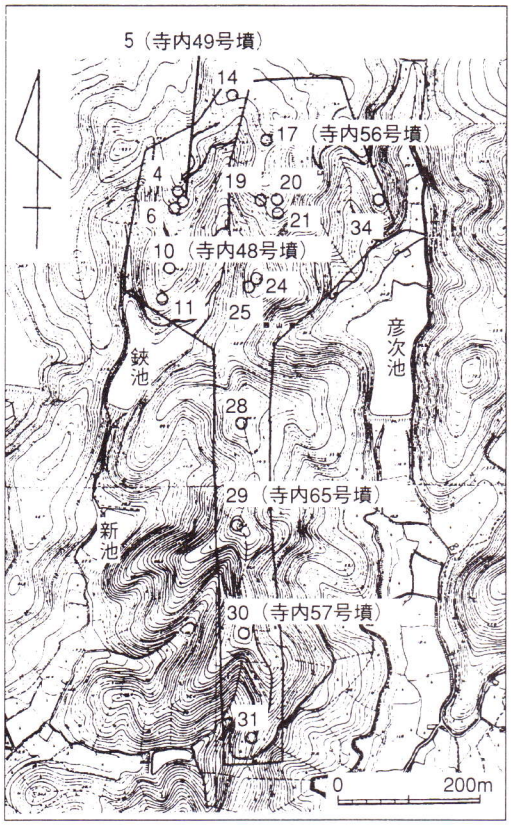
調査内容

(1)対象地の状況と調査方法

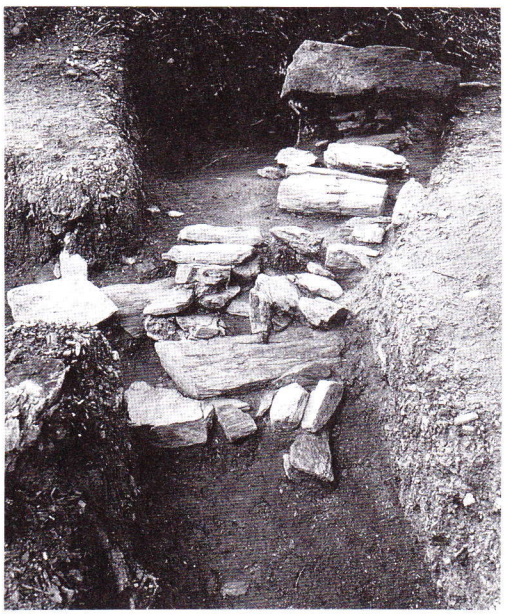
対象地は、寺内古墳群の分布範囲の東側、最も南へ延びる丘陵地であり、地形によりさらに三つの地域に区分された。南北に延びる中央丘陵と西側の鋏池へ延びる西丘陵、東側



調査対象地の位置[(注1)]（名前は古墳群名）



調査対象地と主要遺構検出地点



4地点 横穴式石室（羨道と閉塞石。南より）

の彦次池の北へ延びる東丘陵がそれである。

現況ではこの地域は大半が雑木林であり、一部が果樹園に開墾されている。和歌山県教育委員会刊行の『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』(平成元年、以下では『地図』と記述)によると対象地内には、寺内48号墳・49号墳・56号墳・57号墳・65号墳の5基の古墳が所在している。

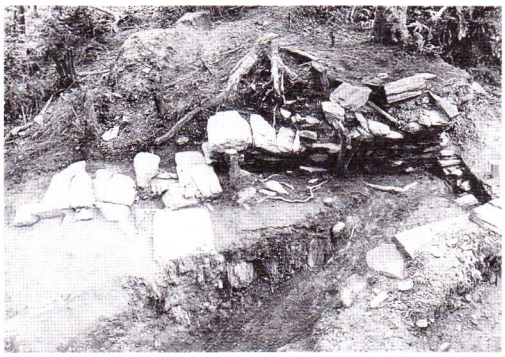
トレンチ調査の進展に伴い尾根筋から離れて築かれた小型古墳が存在することが判明したため、1地点におけるトレンチ数を増やし、遺構・遺物の検出に努めた。その結果、最終的に調査は34地点、トレンチ数は101ヶ所に及んだ。

また、遺跡の確認が調査の目的であったために横穴式石室等が検出された場合にも床面までの調査は最小限にとどめた。土層は地表の腐食土の下層には厚さ数cmから40cmほどの黄褐色や赤褐色系の砂質土がみられた。それらは、遺物を含まない岩盤風化層や斜面堆積土であり、基盤となっているのは緑色片岩の岩盤であった。

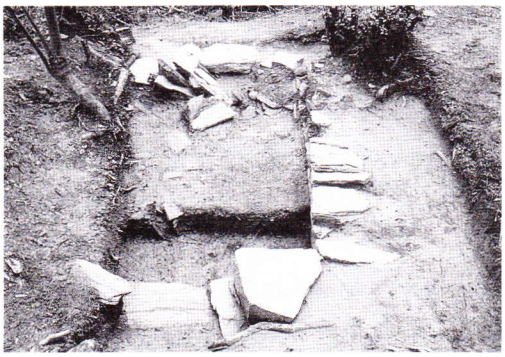
(2)主な遺構

以下に調査により確認された主な遺構について記述する。なお、番号は調査を実施した地点である。

4地点　西丘陵の標高約87mの地点において設定したトレンチで片岩の石列が2m分確認され、石列西側で須恵器高杯破片も出土した。石列南端部には多数の片岩の石材が集中することより、検出された石列・石群は横穴式石室の羨道・閉塞石とみられた。周辺の地形測量図よりみて、本古墳は直径約10mの円墳であり、6世紀後半頃の築造と推定される。羨道の天井石とみられる石材も一部みられ石室



5地点 横穴式石室（寺内49号墳。東より）



6地点　横穴式石室（玄室部。東より）

10地点 横穴式石室（寺内48号墳。南より）

としての遺存状況は良好と考えられる。

5地点　4地点の南約15mの標高約83mの地点で確認された南に開口する横穴式石室である。中央部から東半は後世の水路施設の掘削により破壊されている。玄室西側壁で7段分(高さ45cm)の石積みが確認された。玄室長2.1m、玄室幅1.5m以上、羨道長1.5m以上である。周辺地形よりみて直径12m程度の円墳とみられ、調査時に玄室西側側壁の一部が露出していたことより『地図』による寺内49号墳に該当するとみられた。

6地点　5地点の南西約15mの位置で確認された新発見の古墳である。横穴式石室の玄室奥側が検出され、石積み3段分(高さ26cm)が遺存していた。玄室幅1.64m、玄室長1.1m以上である。石室内埋土より再利用時とみられる平安時代の須恵器・土師器が出土した。

石室の位置と周辺地形から直径9m程度の円墳とみられ、石室形態よりみて7世紀代の築造と推定される。

10地点　鋏池の北約100m、標高約74mの位置で確認された古墳であり、『地図』記載の寺内48号墳である。

玄室と玄室前道基石が確認された。玄室奥壁部で5段、高さ45cm程度の石積みが残されていた。石室構築にあたっては比較的形の整った片岩の石材を小口積み・平積みしている。

玄室長2.42m、玄室幅1.92mであり、今回の調査地の中では規模の大きいグループに属するものである.

遺物は堆積土から須恵器杯蓋や土師器の破片が出土した。墳丘は現状では不明である。古墳築造時期は石室形態と遺物よりみて6世紀後半頃とみられる。

11地点　10地点の南約40m、鋏池から北へ約

11地点　横穴式石室（南より）

14地点　横穴式石室（北西より）

17地点　横穴式石室（寺内56号墳。北より）

70m、標高約66mの斜面に構築された新発見の古墳である。玄室と玄室前道基石が確認された。石室構築にあたっては、不定形な棒状・板状の石材を使用する玄室部の遺存状態は比較的良好で、石積み10段、高さ1.2m程度残っている。玄室長約2.3m、玄室幅約1.9m、玄室前道長約0.7m、羨道幅約1.1m、羨道長1m以上である。出土遺物はみられなかったが、石室形態よりみて6世紀末から7世紀前半頃の築造の可能性がある。周辺地形よりみて古墳規模は直径8m前後の円墳とみられた。

14地点　対象地の最も北部で確認された古墳であり、横穴式石室は尾根線から南へ10m程度斜面を下った標高100m前後の位置で検出された。石室上部はミカン畑開墾により破壊されており、石室内への石材の転落等が著しい。玄室奥壁の残りの良い所で石積み10 段、高さ1.2m分が確認された。玄室床面直上とみられるレベルで直径5～10cmの玉石や須恵器杯・黒色土器が検出された。

玄室長2.52m、玄室幅2m、羨道長1.7m以上、古墳の規模は不明である。古墳の築造時期は6世紀後半頃とみられ再利用も考えられた。

17地点　中央丘陵のピークである標高約108mの地点より南へ40mほど下った標高約95m の地点において直径13m程度の墳丘状の地形がみられ、調査により玄室長約3.04m、玄室幅約1.8m、羨道長2.7m以上の細長い平面プランをもつ横穴式石室が確認された。『地図』記載の寺内56号墳であり、玄室部で石積み10段、高さ1.2m程度遺存していた。

撹乱を利用したサブトレンチにおいて玄室床面直上から7世紀前半頃の須恵器高杯が出土し、古墳築造時期もその頃とみられた。

20地点　中央丘陵の標高約84mの地点で確認

30地点　横穴式石室（寺内57号墳。羨道部）

された横穴式石室であり、玄室の東側壁の基底石と石室内埋土が遺存していた。堆積土の状況により本来の石室は小型で、玄室幅1.1m程度のものと推定された。

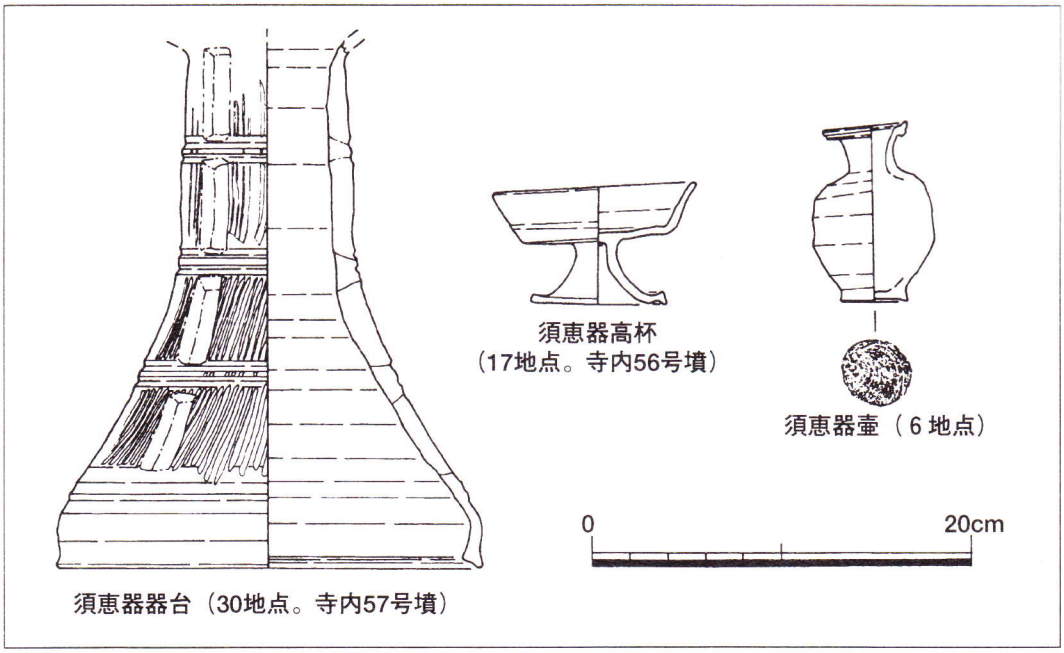
21地点　20地点から南へ約20m、標高約80mの位置で検出された小型横穴式石室である。石室の西側のトレンチで一部岩盤をカットした周溝とみられる溝が掘削されていた。

玄室長約2.1m、玄室幅0.95mで玄室前道基石も確認されるが、羨道はすでに失われている。玄室奥壁で石積み4段、高さ50cm程度が遺存しており、床面は玉石敷とみられる。古墳規模は、直径8m前後で、7世紀代の築造の可能性がある。

30地点　『地図』による寺内57号墳の所在地である。墳丘測量図によると直径35～40mの円墳であり、墳丘中央部には長さ約8m、幅約3m、深さ約3mの撹乱坑がみられた。この撹乱坑の底部付近の調査により、玄室天井石が西に傾いた状態で3石検出され、玄室東側壁の上部も確認された。欠除していた最も南側(羨道側)の玄室天井部分から玄室前道部付近の調査を進めたところ、既に盗掘・撹乱等により玄室西側壁と開口部の閉塞石外側が破壊されていたものの玄室前道部と途中に幅狭の箇所をもつ羨道部の石積みが天井石まで含めて築造時の姿で保存されていることが判明した。

玄室部は未調査であるが、玄室前道基石の位置と最も北側の天井石の下に残存していた奥壁の角度等から玄室長は5m以上にも及ぶとみられ、玄室幅も3.28m前後と推定された。羨道の側壁はほぼ垂直に積まれ、幅1.5m前後である。開口部までの羨道部長は7.52mを測る。床面まで調査したのは、玄室前道部付近のわずかな部分のみであったが、玄室床面直上部から須恵器器台の破片が出土した。

古墳の築造時期は石室形態と出土した須恵器から6世紀第3四半紀前後と推定される。



出土遺物（カッコ内は出土地点）

その他　28・31地点では須恵器・土師器を多数包含する周溝状遺構が検出され、19・29・31地点では扁平な片岩の石材が多数散乱しているのが確認された。これらは古墳や石室に関係するものと推定された。また、25地点では半円形(直径約2m)をなす石列遺構が検出され、時期的に新しい墳墓となる可能性もみられた。

まとめ

以上のように、調査対象地内には『地図』記載以外にも多数の横穴式石室を内部主体とする古墳が築造されていたことが判明した。確認調査により明らかになった点、注意される点を次に列挙してまとめとしたい。①円墳ながら岩橋千塚古墳群中で最大級の横穴式石室を内部主体とすることが判明した寺内57号墳の存在は寺内古墳群の評価にもかかわる重要な発見であった。②岩橋千塚古墳群の中枢部に較べて密度は低いものの、従来認識されていた古墳の総数の少なくとも2～3倍の古墳が本来築造されていたことも判明した。③古墳は尾根線上を立地の基準とするが、明らかに尾根筋を選択しない古墳も多く確認された。④古墳は横穴式石室を内部主体とするものであり、比較的縦長で小型のプランをもつものが多く築造されていた。⑤時期的には寺内57号墳が6世紀第3四半紀頃と推定される以外は6世紀後半～7世紀前半の築造とみられる。⑥古墳築造期以降の平安時代にも古墳に対して働きかけがなされていることが確認された。

(前田敬彦)

(注1)『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』(和歌山県教育委員会、平成元年)に加筆して作成。

12. 垂水遺跡 確認調査

調査地　和歌山市加太沖ノ島

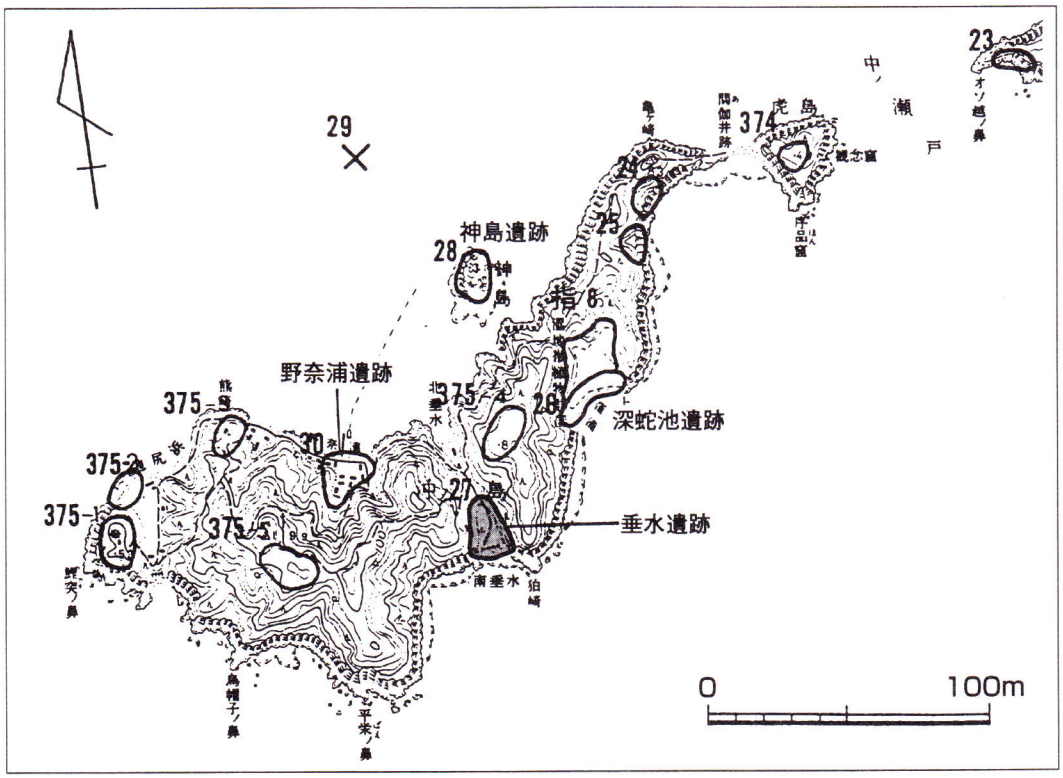
調査面積　4m²

位置と環境

和歌山市西部の加太地域周辺の海岸部や島部の狭長な平野部では古墳時代から奈良・平安時代にかけて塩づくりが盛んに行われており製塩遺跡が多く分布している。その他、島部の遺跡からは、縄文土器、弥生土器、石鏃、滑石製模造品等の出土もみられる。垂水遺跡は友ケ島のうち沖ノ島のほぼ中央部、島の南側の海岸線沿いに位置している。本遺跡については、『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』(和歌山県教育委員会、平成元年)によると縄文土器や土錘の出土が知られている。

調査内容

遺跡の推定範囲は、南方に開く二等辺三角形の小さな平地の全域にわたっているが、平地全体は近代以降に土地改変が著しく行われており本来の自然地形は不明確になっていた。調査グリッド(一辺2m)は、その平地の南西隅の一角、海岸線から約50m、平地と浜との境界にみられる土塁状の高まりから約10m北側に設定した。



調査対象地の位置(注1)

グリッド内の堆積は、最上層は厚さ4～8cmの濁灰色砂層(1層)、その下層は厚さ15～20cmの茶褐色土層(2層)、さらに下層は直径10～60cm程の和泉砂岩の円礫を多数包含する暗褐色土層(3層)であった。遺物は、2層より土師質土器が約50片、須恵器が3片ほど出土し、3層上層より土師質土器が6片程度出土した。3層からは、直径5～10cmの軽石も約10点出土した。

遺構としては、3層中で直径約30cm、深さ10cmのピットが1ヶ所と調査区南端で深さ20～40cmほどの落ち込みが確認された。

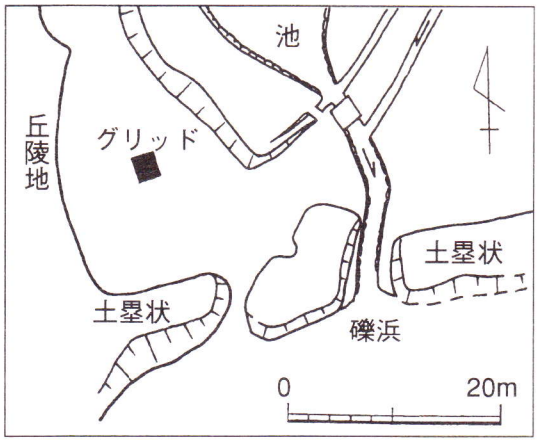
まとめ

調査により出土した土師質土器・須恵器の大半は平安時代の所産とみられるが、須恵器の1点は古墳時代のものとみられた。器形の判明する甕は、口縁の直径が約20cmで胴部内外はユビオサエやユビナデにより調整されており、一般的な甕とはやや異なっていた。狭い範囲から出土した軽石も遺物ではあるが、古代における使用方法は不明である。

明確な遺構は確認されなかったが、本遺跡の継続時期が古墳時代から平安時代に至る時期であることが判明し、近接地に遺構が検出される可能性も考えられた。

(前田敬彦)

(注1)『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』(和歌山県教育委員会、平成元年)に加筆して作成。



調査地の位置

調査地（東より）

甕（2層出土）

13. 茶臼山古墳 確認調査

調査地　和歌山市木ノ本762番地、他

調査面積　70㎡

位置と環境

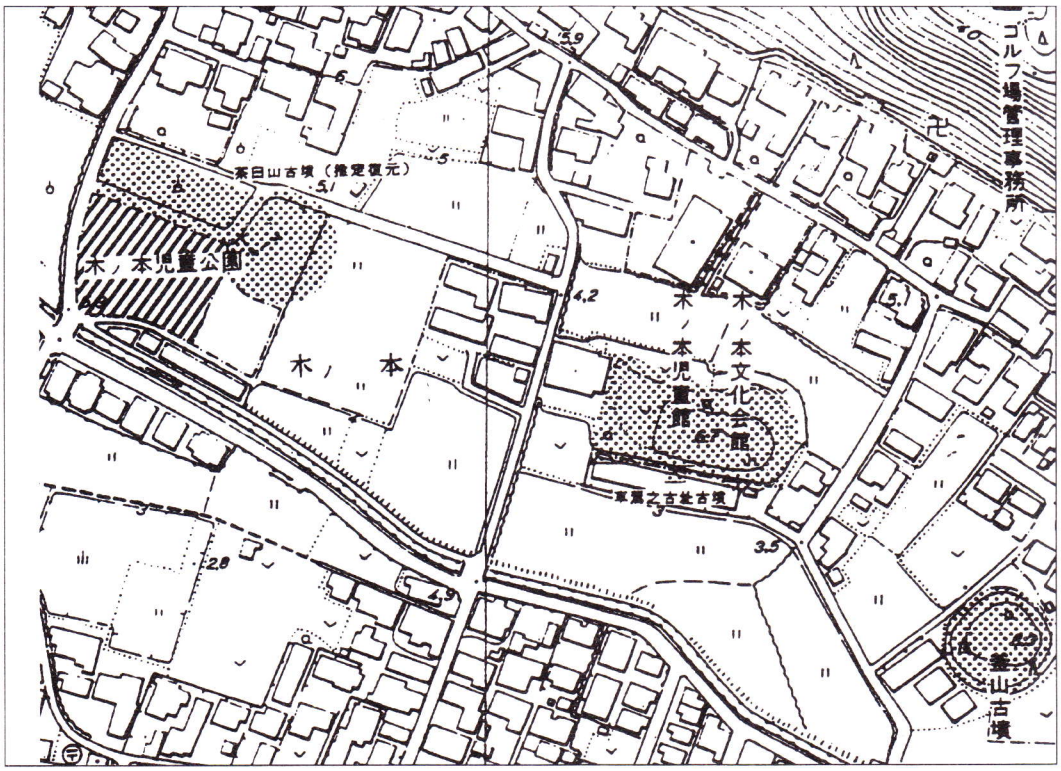
木ノ本Ⅲ遺跡は和歌山平野を東西に流れる紀ノ川の河口北岸の沖積平野に立地する東西約１km、南北約400kmにわたる遺物散布地である。また本遺跡内には和歌山県には数少ない平野部に造られた古墳が３基存在し、木ノ本古墳群を形成している。

本遺跡の周辺は和泉山脈にそって遺跡が数珠状に連続して存在し、和歌山平野の歴史を知るうえで重要な地域の１つである。

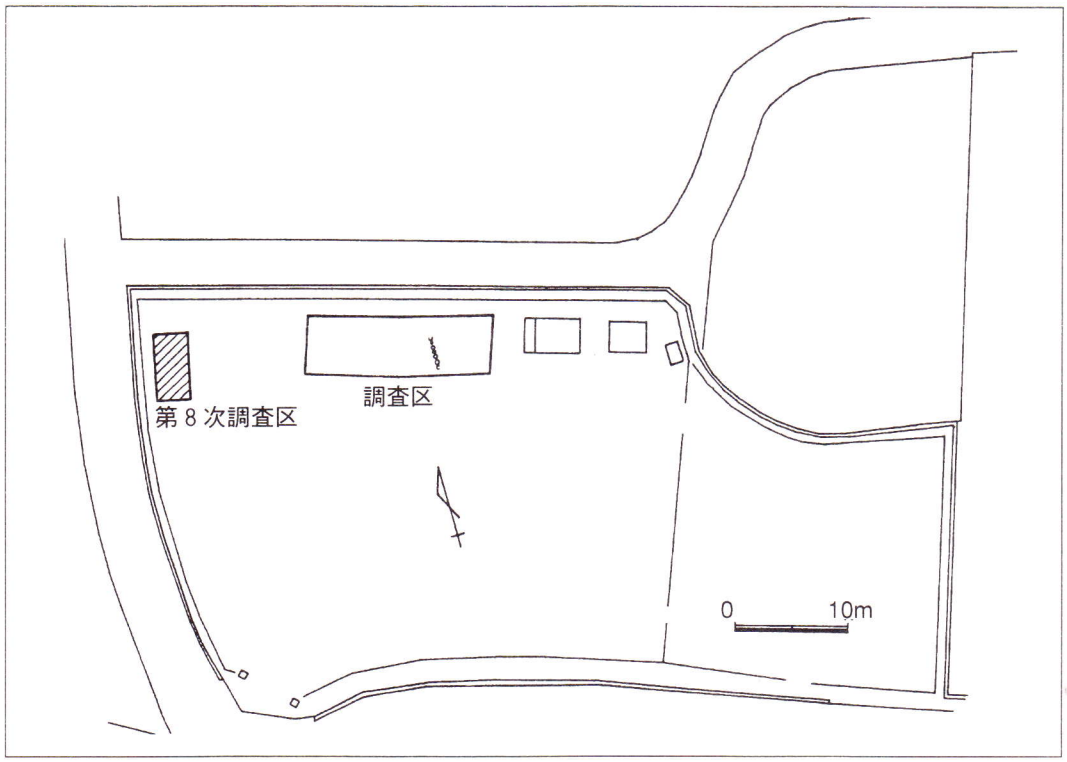
今回木ノ本Ⅲ遺跡内にある木ノ本古墳群の１つである茶臼山古墳の南に隣接する木ノ本児童公園内において、水洗浄化槽の設置が計画されたことから予定地内の遺跡の実態を明かにするための発掘調査を行うこととなった。

調査内容

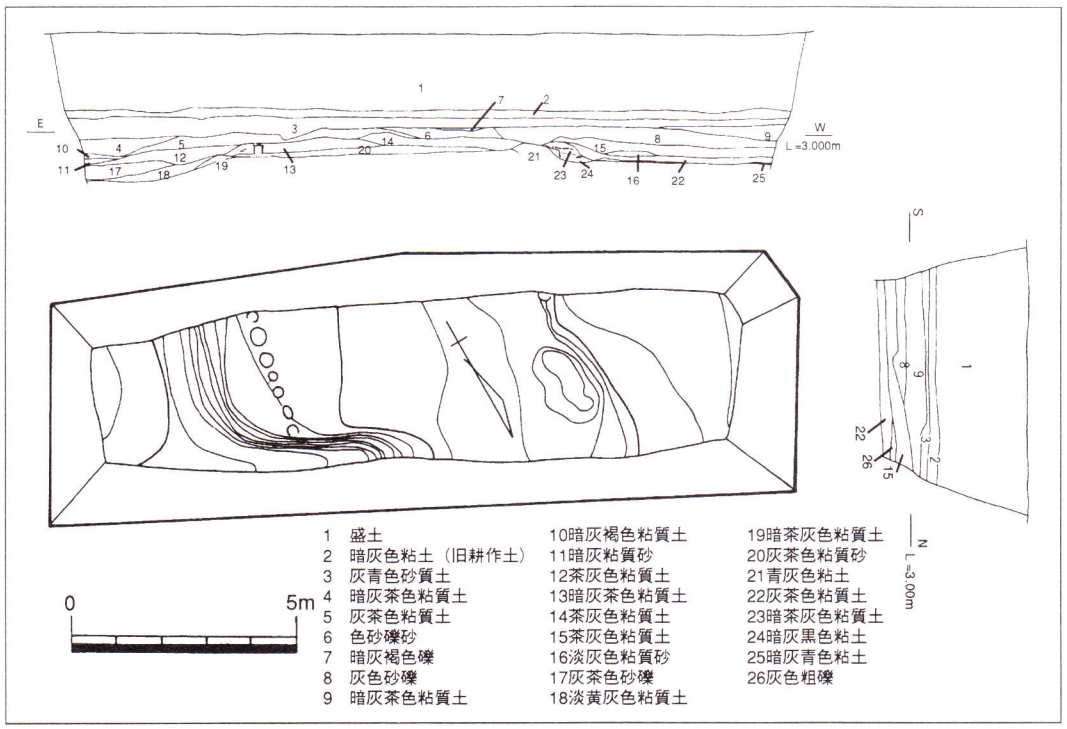
当公園については平成３（1991）年に北西隅への防火水槽の設置に先だつ発掘調査をしており、現地表面から約1.5mの深さで南北方向に流れる中世の溝の一部が検出されている。



木ノ本古墳群



調査位置図



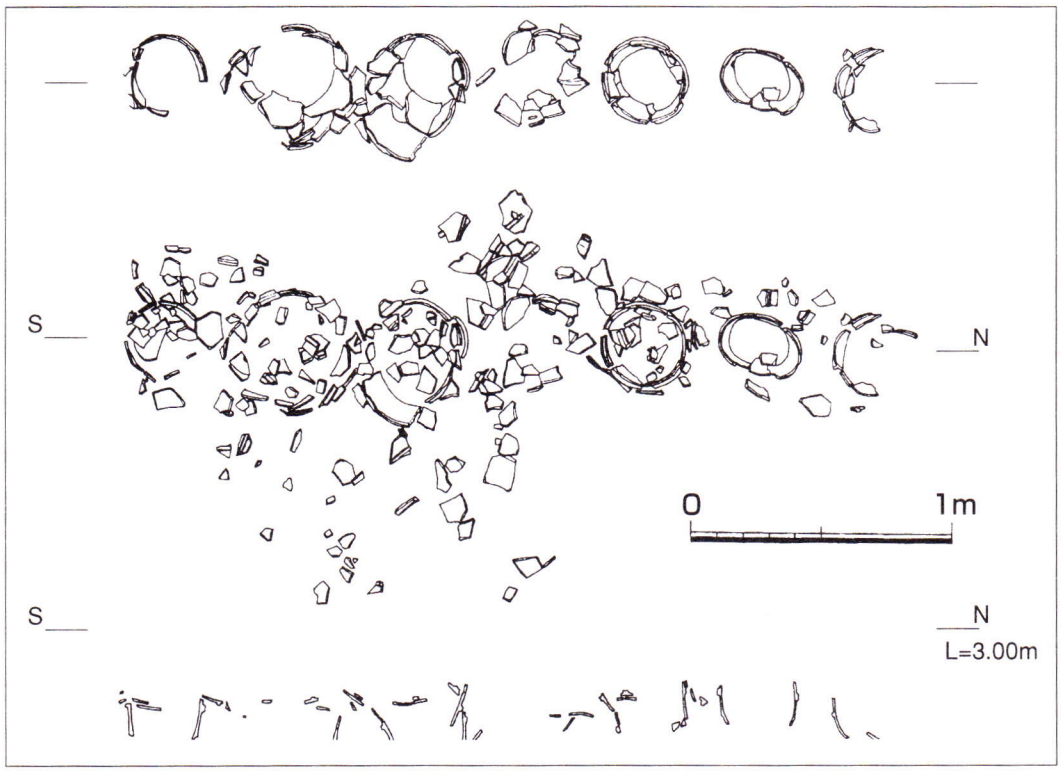
遺構全体実測図

今回調査を行ったのは公園の北端ほぼ中央部にあたり、浄化槽設置予定地の35m²について調査を行ったところ、調査区のほぼ中央部分から南北に一列に並んだ円筒埴輪が7個体検出された。そのため浄化槽の設置場所の変更が検討され、新たに調査区の西側に同規模の調査区（35m²）を設けて調査を続行した。便宜上先の調査区を1区、後の調査区を2区とした。

調査方法は、まず重機による盛土及び旧耕作土の除去から始め、現地表から約2mのところから土器片を含む堆積土が確認されたので、そこから人力での掘り下げを行った。

層位は約2mの盛土の下に旧耕作土、やや厚い灰青色粘質砂、中世の遺物を含む暗灰茶色粘質土、灰色砂利、茶灰色砂質土、暗茶灰色粘質土、暗灰青色強粘土となっている。

1区で検出された埴輪列は南北方向に一列に並び、南側の調査区外に続いている。北側は後世の溝状掘り込みによって寸断され不明である。7個体すべての上部がすでに削平を受けて下部のみが残った状態で立っており、そのいずれもが土の圧迫によって割れていた。埴輪の大きさは直径20～30cm、残高約6～10cmを測る。硬く焼かれた土師質のものと須恵質のものが混在しているが、すべて底部が淡輪技法とよばれる特徴をもち、いずれも5世紀後半のものと考えられる。これは木ノ本古墳群の釜山古墳や車駕之古址古墳と同じ出土状況である。埴輪包含層の下にはベースと考えられる暗茶灰色粘質土が西から東に向って



1区 埴輪列実測図

下がっており、埴輪列はその傾斜変換点に並んだ状態になっていてその周辺に埴輪片が散在している。個々の内容は以下のとおりである。

埴輪１　須恵質、底部淡輪技法、北半分は中世代の削平のため消失

埴輪２　須恵質、底部淡輪技法、焼成段階ですでにひずんで楕円形となっている。

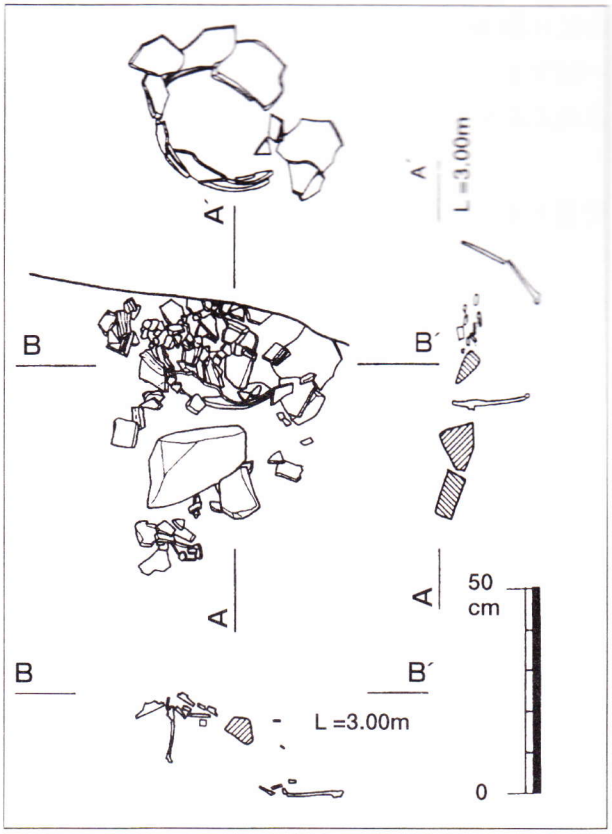
埴輪３　土師（硬質）、底部淡の輪技法、

埴輪４　底部残存が最も悪い

埴輪５　須恵質、底部淡の輪技法、

埴輪６　土師質、底部淡の輪技法、

埴輪７　須恵質、底部淡の輪技法、



2区 埴輪実測図

２区では１区の埴輪列から西５ｍの南壁にかかって土師質の埴輪の基底部が１基検出された。直径20cm、残高15cmを測り、上部については後世の削平を受けてすでになくなっていた。丁度南北に延びる緩やかな傾斜変換点の粘土層の上にやや西に傾いた状態で立っていたが、あとに続く埴輪の痕跡は確認できなかった。

まとめ

木ノ本古墳群のひとつ茶臼山古墳は、その名のとおり東に前方部をもつ前方後円墳であると考えられているが、現在ではその痕跡をほとんど残さないほど削平を受け、わずかに後円部の曲線が側溝のラインにうかがわれる程度である。今回限られた範囲内での調査ではあったが、茶臼山古墳のすぐそばから埴輪列の基底部が並立して出土したということは、茶臼山古墳の存在を物理的に証明できうる重要な成果である。

今回出土した埴輪は幅6.5mの南北に延びる堤状の両端に一列に据えていた状況を呈している。この堤状の盛り上りがどのように延びているかは想像の域を出ないが、古墳を取りまく外堤の可能性も考えられる。今まで地形だけでしかわからなかった茶臼山古墳の実態の一部が確認できたことで、木ノ本古墳群の実態究明が一歩前進したことになり、今後の周辺地域の調査を含めた資料の増加によって茶臼山古墳全体の姿が解明されることを期待したい。

（益田雅司）

14. 車駕之古址古墳 第5次調査

調査地　和歌山市木ノ本地内

調査面積　200㎡

位置と環境

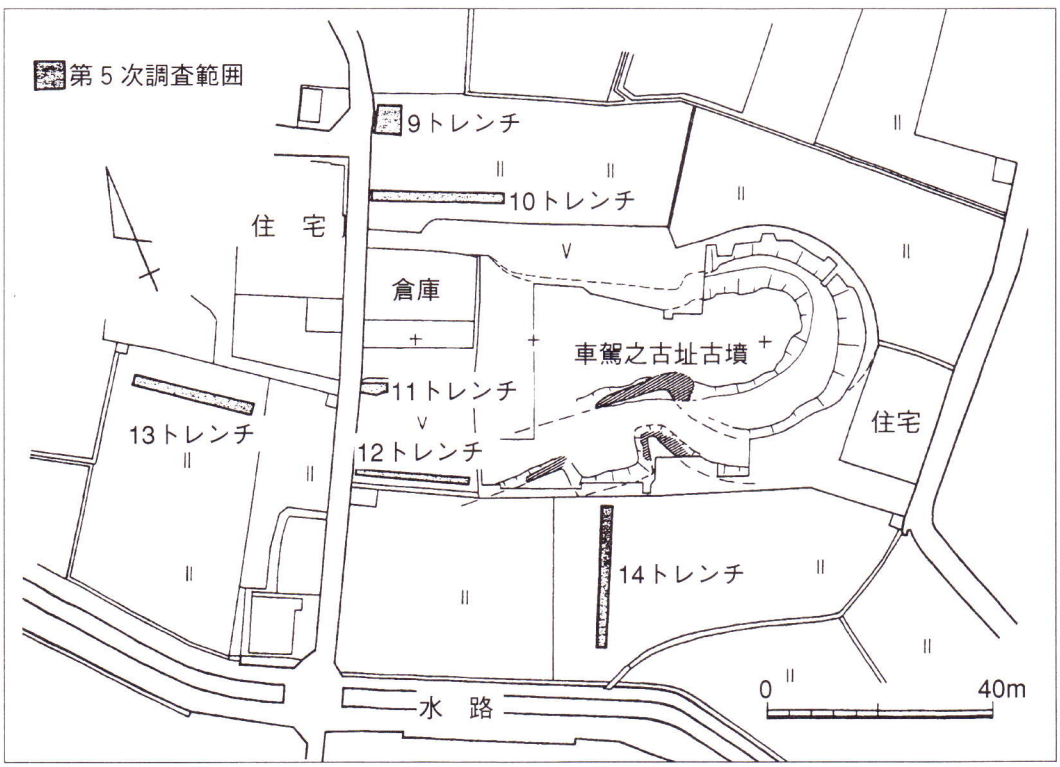
第4次調査参照。

調査内容

今回の調査は、第4次調査と同じく国庫補助事業として本古墳の範囲を確認するために行った調査であり、特に前回の調査で明確にできなかった前方部の端部と周濠の範囲を確認するために実施したものである。この状況から、トレンチは古墳の前方部である西側を中心に6ヶ所に設定し、調査を行った。

この結果、9・10・12・14のトレンチにおいて古墳の墳丘および外堤に伴う葺石を検出し、前方部の広がりをほぼ明確にすることができ、過去の調査成果をもとに本古墳の復原図を作成できたことが最大の成果であったといえる。また本書の内容等は、すべて車駕之古址古墳範囲確認調査概報(平成5年度刊行)より抜粋したものである。

今回の調査における各トレンチの状況は、まず前方部外堤の北西コーナーを確認するために設定した9トレンチにおいて、周濠の内部に丁寧に積み上げられた葺石が見られ



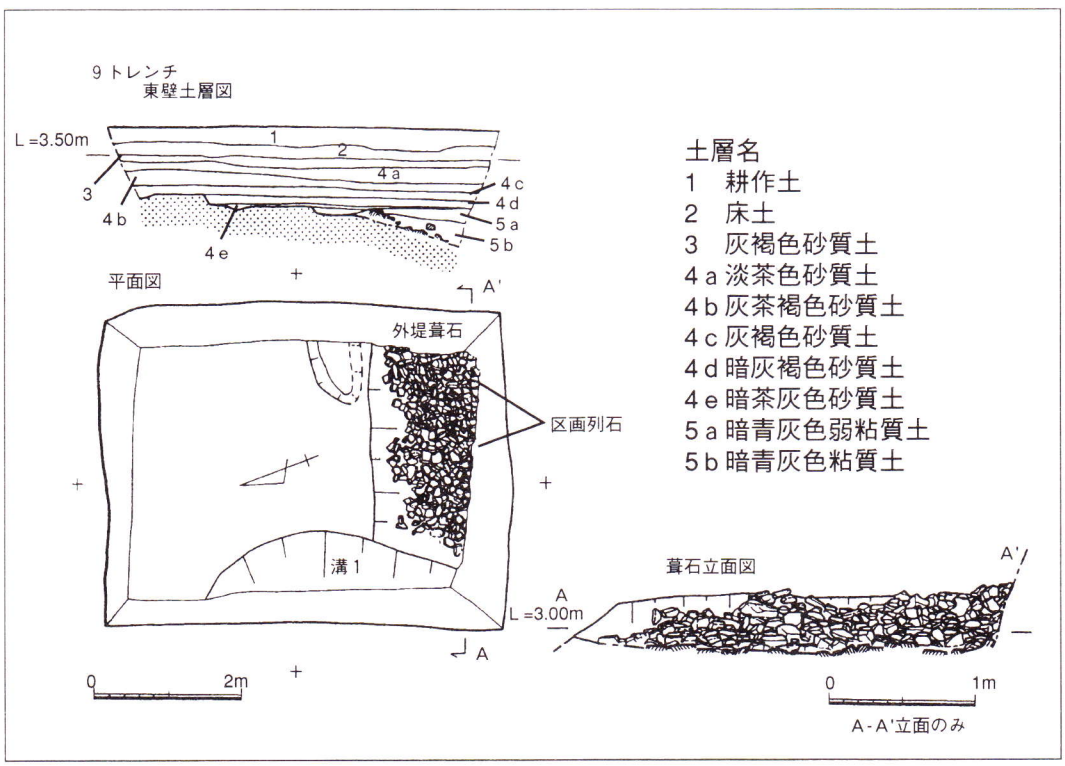
調査位置図

た。この葺石は周濠底側から約20度の角度を持ち外堤上に延び、約10cm大の和泉砂岩の河原石を多く用いている。また、このトレンチにおける葺石の構築方法は、まず20～30cm大の石を用い幅1.4mほどの区画列石を造り上げ、その中に10cm大の石を組み入れる工法が確認できた。

古墳周濠内の堆積は大きく2層に分けられ、上層とは全く異なった黒灰色を主体とする粘土層であり、上層の5a層の方がより多くの埴輪片を包含している。また、これらの覆土にも瓦器、土師皿などが認められることから、周濠は中世まで存在し、なおかつその埋没は中世の間と考えられる。

次に、前方部の北西隅を確認するために設定した10トレンチでは、西側に明瞭な落ちが見つかり、周濠であることが確認できた。周濠の深さはトレンチ内の墳丘検出面から50cm下がり、標高1.9mを測る。また、トレンチ東側では前方部北側にあたる地点において、前方部墳丘側から15度前後の比較的緩やかな傾斜を持つ葺石群が確認できた。葺石の最深部は標高約2.0mであり、周濠内の堆積は同じく2層に大別でき、葺石上には埴輪片が散乱した状況で見つかっている。葺石は大きいもので30cm大のものがあり、大半は10cm前後の和泉砂岩の河原石を用いている。

また、前方部の南側の外堤を確認するために設定した14トレンチからは、周濠の南端に立ち上がる葺石を検出し、この状況から第2次調査の造り出し部分の調査成果をもと

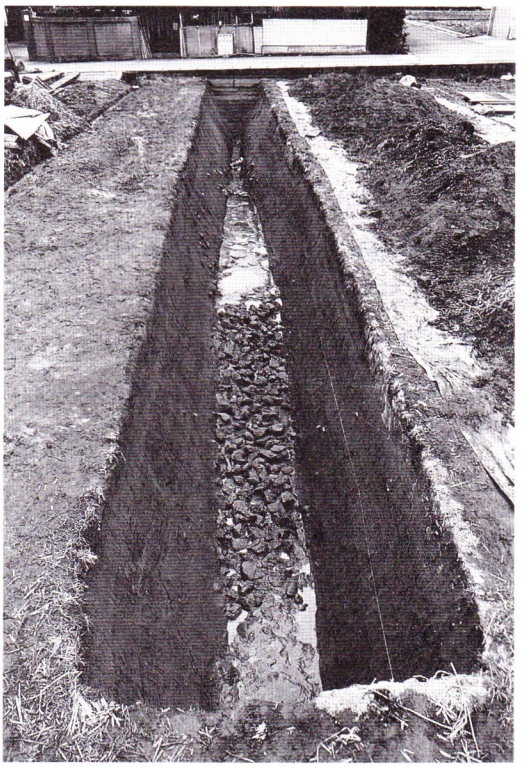


9トレンチ遺構実測図

にこの地点における周濠幅を推定すると10～11mであることが考察できる。また、周濠底面の標高は2.0m、葺石裾部の標高は2.1mであり、周濠底面からの葺石の積み上げる角度は15度以内と比較的緩やかである。

このほか、前方部の西側における周濠の幅を確認するために設定した12トレンチでは、中世に古墳の葺石を用い石垣状に積みかえた痕跡が窺え、また西側外堤は現在の道路下に存在したことが確認でき、周濠の幅は基底部で9mを有する状況が得られた。

また11トレンチは、前方部の西側を確認するためのトレンチであったが、すべて周濠内部であり、外堤のさらに外部の様子を確認するために設定した13トレンチでは、平安時代の遺構等が検出できたが、明確な古墳時代のものは、溝状の落ちから出土した埴輪片と古墳の葺石状の転石だけであった。



10トレンチ（東から。前方部北側葺石）

このように、今回の調査では古墳の前方部を中心に周濠から墳丘への立ち上がりおよび外堤への立ち上がりが葺石を伴い明確に検出することができ、良好な資料が得られたといえる。

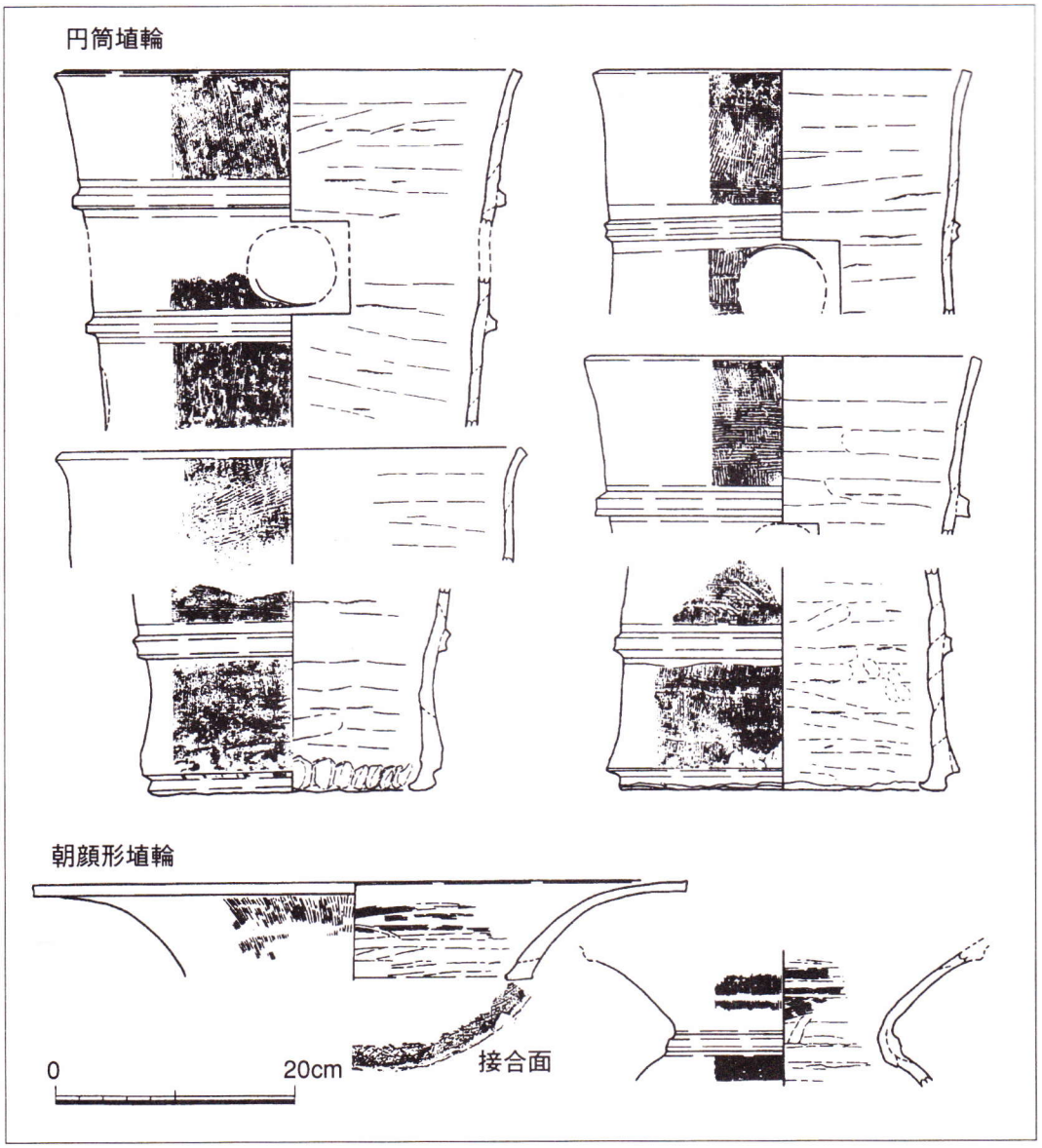
次に、出土遺物については第4次調査とほとんど差異はみられず、古墳時代の遺物は本来古墳に伴ったとみられる埴輪片が大半で、古墳時代以外の遺物として黒色土器、瓦器、輸入陶磁器などがある。

まず今回出土した埴輪は、ほとんどが円筒埴輪である。埴輪には第2次調査の成果と同様の須恵質、半須恵質、土師質のものがあり、前回の割合(須恵質:半須恵質:土師質=6:1:6) と比較すると墳丘裾部の10トレンチ(5a～6層)の資料、埴輪片407片の面積比率では 2:1:4であり、また外堤部の9トレンチ(5a～5b層)の資料、319片では8:1:8の割合で出土し、トレンチ全体からみても前方部に関しては土師質の割合が多いことが窺える。

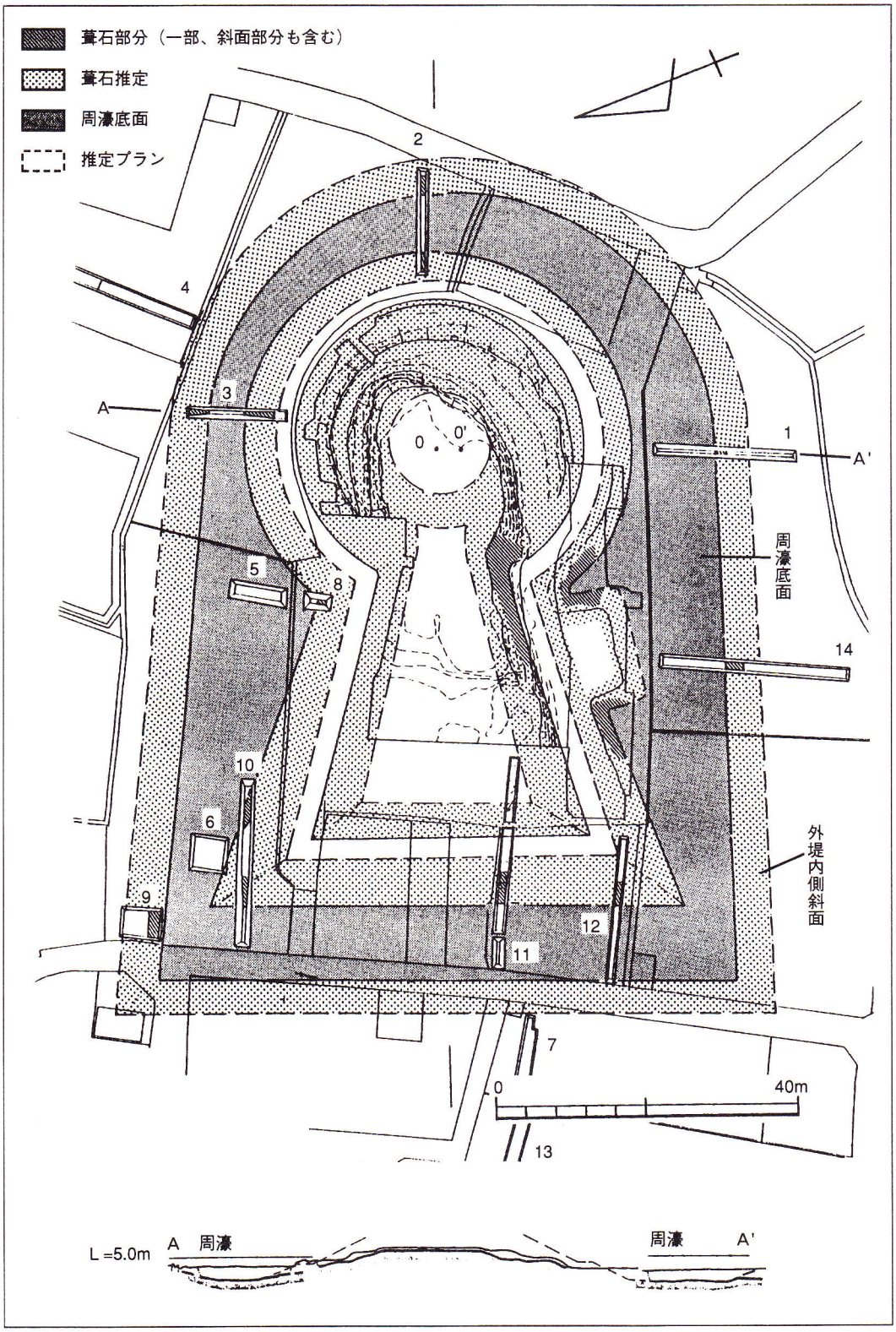
また、埴輪の胎土はほとんどが酷似しており、土師質のものでは石英、長石、クサリ礫を多く含み、須恵質ではクサリ礫のかわりに黒色粒を多く含むものが大半である。円筒埴輪における外面の調整は、一次調整においてタテハケを用いるものがほとんどであり、のちに須恵器技法であるタタキやヨコハケ、ヨコナデを二次調整に用いているものが多い。ヨコハケはいわゆるC種ヨコハケが一般的であるがB種ヨコハケ がわずかに存在する。また、内面はほとんどヨコナデによって仕上げられている。

円筒埴輪の底部は、大半はいわゆる「淡輪技法」と呼ばれているものである。淡輪技法の底部は、底部外面に大きく段を成し、内側に折れ曲がるもので、本来つるなどの繊維質で輪を作り、その上に粘土を張り付けてさらに粘土を積み上げたとされるもので、内側には強い指頭圧痕が残るものがみられる。外面の段内部の調整は未調整のもの、ヨコナデを用いるもの 、タテハケ→ヨコナデを用いるものなどがある。また底部の底面は繊維の圧痕が顕著にみられる。

朝顔形埴輪は、焼成が円筒埴輪と同様に須恵質や半須恵質、土師質のものがみられるが、器形の全体を復原できるものは出土していない。大きく開く口縁部は、復元口径55



遺物実測図



墳丘・周濠復原図（800分の１）

～ 60cmを測り、これまで出土しているものとほぼ同じである。本古墳のこれまでの調査において発見された形象埴輪には、蓋・盾・家・囲みなどがあるが今回の調査において見つかった明確なものは蓋形埴輪であった。

まとめ

今回の2カ年度にわたる範囲確認調査(第4次・第5次)により、本古墳の墳形や周濠形態について新たな知見を得ることができ、周濠を含めた古墳の復原図作成が可能となった。

まず古墳の墳形と規模であるが、本古墳は、前方部を西に向けた前方後円墳で、主軸はN-70°-Wである。つまり、前方部は真西より北へ20° 振っている。復原された古墳の規模は、全長約86m、後円部の直径約51m、くびれ部幅約33m、前方部幅約62m、前方部長約41m、後円部の高さ4.0m以上である。段築については、第2次調査で二段以上と判明していたが、くびれ部の幅よりみて二段築成とするのが妥当と考えられる。また、造り出しは第4次調査の5・8トレンチより、南側にのみついていたのが判明した。

外堤を含めた規模では、外堤周濠側の基底部間で全長約103mを測り、外堤葺石部を含めると推定約112mとなる。外堤上部の削平を勘案するなら本来、全長120mにも及んだ可能性が高いとみられる。

範囲確認調査により古墳本体と外堤との位置関係が主軸を中心に左右対称にならない、つまり周濠幅が地点により異なる事実が明らかとなった。後円部の周囲では、3トレンチで周濠の底面幅は約5m、2トレンチで約7m、1トレンチで約12mとなり、古墳南側ほど周濠幅が広くなる傾向がみられた。そのため、後円部の中心が右図の点O付近に求められるのにたいして、外堤の基底部の弧の中心は点O´となり、点Oから南へ3mほどずれて求められた。くびれ部も同様に、南側では底面幅推定約20mであるのに対して北側では推定約16mと南側が広くなっている。前方部の周濠については、12トレンチの成果により底面幅約9mと推定できる。造り出しが墳丘南側にのみ存在することと考えあわせて、古墳南側に対する意識を強く感じる古墳設計となっている。

次に、古墳の築造年代を考察するとその平面プランから大阪府岬町の西陵古墳(全長約200m、5世紀第2四半世紀頃)や大阪府藤井寺市の市野山古墳 (允恭天皇陵古墳、全長約 220m、5世紀第3四半世紀)に類似していることがわかる。また、円筒埴輪では、川西宏幸氏のⅣ期に平行し、5世紀中頃から後半期の年代が考えられ、全体として、西陵古墳の埴輪に近いものである。このことから、車駕之古址古墳は円筒埴輪よりみて西陵古墳や本古墳の西約150mに位置する茶臼山古墳より後出し、5世紀第3四半世紀を前後する頃の築造とみられる。国内唯一の金製勾玉を出土し、盾形周濠・段築・造り出しを備えた本格的な中期古墳である本古墳は、古墳の範囲という点では県下で傑出した存在となり、その重要性は今回の調査によりさらに高まったといえる。

(井馬好英)

15. 川原崎遺跡 発掘調査

調査地　和歌山市栄谷937－4番地他

調査面積　270m²

位置と環境

調査地である川原崎遺跡は紀ノ川北岸、栄谷の丘陵地に位置しており、その西には高芝古墳群が、南の尾根筋には河原崎古墳群が存在する。また本遺跡は和歌山県教育委員会発行『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』に遺跡番号56(60m×30mの方形状土壇)と記されている。

調査内容

(1)現在の地形　等高線を入れたところ、丘陵地であることが確認された（図参照)。頂上から南東の方向に尾根が延び、その尾根筋より南側は北側よりも傾斜が強くなっている。頂上部は撹乱坑が２箇所掘られているが、平坦な面をもっているようである。

(2)基本土層　基本土層の堆積は以下の通りであった。

第1層　腐葉土。5～15cmの厚さをもつ。

第2層　灰黄色砂質土(2.5Y 7/3浅黄粗砂混シルト)。頂上部付近に堆積。厚いところで25cmであった。遺物と少量の炭を含む。

調査地全景（東から）

第3層　褐灰黄色砂質土(2.5Y 6/3にぶい黄粗砂混シルト)。北側の斜面に堆積。第2層の2次堆積と思われる。遺物と少量の炭を含む。

第4層　黄褐色砂質土(10YR 5/3にぶい黄褐粗砂混シルト)。無遺物層で直径2cm以上の砂岩が混じり、下に行く程その割合は高くなる。岩盤の風化層と考えられる。深いところでは30～40cmの厚さがある。

岩盤　砂岩であり。風化が著しく軟弱である。

(3)検出遺構　遺構検出面は第1層をはずした状態である第2層上面と第2・3層をはずした第4層上面の2面確認された。それぞれを第1遺構面、第2遺構面とする。

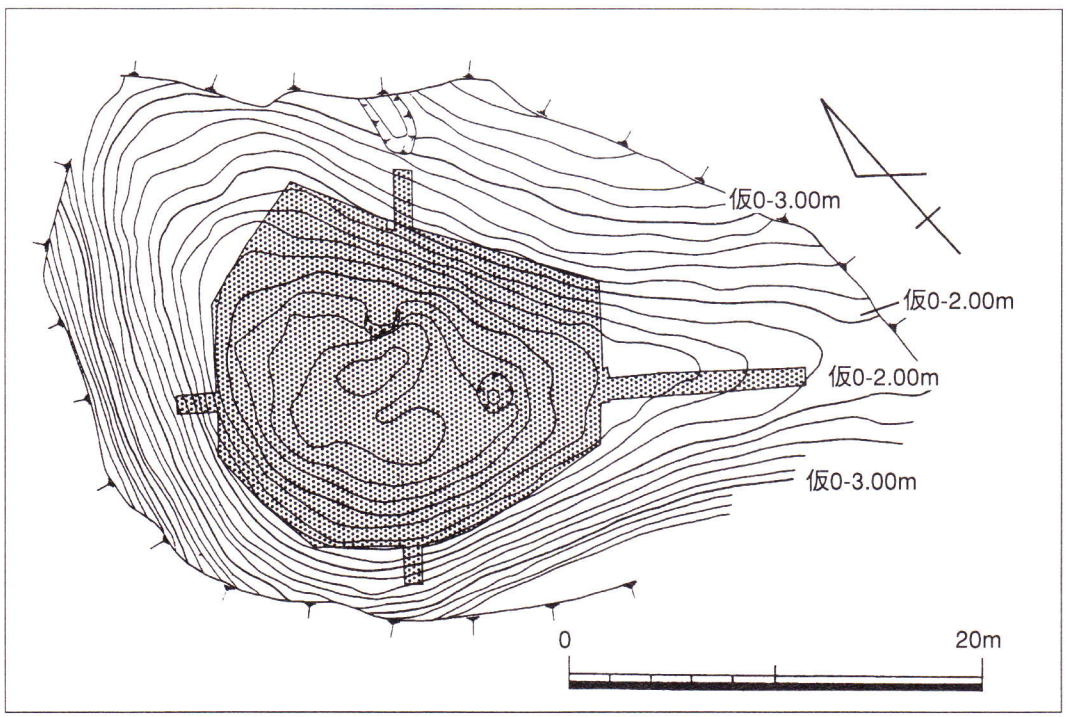
第1遺構面検出遺構

溝1　埋土は暗黄褐色砂質土(10YR 4/2灰黄褐粗砂混シルト)。北斜面に位置し、長さ約7mで、深さは斜面に対し一定で約10cmを測る。遺物を含む。

溝2　埋土は暗灰褐色砂質土(10YR 5/3にぶい黄褐粗砂混シルト)。溝1と向い合い、長さ約2m、深さ約5cmを測る。遺物を含む。

第2遺構面検出遺構

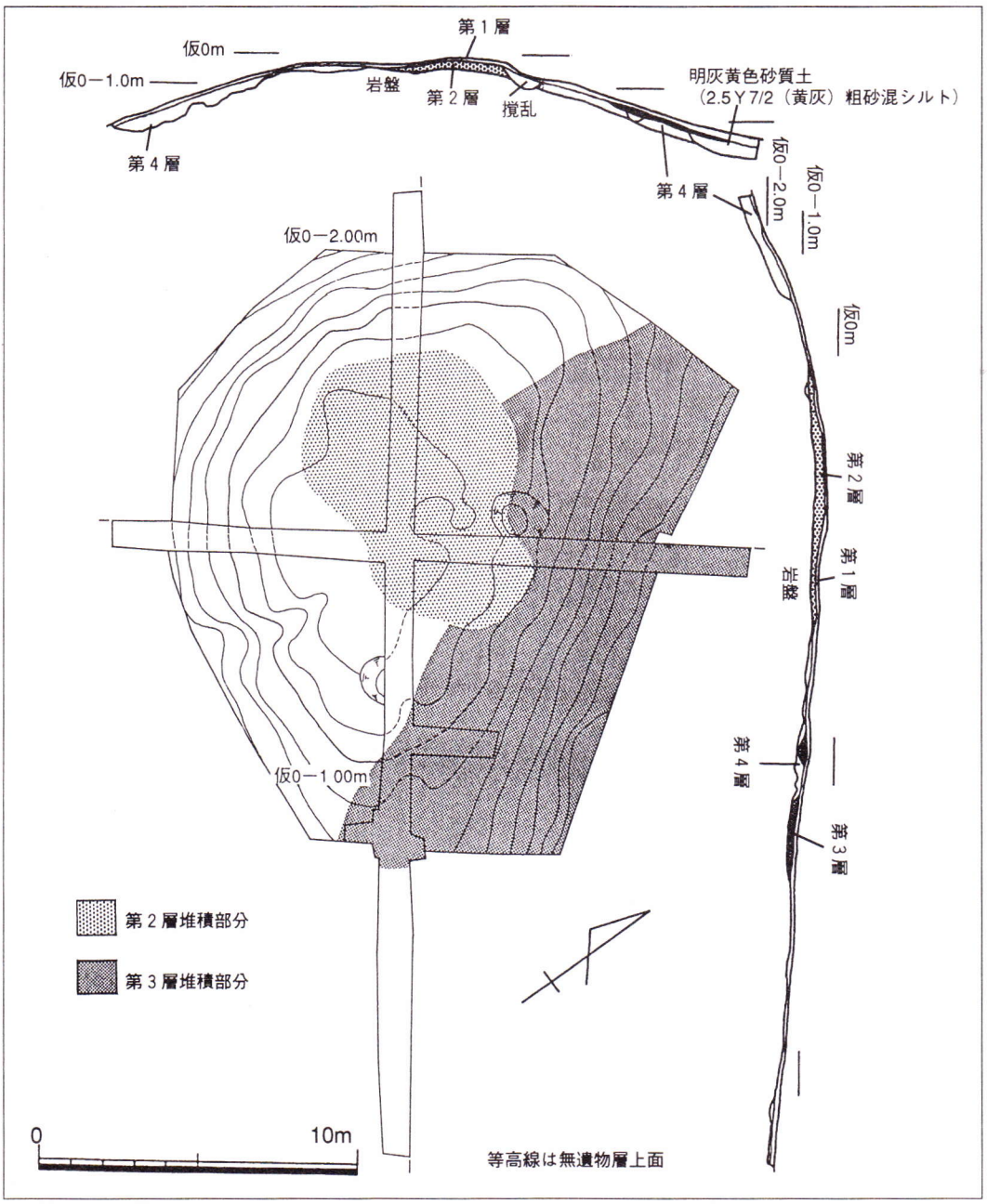
土坑1　頂上部に位置し、1辺80cm、深さ25cmを測る隅丸正方形の土坑である。内壁の岩盤は赤く焼けており、この中で火を炊いていたことをうかがわせる。埋土は4層に分層でき、いずれも炭を少量含む。



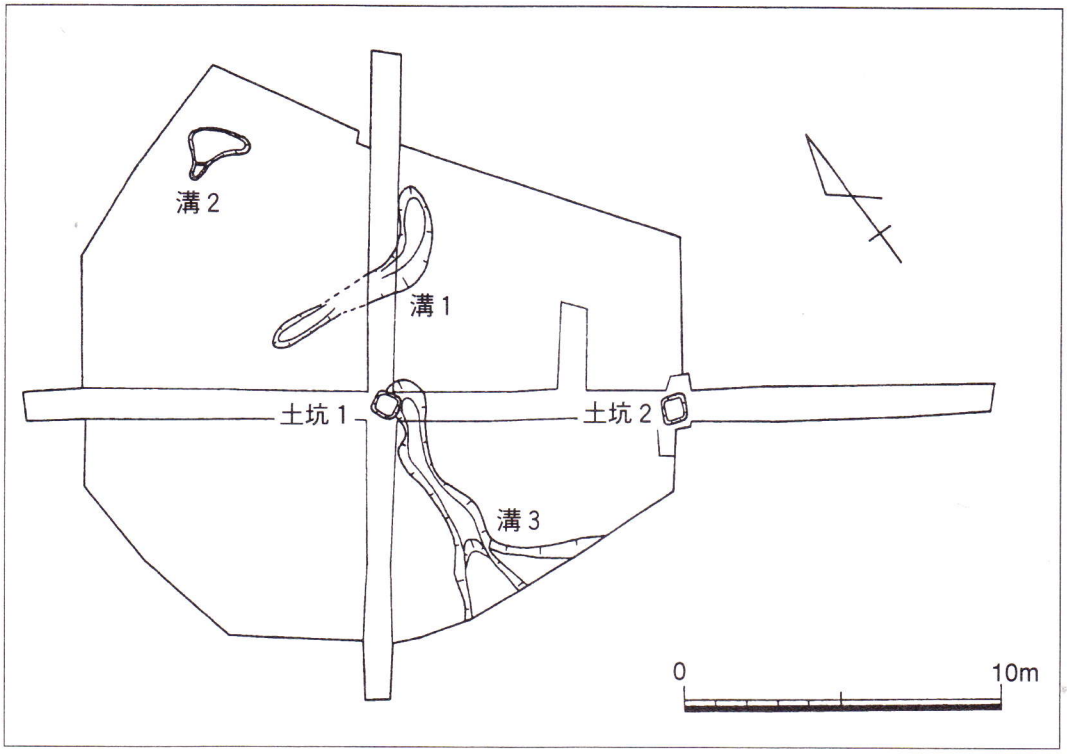
調査地の現状地形と調査区（トーン部分）

土坑2　土坑１から約9m離れた尾根筋上に検出。岩盤上面から掘り込まれており、土坑１と同じく隅丸正方形で1辺80cm、深さ20cmを測る。内壁は赤く変色しており、埋土には炭が大量に混じる。

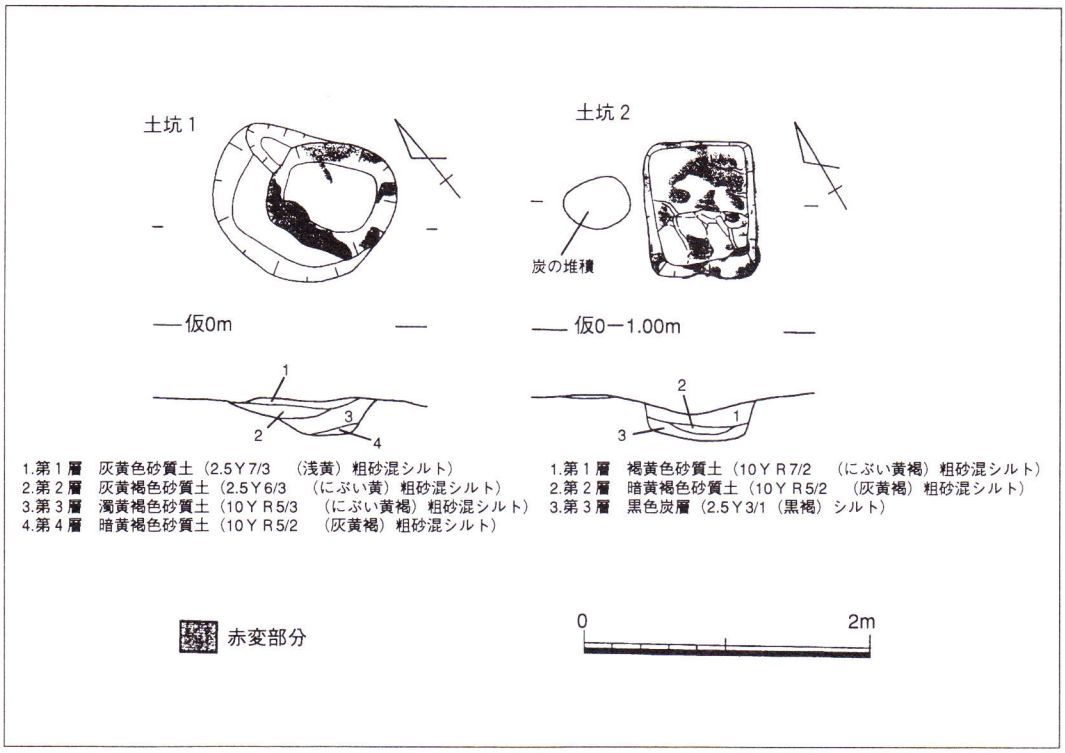
溝3　頂上部から南斜面に延びる溝で、土坑１に切られている。深さ10cmから20cm、幅約1mを測る。埋土は上から第1層・濁褐黄色砂質土(2.5Y 6/4にぶい黄褐粗砂混シルト)、第2層・淡灰黄色砂質土に分層される。



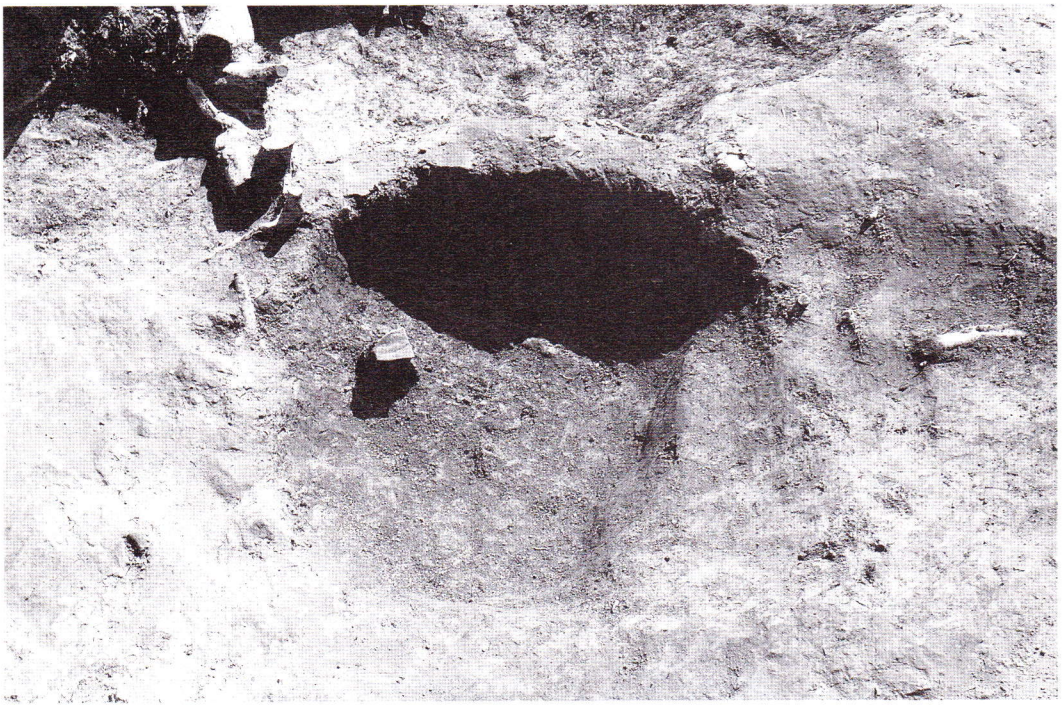
調査区地形測量図及び土層図


溝 2
溝 1
土坑 1
土坑 2
溝 3
0
10m

遺構全体図


土坑 1
土坑 2
炭の堆積
仮0m
仮0−1.00m
1.第 1 層　灰黄色砂質土（2.5Y 7/3　（浅黄）粗砂混シルト）
2.第 2 層　灰黄褐色砂質土（2.5Y 6/3　（にぶい黄）粗砂混シルト）
3.第 3 層　濁黄褐色砂質土（10Y R 5/3　（にぶい黄褐）粗砂混シルト）
4.第 4 層　暗黄褐色砂質土（10Y R 5/2　（灰黄褐）粗砂混シルト）
1.第 1 層　褐黄色砂質土（10Y R 7/2　（にぶい黄褐）粗砂混シルト）
2.第 2 層　暗黄褐色砂質土（10Y R 5/2　（灰黄褐）粗砂混シルト）
3.第 3 層　黒色炭層（2.5Y 3/1（黒褐）シルト）
赤変部分
0
2m

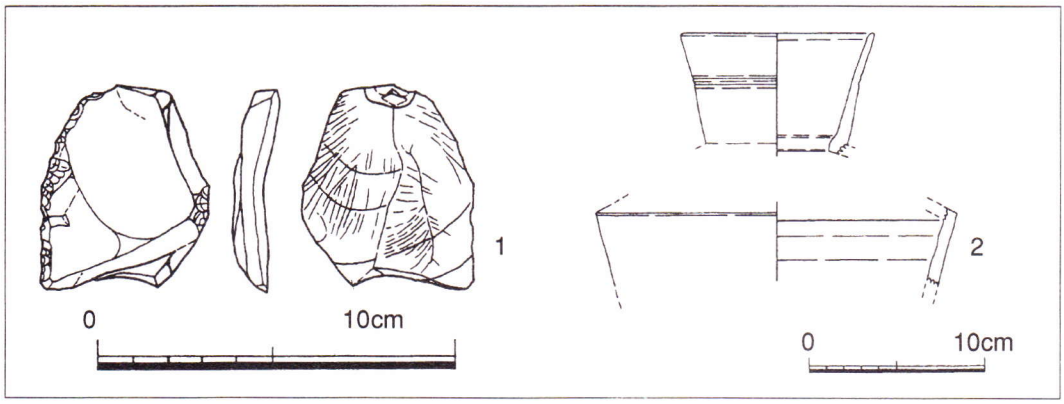
遺構実測図



土坑１（北から）

土坑２（西から）

(4)出土遺物　出土遺物は須恵器が12点、土師器が1点、サヌカイト剥片が1点であり、すべて細片であった。須恵器12点は出土した位置・層位はまちまちであるが、すべて同じような焼成・色調・形状を呈しており、同一個体で平瓶あるいは長頸壷と考えられる（遺物実測図の２）。色調は内面が淡灰色、外面が灰色を呈し、肩部には自然釉が付着している。焼成はやや軟質で、胎土には長石と黒色粒を少量含む。口径10.5cm、高さ6.2cmを測るラッパ状に開く口縁部をもち、肩部は径20cmを測る。調整は内面はナデにより、外面はヘラケズリの後にナデにより調整されている。古墳時代後期～奈良時代頃のものと思われる。サヌカイト剥片（遺物実測図の１）は灰色で厚さ最大7mm、最長6.4cmを測る。



遺物実測図

まとめ

『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』によると60m×30mの方形状土壇とされているが、現状地形を測量した結果、調査時の地形は山頂部に約30m×12mの規模を測る長楕円形の平坦面をもつ丘陵地であることがわかった。

また発掘調査の結果、次のようなことがうかがえる。まず岩盤上面から溝(溝3)・土坑(土坑1・土坑2)が掘り込まれる。土坑1・土坑2は形及び規模が共通することから、規格性をもつものと思われる。また、それらは内壁が火を受けていることから火葬墓の可能性が考えられる。そして土坑1が埋没後、頂上部に第2層(灰黄色砂質土)が堆積する。第2層は土坑1から出土した須恵器と同一個体とみられる破片を含むことから、山頂部の整地の結果形成されたものと考えられる。北側の斜面に堆積している第3層(褐灰黄色砂質土)はこの第2層の流れ落ちたものとみられ、のちにこれらの上面から溝(溝1・溝2)などが掘り込まれたと考えられる。

(木村善晶)

16. 太田・黒田遺跡 第23次調査

調査地　和歌山市黒田158－1

調査面積　7㎡

位置と環境

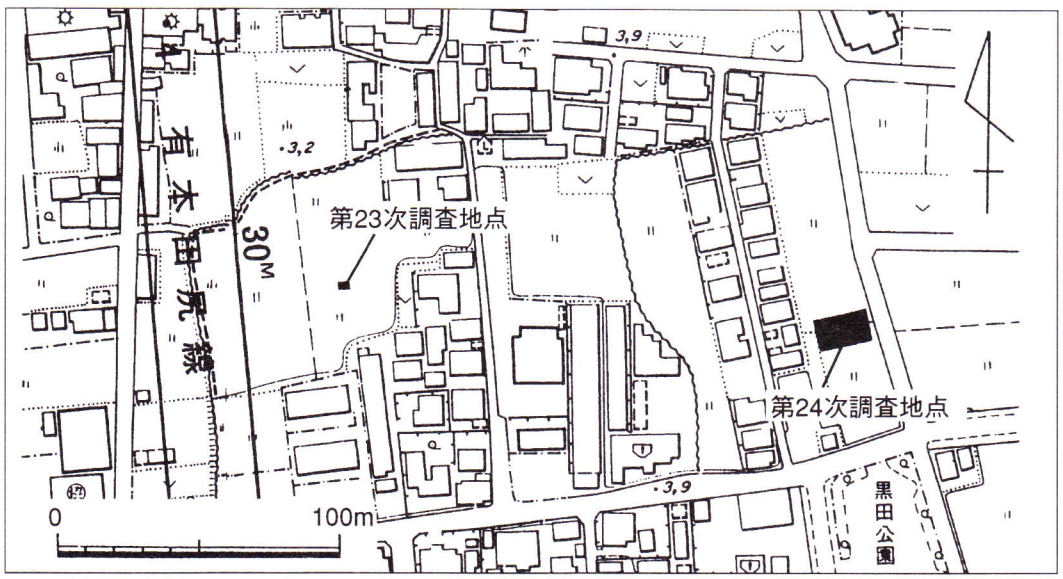
太田・黒田遺跡は、県下でも有数の弥生時代の集落遺跡である。紀ノ川南岸の平野部に位置し、紀ノ川の有力な分流である出水川の氾濫によって形成された自然堤防上に立地する。南北約750m、東西約400mの範囲をもち、現在のJR和歌山駅の東側に広がっている。今回の調査地は遺跡の北縁部に相当し、標高は2.9mを測る。

調査内容

調査は、東西3.5m、南北2mのトレンチ調査により行った。その結果、遺構面を3面確認することができた。

第1遺構面においては、トレンチを北東から南東に向かって走る溝を1条検出した。深さ約30cmを測り、調査面積が限られているため東肩だけが検出できた状況であったが、おそらく幅約4.5mの溝であると推測される。埋土は弥生時代中期の層と古墳時代後期の層に大きく分かれ、おそらく弥生中期中葉に掘削され機能していたが次第に埋没し、中期後葉になって再掘削したものとみられる。その後古墳時代まで存在していたが、古墳時代後期になって埋没したものと考えられる。

第2遺構面では、弥生中期中葉のピットを6基、土坑4基を検出することができたが、



調査位置図

調査区が狭小のためその実態を明かにすることはできなかった。しかし、ピット6基の内4基はその形状より杭跡と考えられる。第3遺構面については、明確な遺構を検出することができなかったが、砂質土層の落込みがみられ、自然流路の痕跡と考えられる。

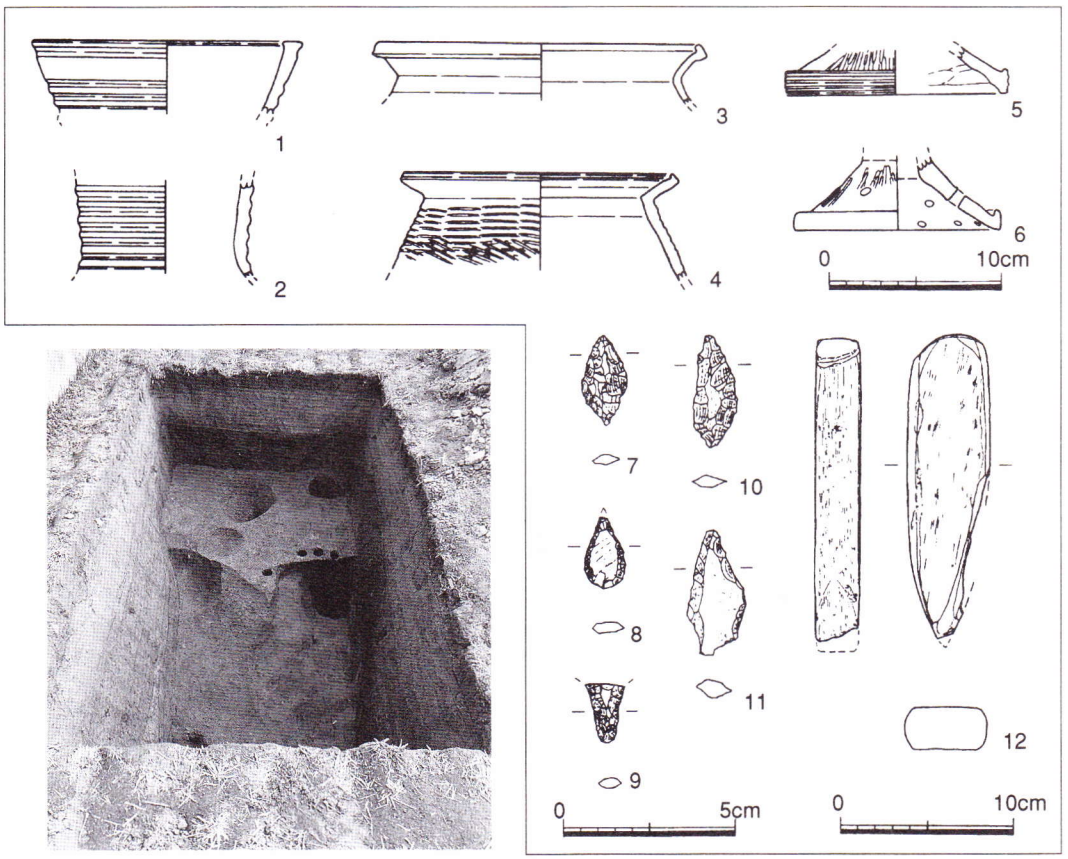
遺物としては、弥生土器を中心にコンテナ1箱分が出土している。弥生中期の土器を主とし、前期の甕の底部が混入ではあるが出土している。器形は壷、甕、高杯等である。また、石鏃や石斧等の石器がある。石鏃は尖基無茎式、円基無茎式、凸基有茎式の3種みられ、全てサヌカイト製である。石斧は柱状片刃石斧であり、緑色片岩製である。その他の遺物としては、古墳時代の須恵器や中世の瓦器椀等がある。

まとめ

今回調査した地点は遺跡の北部縁辺に位置し、また弥生時代には北太田、南黒田を中心に広がる微高地の縁辺部に相当すると考えられ、これまで遺跡の内容が希薄になるとみられていたが、調査区が狭小にも関わらず明瞭な弥生時代の包含層および遺構を確認することができた。あまり実態が明かでなかった遺跡の縁辺部の層序等、基本資料を得ることができ、意義のあるものであったと言える。

(栗本美香)

調査区全景（西から）



遺物実測図

17. 太田・黒田遺跡 第24次調査

調査地　和歌山市黒田169－1

調査面積　299㎡

位置と環境

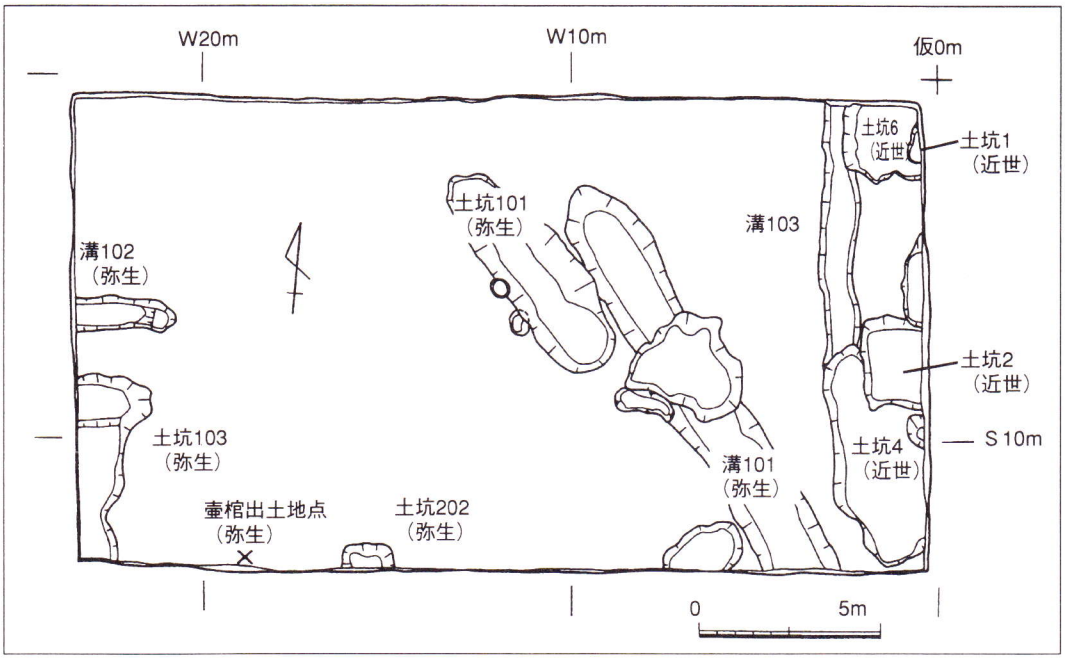
調査地は、第23次調査地から東へ約170m隔てた地点に位置し(第23次調査位置図参照)、遺跡の北東部縁辺に相当する。また、調査地から南へ約50m隔てた所にある黒田公園では、昭和45年(1970)に銅鐸(外縁紐式)が出土しており、今回の調査地は集落の境界付近であると予想されていた。調査対象地の現況は水田であり、標高は約2.8mを測る。

調査内容

調査は南北13m、東西23mの調査区を設け行った。その結果、遺構面を2面確認することができた。遺構面までは比較的浅く、第1遺構面までは地表から約30cm、第2遺構面までは約40cmの深さである。

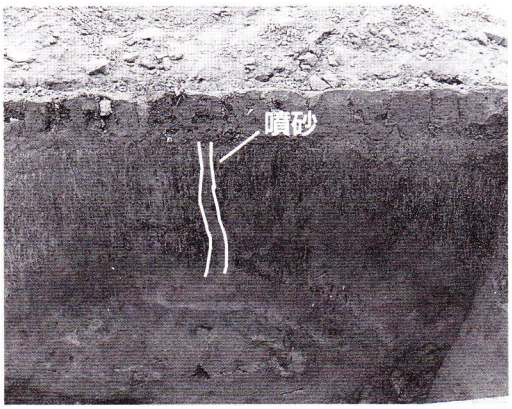
第1遺構面では、弥生時代中期後葉の遺構と近世のものが同一面上にあり、弥生時代中期後葉のものとしては、土坑が3基、溝3条、近世では粘土採掘坑とみられる土坑4基が主な遺構である。弥生時代中期の土坑には遺物があまりみられずその用途は不明であるが、その内土坑101からは遺物が比較的多く出土した。南北方向に約6.5mの長さをもち、深さ約30cm、幅約2mの規模を呈する。黒褐色系の粘質土を埋土にもち、明瞭なタ

調査区全景（東から）

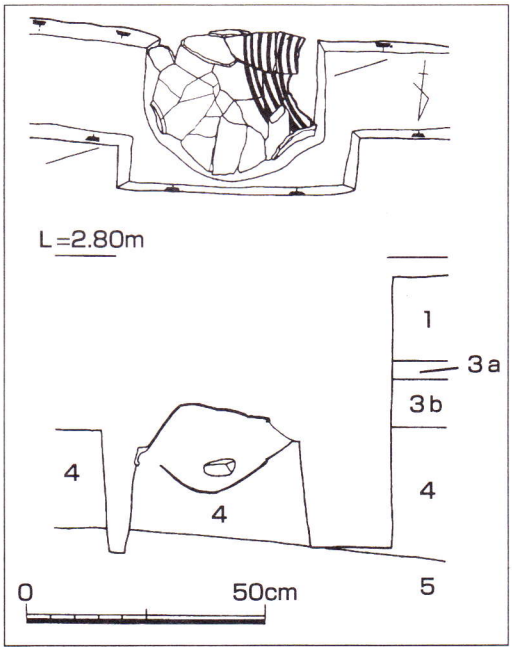


遺構全体実測図

土器棺内石器出土状況

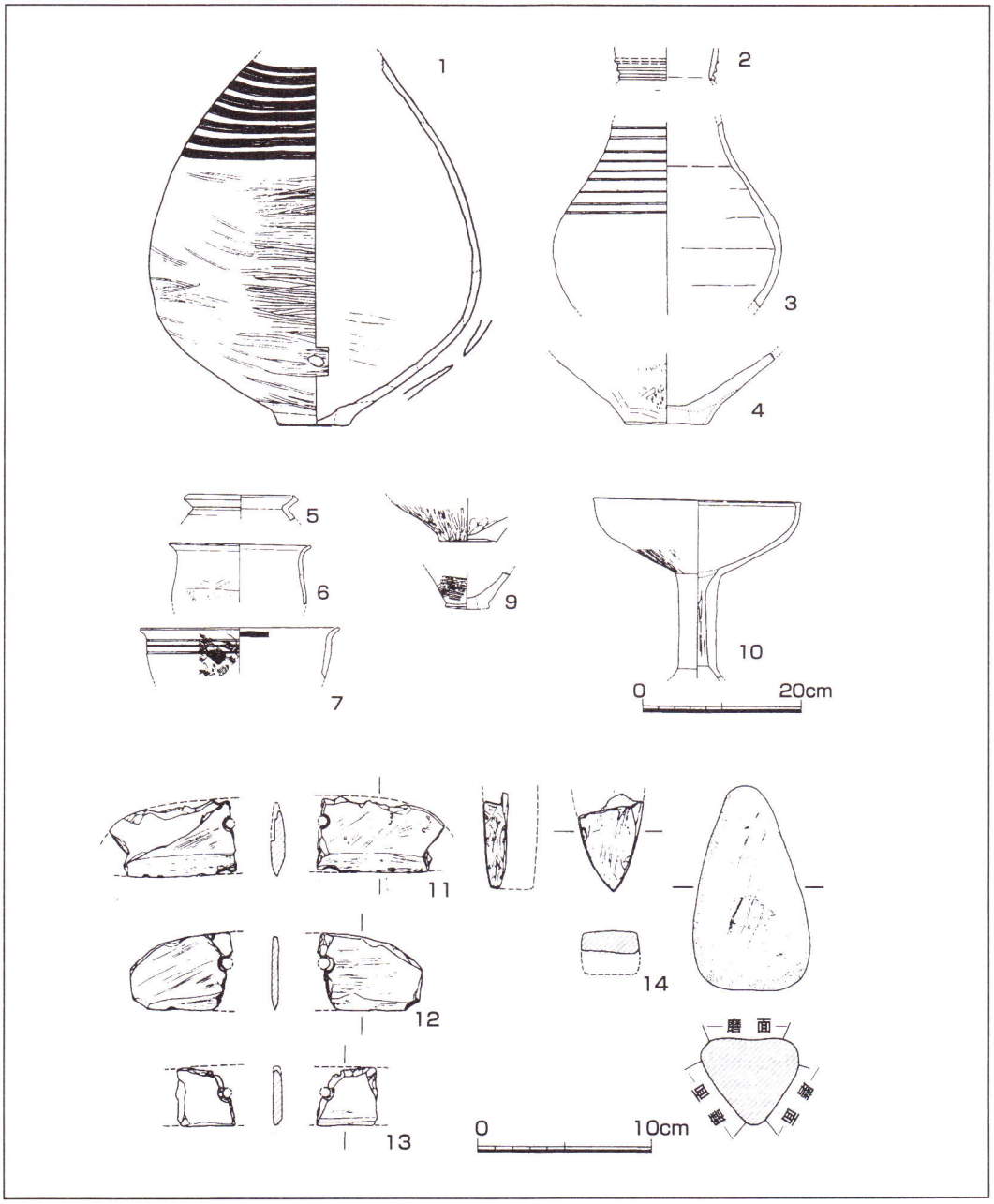


噴砂



土器棺出土状況実測図

(※ただし、石器は見通し図である)



遺物実測図

タキメをもつ甕の底部等、畿内第Ⅳ様式併行の土器を含む。また溝については小規模で、3基の内溝102と103の2基が規模、埋土ともに類似しており、遺物の出土量が少ない。溝101は深さ約26cm、幅約2mの規模を呈し、調査区内における総延長は約12mを測る。南北軸を主軸として西へ35°の方向をとり、畿内第Ⅳ様式併行の土器をはじめ遺物量も多く他の2基とは性格を異にする。

第2遺構面では、弥生時代中期の土坑1基(土坑202)と、土器棺とみられる弥生土器が1個体出土している(図参照)。土坑については遺物が少なく、そのプランが調査区の範囲外にあるため詳細は不明である。土器棺は、調査区の南辺内側の側溝を掘削途中発見したもので、掘肩は残念ながら明確にできなかった。土器棺は壷を使用しほぼ水平に横たえられており、口縁部側を南西方向に向けている。頸部から上部は、意図的に打ち欠いたのか欠損しており、また胴部下半に穿孔が1ヶ所みられる。通常棺の蓋として別の土器もしくは石が用いられるが、土器棺の付近からはその他の土器や石は出土していない。しかし、土器棺の中から石器が1点出土している。石器(出土状況写真図版及び実測図参照)は砂岩製であり、三角錐状を呈する。3面は明かに研磨されており、磨石として使用されていたのか、うち1面は縦斜め方向に数条の擦痕があり、中央部が若干円形に擦り窪んでいる。太田・黒田遺跡において土器棺内に石を伴う例は、昭和63年(1988)の第21次調査時に、今回の調査地から南へ約200m隔てた地点で確認されているが、緑色片岩製の幅10cm、長さ25cmの扁平なもので、加工痕は認められなかった。土器棺として使用されていた壷(遺物実測図の1参照)は、胴部最大径が下半部に下がり、丸みをもって大きく張り出す形状であり、頸部より上部は欠損しているが広口壷とみられる。外面はヘラミガキを全面に施し、後に胴部上半部をナデによって平滑にし、その上を8条の櫛描き直線文によって加飾している。内面は剥離が著しく観察が困難であるが、ナデ調整されているとみられる。

遺構としては以上であるが、今回の調査では噴砂の痕跡を確認している。噴砂は大地震の際に起る地殻変動によって地下の砂層の砂が地表に噴き上がる現象であり、その発生年代を限定することはできなかったが、噴砂の断面観察の結果、弥生時代中期後葉以前とそれ以降現代に至る間の二時期にわかれて発生したと考えられる。砂脈の方向は、磁北よりN−7°−W〜N−20°−Wを測る。

遺物は弥生土器が大半を占める。中期を中心に、前期末から中期後葉にかけてのものがみられる。石器は少量であり、石包丁も3点を数えるのみである。

まとめ

第24次調査では遺構、遺物ともに希薄であり、明瞭な弥生時代の包含層が得られなかったが、元来微高地であった当地が後世になって削平を受けたためと考えられる。しかし土器棺を確認することができ、集落の縁辺のさらに墓域であった可能性が高く、遺構は少なかったものの、弥生前期の土器を確実に含む層が確認され、太田・黒田遺跡が形成される当時の資料として重要である。また今回本調査地では、噴砂も検出され古環境を考える上で貴重な資料を得ることができたと言える。

(栗本美香)

Ⅲ．普及啓発活動

1.書籍刊行

埋蔵文化財の発掘調査報告書を刊行し、関係機関等へ配布した。

第７集　『史跡　和歌山城　第１２次発掘調査概要報告書』
—下水道管埋設工事に伴う調査報告—　（平成６年２月）

第８集　『鳴神Ｖ遺跡　発掘調査概要報告書』
—和歌山市都市計画道路松島本渡線建設に伴う調査報告—（平成６年３月）

第９集　『車駕之古址古墳　範囲確認調査概報』　（平成６年３月）

2.和歌山市文化財ニュース発行

文化財に対しての理解を深めてもらうために、市内の小中学校と一般の方々を対象に『和歌山市文化財ニュース』を発行した。

『和歌山市文化財ニュース』No.10（１９９２年１１月）「鷺ノ森遺跡の調査」
『和歌山市文化財ニュース』No.11（１９９３年１１月）「鳴神Ｖ遺跡の発掘 その１」
『和歌山市文化財ニュース』No.12（１９９４年２月）「和歌山城の発掘 その２」

3.現地説明会開催

和歌山市教育委員会と共催で発掘調査の現地説明会を実施した。

車駕之古址古墳（第１～３次調査）平成４（１９９２）年７月１２日（日）
城山遺跡　〃　５（１９９３）年４月１７日（土）
鳴神Ｖ遺跡（第３次調査）　〃　（　〃　）年１２月４日（土）

鳴神Ｖ遺跡（第３次調査）現地説明会

平成8年3月31日

和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報3

—平成4（1992）・平成5（1993）年度—

編集・発行　(財)和歌山市文化体育振興事業団

和歌山市西汀丁29番地

印　　刷　西岡総合印刷株式会社

© (財)和歌山市文化体育振興事業団　1996

茶臼山古墳円筒埴輪列